

高岡市埋蔵文化財調査報告 第25冊

石塚蜻保遺跡調査報告

— 県道高岡環状線建設工事ともなう発掘調査 —

2013年3月
高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査報告 第25冊

石塚蜻保遺跡調査報告

—— 県道高岡環状線建設工事ともなう発掘調査 ——

2013年3月
高岡市教育委員会

序

高岡市域においては341箇所もの遺跡が周知されています。これら多くの遺跡で醸成された文化は、ご先祖から代々受け継がれ、現代へとつながっています。本市におきましては、長年にわたりこれらの保護を実施して参りました。

このたび報告いたしますのは、平成20年から屋外本発掘調査を実施した県道高岡環状線の道路工事にともなう石塚蛸保遺跡の発掘調査成果です。

調査の結果、縄文時代後期の生活相を確認し、佐野台地における生活史がさらに古い時代にまで遡ることが確認されました。また、弥生時代中頃の玉つくりの範囲が従来の知見よりさらに南へ拡大することが判明しました。

本書が郷土における歴史探求や学術研究にご活用いただければ幸いです。

末尾になりましたが、今回の発掘調査の実施にあたり、ご協力いただきました関係各位、地元の皆様には、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

高岡市教育委員会
教育長 氷見 哲正

例 言

- 1 本書は、高岡市教育委員会が実施した石炭精採遺跡の本発掘調査の報告書である。
- 2 当調査は、富山県による県道高岡環状線の建設工事にともない実施したものである。
- 3 現地調査は、平成20年度から23年度までに富山県より委託を受け高岡市が実施した。また、室内整理調査は現地調査と並行して行い、24年度に報告書の編集・作成作業を行った。
- 4 屋外発掘調査と室内整理調査については、23年度までは民間発掘調査会社へ業務委託契約を締結し、且つ高岡市職員が監督員となり実施した。24年度においては市直営にて報告書の編集及び作成を行った。
- 5 発掘調査にかかる遺物等の資料は、すべて高岡市教育委員会で一括保管している。
- 6 調査関係者は以下のとおりである（高岡市教育委員会文化財課）。

課 長	東保英則（20年度）	大巻宏治（21～22年度）	高田克宏（23～24年度）
総括専門員	人村友則（21年度）	高田克宏（22年度）	
主 幹	岡山哲朗（20年度）	中野山美子（22～23年度）	
副 上 幹	山口辰一（20～21年度）		
主 査	根津明義（21～24年度）		
主 任	栗山雅夫（20～21年度）		
主 事	田上和彦（24年度）		
事 務 員	田上和彦（23年度）		
嘱 託 職 員	田上和彦 道振弘明（22年度）		
	阿原智子 千田友子 宮野美重子（23年度）		
	江口雅子（23～24年度）		
	杉山大晋（24年度）		
	中野由美子（24年度）		
- 7 調査については開始当初から21年度途中までは山口が担当し、以後は根津が引き継いだ。

凡 例

- 1 遺構等の記号は以下のとおりである。

SA	: 橋址	SD	: 溝状遺構	SF	: 道路遺構	SK	: 土坑	P	: ビット
NR	: 河川跡	SX	: 性格不明遺構・その他遺構						
- 2 当該調査区に全体が所在する遺構については、調査区番号を冠したうえで当該調査区ごとに通し番号を付した。
- 3 複数調査区にまたがる遺構がある場合については、同一種類の遺構全てに対し調査区番号を冠せず、遺構の種別ごとに通し番号を付した。
- 4 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とする。異なるものはその縮尺を当該図周辺に付記した。
- 5 各遺物実測図に付した3～4桁の番号については、ド2桁が調査区内の通し番号で、他は調査区番号を表す。
- 6 遺構図面の縮尺については、遺構の規格により適宜縮尺を変更し同図に明記した。
- 7 本書に掲載の現地地図については、『高岡市基本図』をもとに加筆・修正のうえ使用した。

目 次

序

例 言

凡 例

周辺地域と調査の概要等	1
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）1区	5
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）2区	8
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）3区	13
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）4区	15
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）5区	30
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）6区	39
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）7区	45
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）8区	52
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）9区	55
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）10・11区	61
石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）12区	82

挿 図

- 第1図 石塚蜻保遺跡と周辺の遺跡
- 第2図 庄川扇状地の地積地図と石塚蜻保遺跡
- 第3図 石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）各調査区位置
- 第4図 石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）1区 調査区概観図
- 第5図 石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）1区出土遺物実測図
- 第6図 石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）2区全体図
- 第7図 石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）2区河川跡 NR01 実測図

- 第 8 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 2 区トチ塚 SX01 実測図
- 第 9 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 2 区出土遺物実測図
- 第 10 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 3 区全体図
- 第 11 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区全体図
- 第 12 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区溝状遺構 SD402 全体図
- 第 13 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区溝状遺構 SD402 断面図
- 第 14 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区溝状遺構 SD405 全体図
- 第 15 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区遺構図
- 第 16 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4・6 区河川跡 NR02 全体図
- 第 17 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区河川跡 NR02 断面図
- 第 18 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区出土遺物実測図 縄文土器・弥生土器・石器
- 第 19 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区出土遺物実測図 中世・近世
- 第 20 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4 区出土遺物実測図 木製品
- 第 21 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 5・7 区全体図
- 第 22 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 5 区河川跡 NR02 上層
- 第 23 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 5 区出土遺物実測図 縄文土器
- 第 24 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 5 区出土遺物実測図 縄文土器
- 第 25 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 5 区出土遺物実測図 弥生土器
- 第 26 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 5 区出土遺物実測図 打製石斧
- 第 27 図 出土須恵器実測図
- 第 28 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 4・6 区調査区全体図
- 第 29 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 6 区東側剖図
- 第 30 図 S D601 出土須恵器
- 第 31 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 6 区 出土遺物実測図 弥生土器・管玉製作過程資料
- 第 32 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 5・7 区全体図
- 第 33 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 7 区大型土坑群 各土坑土層断面図 1
- 第 34 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 7 区大型土坑群 各土坑土層断面図 2
- 第 35 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 7 区出土遺物実測図
- 第 36 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 8 区全体図
- 第 37 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 8 区出土遺物実測図
- 第 38 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 9 区 調査区概観図
- 第 39 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 9 区 竪穴状遺構 SX901 概観図
- 第 40 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 9 区遺物実測図 縄文土器
- 第 41 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 9 区遺物実測図 縄文土器・打製石斧・須恵器・土師器・珠洲
- 第 42 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11 区上層遺構全体図
- 第 43 図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11 区下層遺構全体図

- 第44図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 9~12区遺物集中地点
- 第45図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 縄文土器
- 第46図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 縄文土器
- 第47図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 縄文土器
- 第48図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 縄文土器
- 第49図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 縄文土器
- 第50図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 縄文土器
- 第51図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 縄文土器
- 第52図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 土師器・須恵器
- 第53図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 珠洲・青磁・陶磁器
- 第54図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 打製石斧
- 第55図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 打製石斧
- 第56図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図 打製石斧・礫器・磨製石斧
- 第57図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 12区調査区全体図
- 第58図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 12区出土遺物実測図 縄文土器
- 第59図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 12区出土遺物実測図 縄文土器
- 第60図 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 全調査区

写真図版

- 図版 01 1・2区 調査区全景 (南西方向より)
1区 調査区全景
- 図版 02 2区 調査区全景 (南西より)
2区 河川跡 NR01 (南東より)
- 図版 03 2区 河川跡 NR01 (北西より)
2区 河川跡 NR01 (南方より)
- 図版 04 2区 河川跡 NR01 (北西より)
2区 河川跡 NR01 (南東より)
- 図版 05 2区 河川跡 NR01 (北方より)
2区 ト子塚 SX201 検出状況 (北西より)
- 図版 06 3区 調査区全景 (西方より)
3区 調査区全景 (南方より)
- 図版 07 4・6区 調査区全景 (西方より)
4・6区 河川跡 NR02 全景 (南方より)
- 図版 08 4区 河川跡 NR02 最深部上層堆積状況 (南方より)
4区 河川跡 NR02 倒木 (木道か) 南方より

- 図版 09 4区 溝状遺構 SD402 (北西より)
4区 槽址 SA401 (西方から)
- 図版 10 5・7区 調査区全景 (北西より)
5区 調査区全景
- 図版 11 5区 河川跡 NR02 上層完掘状況 (南西より)
5区 河川跡 NR02 (北方より)
- 図版 12 4・6区 調査区全景
6区 土坑 SK602 土層堆積状況 (南方より)
- 図版 13 6区 土坑 SK601 遺物出土状況 (南方より)
6区 土坑 SK602 出土弥生土器 (北方より)
- 図版 14 5・7区 調査区全景 (北西より)
7区 調査区全景
- 図版 15 7区 土坑 SK701 完掘状況 (東方より)
7区 土坑 SK712 完掘状況 (東方より)
- 図版 16 8区 調査区全景
8区 調査区全景 (北西より)
- 図版 17 9・10・11・12区 調査区全景 (北西より)
9区 調査区全景 (南東より)
- 図版 18 9区 竪穴状遺構 SX901 (南西より)
9区 竪穴状遺構 SX901 遺物出土状況 (北方より)
- 図版 19 9・10・11・12区 調査区全景 (西方より)
10・11区 調査区全景 (西方より)
- 図版 20 10・11区 道路遺構 SF01 (SD1003・1004) 東方より
10区 溝状遺構 SD1001・溜井状遺構 SX1009 (東方より)
- 図版 21 10区 遺物集中地点 SX1003 (北東より)
10区 遺物出土状況 (北方より)
- 図版 22 9・10・11・12区 調査区全景 (南東より)
12区 調査区全景 (南東より)
- 図版 23 12区 道路遺構 SF02 (SD1201・1202) 東方より
12区 方形周溝状遺構 SX1201 (北方より)

周辺地域と調査の概要等

周辺の環境

石塚蛸保遺跡は、庄川水系により形成された扇状地と、その東西を流れる千保川と祖父川により浸食・形成された「佐野台地」に所在する。

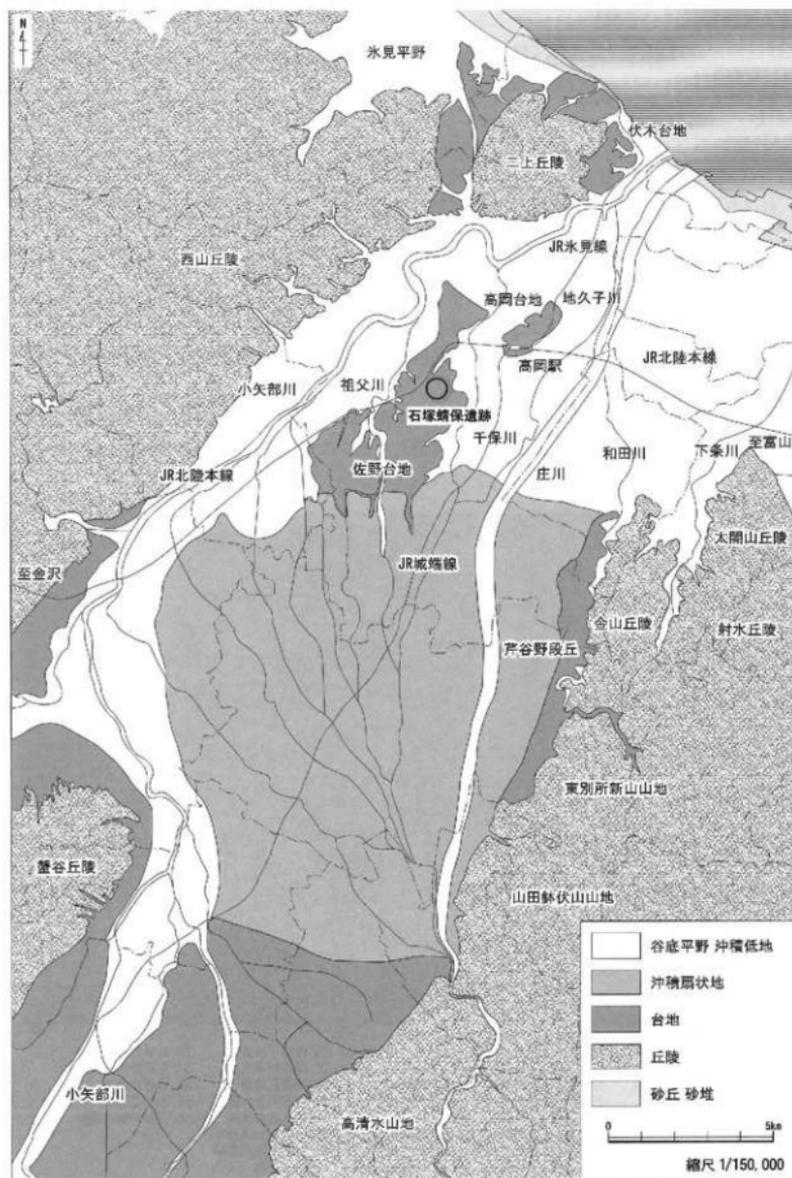
この台地上には、石塚蛸保遺跡を含む複数の遺跡が密集し一つの遺跡群を形成している。周辺における最古の歴史的様相は、中保B遺跡などの成果から縄文時代後期と目される。しかし、次代は弥生時代中期後半まで断絶するため、この最古の様相は現行の編年が不変であるかぎり単発的な存続を呈したとみられる。ちなみに、今回の石塚蛸保遺跡の調査により、後続する弥生時代中期後半の様相とは土層的にも1層の中間層が存在することが確認されている。

周辺において歴史的様相が継続性をもつのは弥生時代中期後半以降である。畿内第3様式の櫛描文土器の時代であり玉作りを伴い、著名なところでは石塚蛸保遺跡の北側に所在する石塚遺跡が挙げられる。



- | | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 石塚蛸保遺跡 | 9. 中木津遺跡 | 17. 石塚六方遺跡 | 25. 西藤平蔵遺跡 | 63. 高田新茅遺跡 |
| 2. 下佐野遺跡 | 10. 西木津遺跡 | 18. 辻遺跡 | 26. 蔵野町東遺跡 | 64. 高田新百俣遺跡 |
| 3. 西佐野千代遺跡 | 11. 北木津遺跡 | 19. 樋詰遺跡 | 27. 蔵野町遺跡 | 65. 小竹B遺跡 |
| 4. 泉ヶ丘遺跡 | 12. 上北島遺跡 | 20. 中保C遺跡 | 28. 荒見崎村内遺跡 | 66. 小竹C遺跡 |
| 5. 諏訪遺跡 | 13. 下北島住吉遺跡 | 21. 中保A遺跡 | 58. 赤丸古村遺跡 | 67. 下老子笹川遺跡 |
| 6. 東木津遺跡 | 14. 石塚江之戸遺跡 | 22. 中保B遺跡 | 60. 近世北陸遺跡 | |
| 7. 石塚遺跡 | 15. 石塚五依田遺跡 | 23. 辻南遺跡 | 61. 立野地頭田遺跡 | |
| 8. 石名瀬日遺跡 | 16. 石名瀬A遺跡 | 24. 荒見崎北遺跡 | 62. 駒方遺跡 | |

第1図 石塚蛸保遺跡と周辺の遺跡



第2図 庄川扇状地の地積地図と石塚崎保道跡

弥生時代の後期頃には方形周溝墓が造営されるようになり首長層の存在を窺わせる。ただし、この墓制は石塚遺跡や石名瀬A遺跡をはじめとする遺跡群の西側だけではなく、東側の下佐野遺跡でも確認されている。またこの傾向は古墳時代にも継続され東西の両側に前方後方墳を含む墳墓群が形成される。

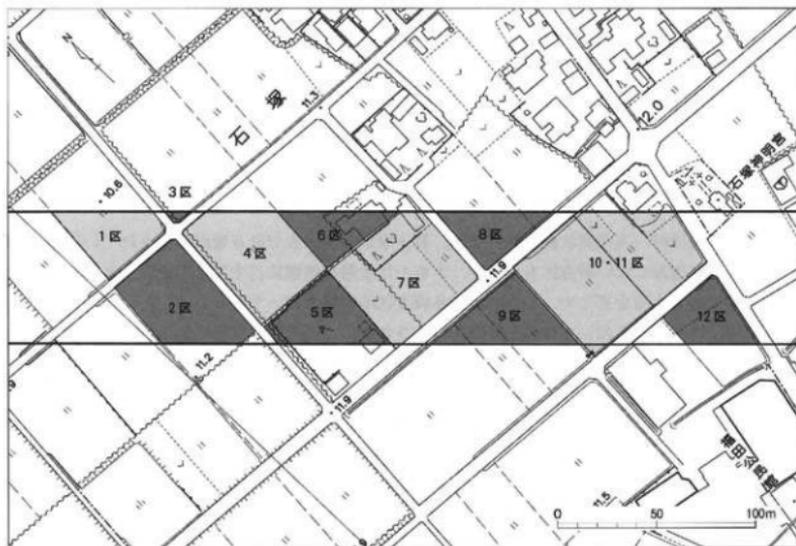
古代においては、いまのところ遺跡群の東側で官衙的な施設が存在したとみられる。東木津遺跡や下佐野遺跡がその代表格であり、各種の木簡から窺える文書事務や、計画性をもって造営された掘立柱建物群、「西大家」「宅」「曹司」などの墨書土器、その他官衙的な遺物がその証左とされる。

中世については、高岡市内では文献資料が希少となるため考古学的な調査が注目をされる状況にある。石塚蜻保遺跡の周辺では福田荘などが所在した可能性が指摘されているが、より広範囲な調査により条理遺構などの把握も可能になるとみられる。

石塚蜻保遺跡の概要

石塚蜻保遺跡は、上述した歴史的様相を呈する佐野台地上の石塚遺跡群の一角として所在する。北西側には弥生中期の集落遺跡として注目をされた石塚遺跡のほか、中世を中心とする石塚江之戸遺跡が所在する。

本遺跡は、昭和40年代に縄文土器片を採集したことにより存在が周知されたとされる。平成2年（1990）には高岡市教育委員会が実施した分布調査によりこの確認を試みたが、遺物の採集量も多くはなく、存続年代は従来どおり「縄文時代晩期」と仮定するに留まったほか、



第3図 石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 各調査区位置

包蔵地の範囲も未確定のまま点的なかたちとなった。

その後、石塚靖保遺跡はほとんど調査機会のないまま、今回の高岡環状線建設工事による大規模開発と直面する。平成18年から2カ年にかけて試掘調査が実施され、その結果、多数の遺構や遺物を検出し、本発掘調査の必要性のほか、包蔵地の範囲も拡大することとなった。

調査にいたる経緯・経過

富山県高岡土木センターより県道高岡環状線の建設にかかる埋蔵文化財包蔵地の照会が高岡市教育委員会あてに打診された。協議の結果、まずは対象地に試掘調査を実施し地下における埋蔵文化財の有無や内容を確認し、そのうえで必要に応じ建設工事に合わせ随時本発掘調査を実施していくことで合意した。

もともと、この工事計画は高岡市佐野から同六家に至るもので、複数の埋蔵文化財包蔵地を通過するうえに、概ね東方から西方へと工事を進める工程であったため、当初は東端に位置する下佐野遺跡から調査が着手され、最も東方にある石塚靖保遺跡は試掘・本調査とも全体計画の終盤に実施する運びとなった。

こうした中、石塚靖保遺跡の試掘調査は平成18年から2カ年にかけて実施され、その結果、約20,000㎡に対し本発掘調査を要するものと判断され、20年度から4カ年度にわたり実施された。室内整理調査については屋外発掘調査と並行して行い、23年度までに基礎的なものを概ね終了した。そして翌24年度に報告書の編集・作成作業を経て全業務を終了し、今日に至る。

屋外発掘調査は開発側の工事工程に合わせ小計13地区にのぼる。総対象面積が19,641㎡と広大であるため、監督業務他を除き、業務の多くを民間発掘調査会社へ業務委託するかたちをとった。各年度の調査地区と対象面積については以下のとおりである。

なお、22年度については屋外発掘調査期間が限定されたため、4区及び8区は調査区を分割して発注したが、本書では本来の地区ごとに編集し報告した。

基本土層

石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）では、最上層から地山まで計6層が確認されている。これらが全て堆積しない調査区もあるが、本書では土層の堆積状況や整合性を窺うため、下記のように基本土層をまとめ、この呼称で各調査区の解説も統一することとした。

なお、4～7区においてはⅢ～Ⅴ層が検出されず、この位置には黒褐色土が堆積しているが、同層については後世の攪乱を受けているものと理解した。

各土層の内容は次のとおりである。

- I層： 黒褐色土 昨年度までの水田耕作土
- II層： 灰褐色土 昭和40年代の圃場整備の客土
- III層： 黄灰色粘質土 泥流堆積物と考えられる。弥生時代以降の遺構確認面となる。
- IV層： 黒褐色土 縄文時代後晩期～近世までの遺物を包含する層。
- V層： 同上
- VI層： 所謂「地山」、多くの地点で遺構確認面を兼ねる。

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 1区

調査区概観

1区は、石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）全体の北西端に位置する。これより西方は祖父川にむかい地形の下降することが試掘調査時に確認されたため、この辺りを遺跡の西限と理解した。

試掘調査では明確な遺構は検出されなかったが、遺物包含層様を呈する土層のほか、東に隣接する3区でも多数のピットが検出されたことから、担当者により本調査の対象とした。

屋外本発掘調査は平成20年に実施した。検出遺構はピット1基のみであるが、上記の遺物包含層様の土層の性格を明確にするため、格子状に5箇所のサブトレンチを設定し掘削を行ったが、人工的な掘り込みは確認できず、遺物の混入もみられなかった。

出土遺物としては、本書掲載の須恵器片や、中近世陶磁器片・石斧等があるが、いずれも表上からの出土である。

1区においては、基本土層に示す1層（昨季までの旧耕作土）とVI層（地山）の計2層が確認された。前者は厚さ15～35cmの暗褐色土層であり、遺物も前述のものが出土している。地山については当該地区では淡黄色粘質土を呈する。

検出物

土坑 SK101

1区においては土坑1基を検出した。平面形はやや不整の円形を呈し、長軸0.55m、短軸0.5m、最大深0.15m、覆土は暗灰色粘質土を呈する。出土遺物はない。

須恵器 甕

101は須恵器の甕の胴部片である。細片のため詳細な部位は不明であるが、焼成は良く胎土は密で砂粒を含む。調整は外面に叩き痕が、内面にはロクロナデを施す。1区表土中より出土した。

青磁

102は細片のため詳細な部位は不明であるが、口縁部から底部の付近かと思われる。焼成は良く胎土は密である。内外面に明緑灰色の施釉を施す。

伊万里

103は、皿の底部付近で削り出し高台を有する。焼成は良く、胎土は密である。内外面に透明釉を施す。

104は皿の底部で僅かながら削り出し高台を呈するとみられる。焼成は良好で胎土も密である。内外面に透明釉を施す。

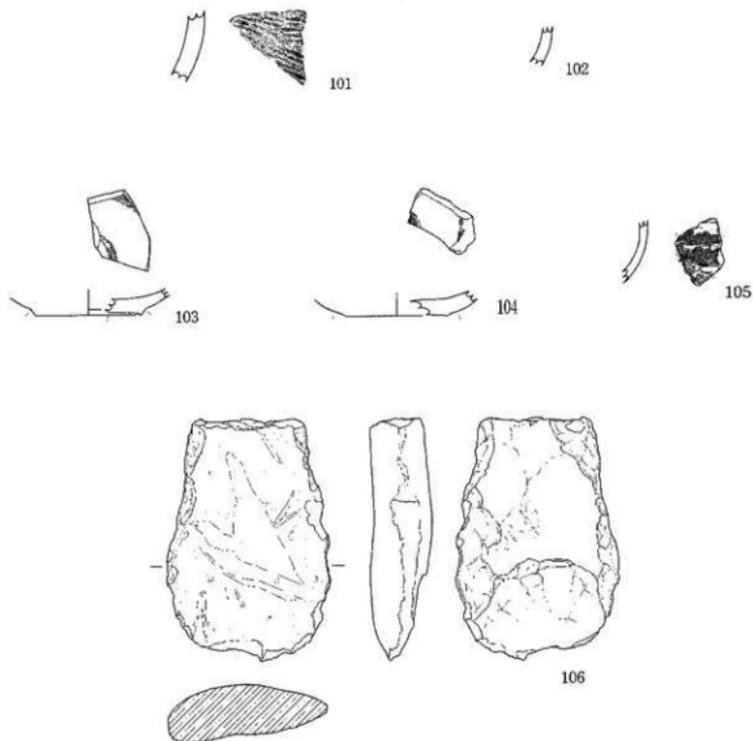


第4図 石塚峠保護遺跡（高岡環状線地区）1区 調査区概観図 縮尺 1/250

105は碗の胴部片である。焼成は良く胎土は密である。外面に透明釉を施す。内面の調整は横ナデである。

打製石斧

106は安山岩製の癩型の打製石斧である。刃部は欠損が激しく磨耗痕はない。周縁部表面にガジリ痕がある。重量は186.57g、最大長は残存で9.9cm、最大幅は残存で6.55cm、最大厚は残存で2.3cmをはかる。



第5図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）1区出土遺物実測図

縮尺： 打製石斧 1/2 その他 1/3

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 2区

調査区概観

前述の1区とともに高岡環状線地区の西端部に位置する。これより西側には断崖が存在し、この下降地形はさらに祖父川へと続くが、遺構の検出がこの台地上に限られることから、概ねこの2区が当遺跡の西端になるものと考えられる。

2区からは、大型の川跡が検出され、同遺構はやや屈曲をみせながら東方の4・5・6区にまで及ぶとみられる。

基本土層は地山を含め計4層に分類できる。最上層は第Ⅰ層とした旧耕作土であり、この下位には昭和40年代の土地改良時の客土であるある第Ⅱ層が堆積する。Ⅲ層からⅤ層は存在せず第Ⅱ層直下でⅥ層が現れ、この上面が遺構確認面となる。遺構の所在は調査区南方に偏重し、北側では遺構・遺物とも殆ど検出されていない。

検出遺構

溝状遺構

2区では計8条の溝状遺構が検出されている。これらはいずれも2区の南側に位置し、河川跡NR01より新しいものである。

このうちSD201・202・206・208は近世以降の溝状遺構である。SD204は、調査区南方において斜行する調査区辺に沿うようにはしり、削平された微高地の裾を巻くように北西へ向かう。2区の北西には祖父川に面した低地が存在するほか、覆上に粗砂を多く含むことから排水路として機能した可能性が考えられる。

同遺構からは、珠洲の甕や中世土師器の皿が出土しており、このことから中世に埋没したものと判断できる。また、SD204からは小片ながら土鏝片が2点出土しており、西方に位置する祖父川 の存在も鑑み周辺域での漁労の存在を検討したい。

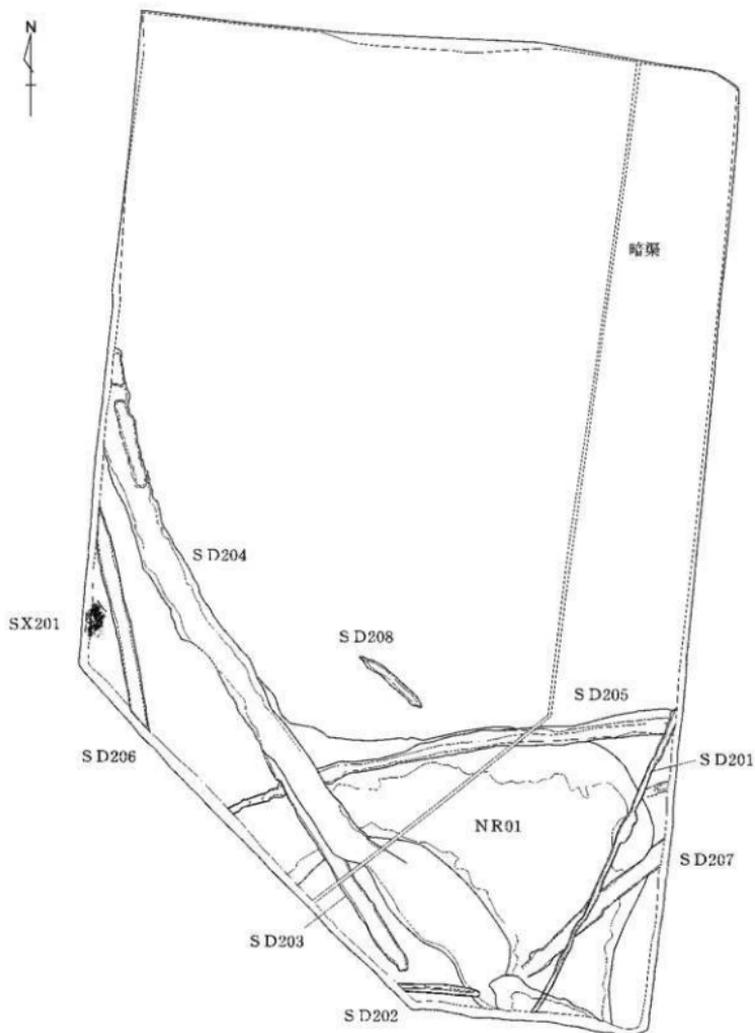
なお、調査区の南端に位置しともにSD204に切られるSD203及び205は、SD204よりも古い時代のもつとみられる。参考までに小片ながら土師器が出土している。また、調査区南東隅の付近で検出されたSD207は、弥生時代終末期の甕の破片を出土した。

河川跡NR01・トチ塚SX201

河川跡NR01は、調査区を北西から南東方向へ大きく蛇行して流れる。幅は概ね6～12mを呈し、最大深は1mを超えるが底面までの調査は行っておらず不明である。

遺構確認面から約40cmの地点で鉄分を含む硬化層が堆積するが、断面観察から流路の埋没後に溜池状に再掘削された遺構の堆積土と判断される。硬化層より上位には弥生時代から中世までの土器が少量混入しており、再掘削されたのは中世以降と考えられる。

硬化層の下が本来の流路であり幅は6～7mで一定している。流路内の上層には腐植土が厚さ30～40cm堆積している。この腐植土中からは多量の自然木が出土している。中には太さ60～70cmに達するものがあり、これらの多くは根株を残しながら流路内に倒れ込ん



第6图 石塚崎保護跡（高岡環状線地区）2区全体图 縮尺 1/300



NR01

- | | |
|--------------|--------------------------------------|
| 1 灰黄褐色砂質土 | 小礫多く含む。礫りなし。(5.701層土) |
| 2 灰黄色砂質土 | 混入物が少なく均一な層。混入物も少量。礫りあり。砂水跡(小字区画) |
| 3 赤褐色砂質土 | 灰色粘質ブロックを多く含む。礫りなし。礫りあり。礫りあり |
| 4 灰黄褐色砂質土 | 礫物少量。灰黄色土・ブロックを含む。礫り中程度。 |
| 5 灰黄褐色土 | 礫物少量。礫物層(木・葉・糞)を多量に含む。礫りあり。礫りあり |
| 6 灰黄色土 | 礫物少量。礫物層(木・葉・糞)を多量に含む。礫り中程度。礫り中程度 |
| 7 灰黄色土 | 高層土層の下部に存在。礫り中程度。礫り中程度 |
| 8 灰オリーブ色砂質土 | 礫物多量を含む。礫り中程度。礫り中程度 |
| 9 灰黄褐色土 | 灰色粘質ブロック・ブロックを多量に含む。礫物少量。礫り中程度。礫り中程度 |
| 10 灰黄褐色土 | 灰オリーブ色砂質土・礫物少量。礫り・礫り中程度 |
| 11 赤褐色砂質土 | 礫物少量。礫り中程度。礫り中程度 |
| 12 灰オリーブ色砂質土 | 礫物少量。礫り中程度。礫り中程度 |
| 13 灰オリーブ色砂質土 | 礫物少量。礫り中程度。礫り中程度 |

第7図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）2区河川跡 NR01 実測図

上段：木製品出土状況 縮尺 1/300

下段：覆土断面図 縮尺 1/80

だ状態であった。種実遺体はトチやクルミが数多く出土している。

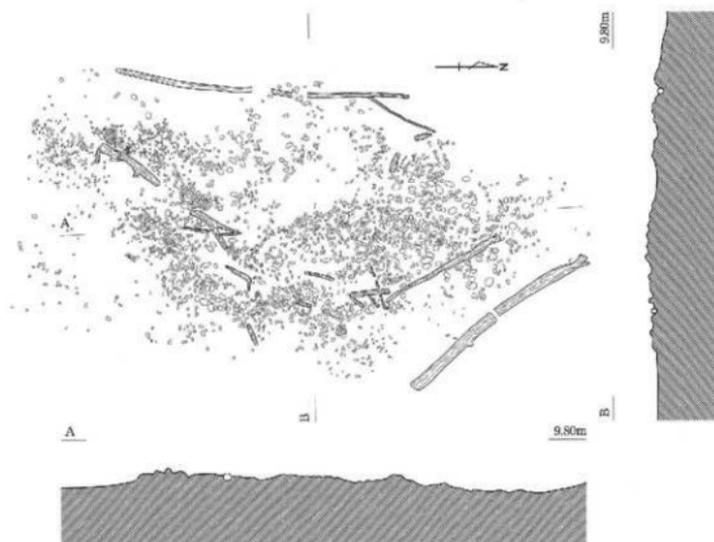
腐植土下の中層にはほとんど植物遺体を含まない砂質土が厚く堆積し、流水があったことが窺われる。この砂質土中には、流路北西部においてトチ塚 SX201 が検出されている。2.3m×1.2mの概ね隅丸長方形を呈する範囲内に、破碎されたトチノキの種子が折り重なるように集積したものである。堆積物の厚さは数cm程度であった。

なお、SX201 の形成時期を示す土器として、トチ塚の東側1mの位置から出土した縄文時代晩期の深鉢が一つの参考になる。

出土遺物

縄文土器

縄文土器については南方にある9・10・11区で比較的多く出土したが、2区でも201及び202が出土している。前者は、胴部中央から口縁部にかけて「く」の字状の口縁部をもち、その特徴から中屋式に該当するとみられる。後者は、胴部中央から口縁部にかけて直線的に外反する器形をもち、口縁部内面には浅い凹線が廻る。



第8図 石塚蟻保遺跡（高岡環状線地区）2区トチ塚 SX201 実測図

縮尺 1/20

石鏃

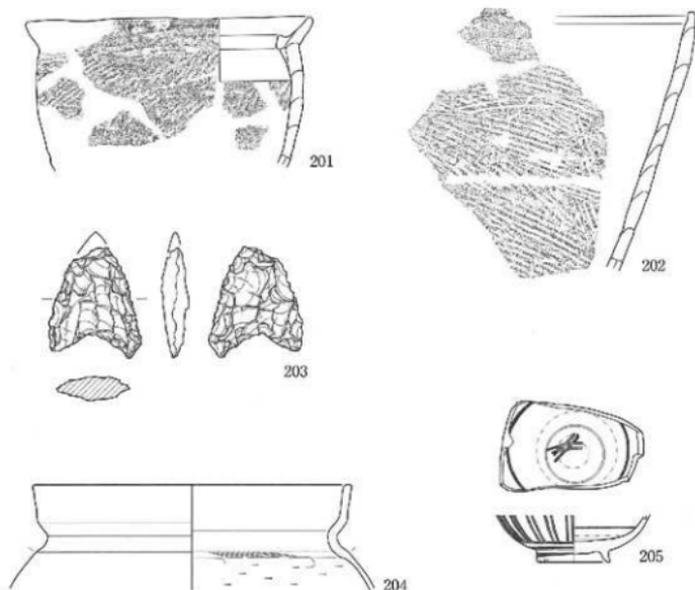
203 は溝状遺構 SD204 の覆土中より出土した無斑晶質安山岩製の打製石鏃である。凹基無茎で先端部は欠損する。

古墳時代 土師器

土師器の甕の口縁部から頸部にかけてのもの（204）が出土している。後世の摩耗により調整等は不明な部分もあるが、頸部内面付近にはハケメ、胴上半部にはヘラケズリがみられる。有段口縁を有する等、その器形的特徴から古墳時代前葉のものかと思われる。

近世 肥前磁器

205 は肥前磁器の碗であり、底部や高台や底部付近を残存する。内面の釉剥ぎ後に、製品の付着を防ぐアルミナ砂を塗布する。



第9図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）2区出土遺物実測図
203のみ縮尺1/2、他は縮尺1/3

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 3区

調査区概観

高岡環状線地区の西北端付近に位置する。南接する4区と検出遺構や遺物についても同様の様相を呈する。

試掘調査により複数のピット群を検出しており、また古代において水上交通路として活用された祖父川をのぞむ台地縁辺部に位置することから、建物跡等の検出も視野に本調査にのぞんだ。

基本層序

3区においては、隣接する1区と同様に、旧耕作土と地山の計2層のみが確認された。前者は厚さ15～35cmの暗褐色上層であり、地山については淡黄色粘質土を呈する。この状況から、当該地区は後世の攪乱により上面を削平されているものとみられる。

なお、出土遺物としては後述する唐津片1点が表土中より出土しているのみである。

検出物

土坑 SK301

3区北西端で検出した不整形の土坑である。片側は調査区外に達しており全容は不明であるが、確認される範囲では長軸2.4m以上、短軸1.2m、最大深0.19mをはかる。

覆土は2層に分かれる。上層は地山ブロックを多く混入し白灰色粘土層をなす。下層は暗灰色粘質土で炭化物を微量含む。出土遺物はない。

ピット群

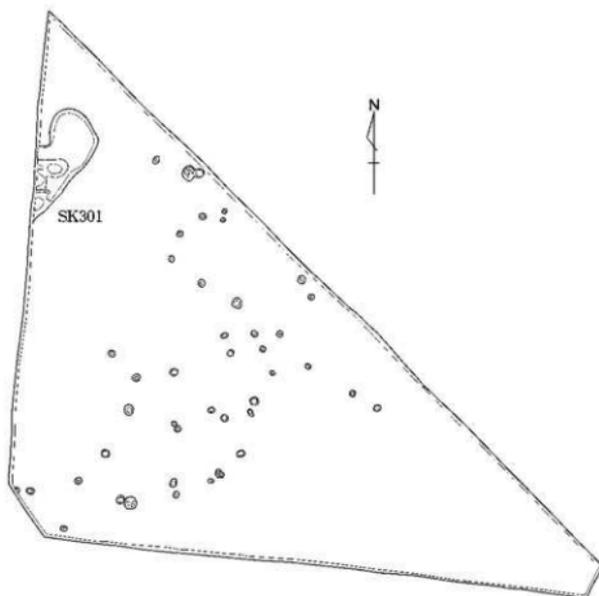
3区からは計43基のピット群が検出されている。概ね調査区の中央部において帯状にひろがる傾向にある。

平面形は概ね円形を呈し、径・最大深とも0.15～0.2mの範囲である。覆土は一様に黒褐色土の単一層であり、出土遺物はない。

調査区は全面的に後世の攪乱を受けており、一部の遺構を消失した可能性もあるが、現状では建物等に復元しうるものはない。ただし、柵状をなし直線状に並ぶ一群、及びその平行関係も一部にみられる。

唐津

唐津の碎片である。個体が小さいため部位や径は不明である。焼成は良好で胎土は密である。内外面に釉薬を施す。



第10圖 石塚蛸保護跡（高岡環状線地区）3区全体圖 縮尺 1/150

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 4区

調査区概観

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）4区は、全体調査区の西側に位置する。

調査区の北部では隣接する3区と類似した様相を呈するが、南部ではやや蛇行しながらはしる河川跡 NR02 を検出し、この遺構はさらに隣接の5・6区に連する。また同種の遺構は西側の2区でも検出されている。また上記のほかにも、正方位に現地を区画することを意識した可能性をもつ溝状遺構などがある。

なお、4区については短期のうちに現地調査を完了する必要性から3分割して発注をしたが、本書ではこれらを合併して報告をするものとする。

基本層序

4区においては、石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）で検出した計6層のうち、Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ層（地山）が普遍的に残存する。

Ⅰ層については、黒褐色上で昨年度までの水田耕作土である。Ⅱ層は昭和40年代の圃場整備の客土であり灰褐色土を呈する。Ⅵ層については地山であり、多くの地点で遺構確認面を兼ねる。一部で噴砂や樹木痕がみられる。

なお、部分的にⅡ-Ⅵ層間に黒色土が検出されているが、当調査区におけるこの土層は各地点で縄文土器を包含するものの、近世の遺物も出土することや、Ⅲ層がなく、また直下のⅥ層も上面に削平を受けていることなどから、正規の縄文時代の土層ではないものと思われる。

検出遺構

区画溝 SD402

河川跡 NR02 から SX401 まで達し、これより北方では90° 屈曲する区画溝である。幅は約2.0~7.0m、最大深0.6mをはかり、溝の底面では小溝を掘り込む。

覆土は、底面付近では黒色粘質土が堆積するが、上部では黄褐色のブロック土を多量に含むシルト質の褐灰色土層が確認できる。

なお、本址は溝状遺構 SD405 と平面的に重複するが、上記土層は SX401 より西方では確認されなかったため、東方に屈曲するものと理解した。

また本址の覆土を考える上記の褐灰色土層は、周囲の SD405、SD404、SX401 を切るため、溝が機能していた時期は少なくとも二時期になると推測される。

上層堆積土から13世紀末~14世紀末までの珠洲及び越前が出土しており、中世以降のものと考えられる。ただし、SD405 と SD402 の下層は、覆土が類似することから同時期に存在した可能性もあり、SD402 上層堆積であるL字状の区画溝の以前に、両遺構からなる流路が存在した可能性がある。

溝状遺構 SD403

調査区北半部に所在する溝状遺構である。やや斜行しながら北辺中央部に至り調査区外へと達する。SD402及びSD404に切られている。規模は幅0.4m～1.5m、深さ0.2mである。覆土は黒褐色の粘質土が主体である。縄文土器及び土師器の破片が出土している。

区画溝 SD404

調査区の中央で検出した溝状遺構である。北半部では直線的に南北方向にはしり、調査区中心付近でSD405らと合流したのち、河川跡NR02と並走するように流路をやや西側に屈曲させ、さらに調査区南端付近ではまた南北方向に流路を変える。

規模は幅0.5m～2.0mをはかる。覆土は黒褐色の粘質土が主体である。土師器の皿の破片が出土している。

SK405及びSD409を切る。NR02との遺構の位置関係とSK405との時期的な関係から、中世でも初めの頃、NR02が埋没する以前の段階のものであると考えたい。

同方位を呈する溝状遺構と、これにほぼ直行したであろう溝状遺構の痕跡が調査区の各地に所在しており、往時はこれらと区画溝を形成した可能性が考えられる。

土坑 SK401

調査区中央よりやや西側で検出された円形の土坑である。やや不整形ながら径は約1.5m、最大深0.31mをはかる。覆土中から板材や角材の木製品が出土している。

覆土にVI層地山のブロック土を多く含む。周辺遺構の埋没状況の観察から本址についても人為的な埋め戻しを行った可能性があるとみられる。規格や形状から井戸の可能性も考えたい。

土坑 SK403

調査区の中央で検出された、長軸1.2m、短軸1mの楕円形の平面を呈する土坑である。上述の溝状遺構SD402の覆土を掘削し、この直下の地山（VI層）を確認したところで本址を検出した。

覆土は概して黒色粘質土を呈するが、地山ブロックを少量含んでおり流れ込みにより覆土が形成されたものと考えられる。遺構底面中央から被熱し割れた円礫が出土している。

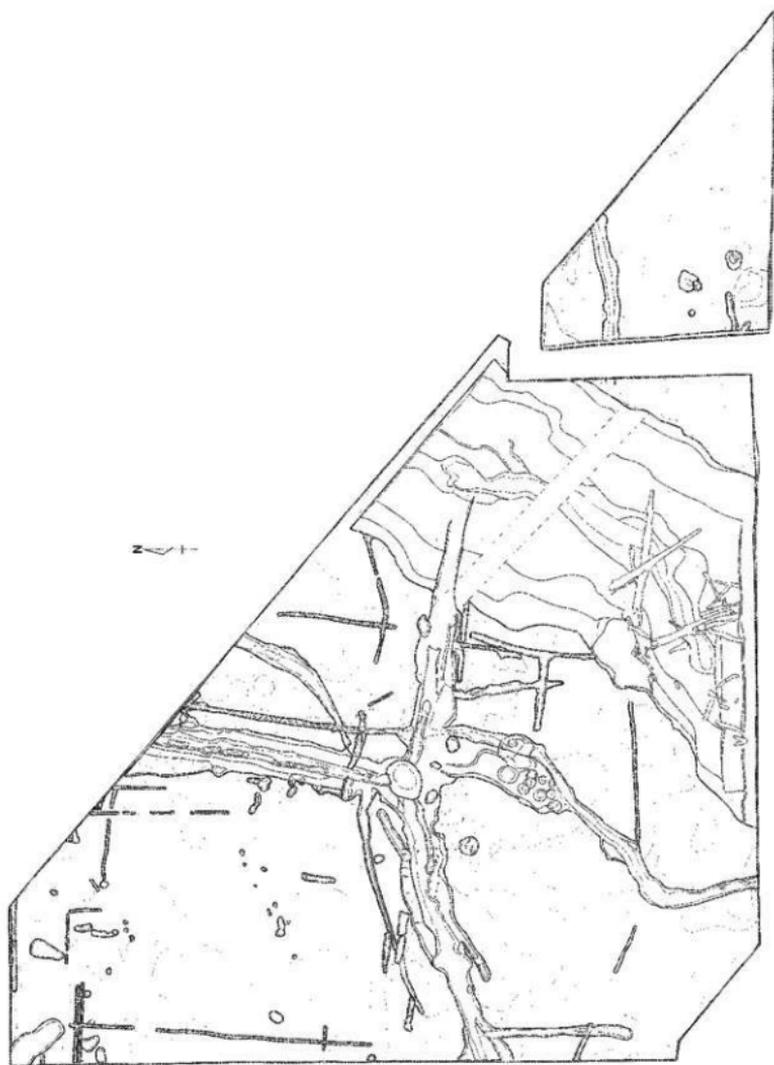
土坑 SK405 SK402 SK404 他

調査区中央のやや南側で検出された土坑群である。SK405、402、404のほか、これより小規模の土坑群が密集する。掘削時においても当初溝と想定して作業をすすめたが、周辺にも独立する土坑群が検出されたため、一部に対し単独の遺構名を付した。また一方でこれらを平面的に包囲する落ち込みをSK405とした。底面から珪洲片が出土している。

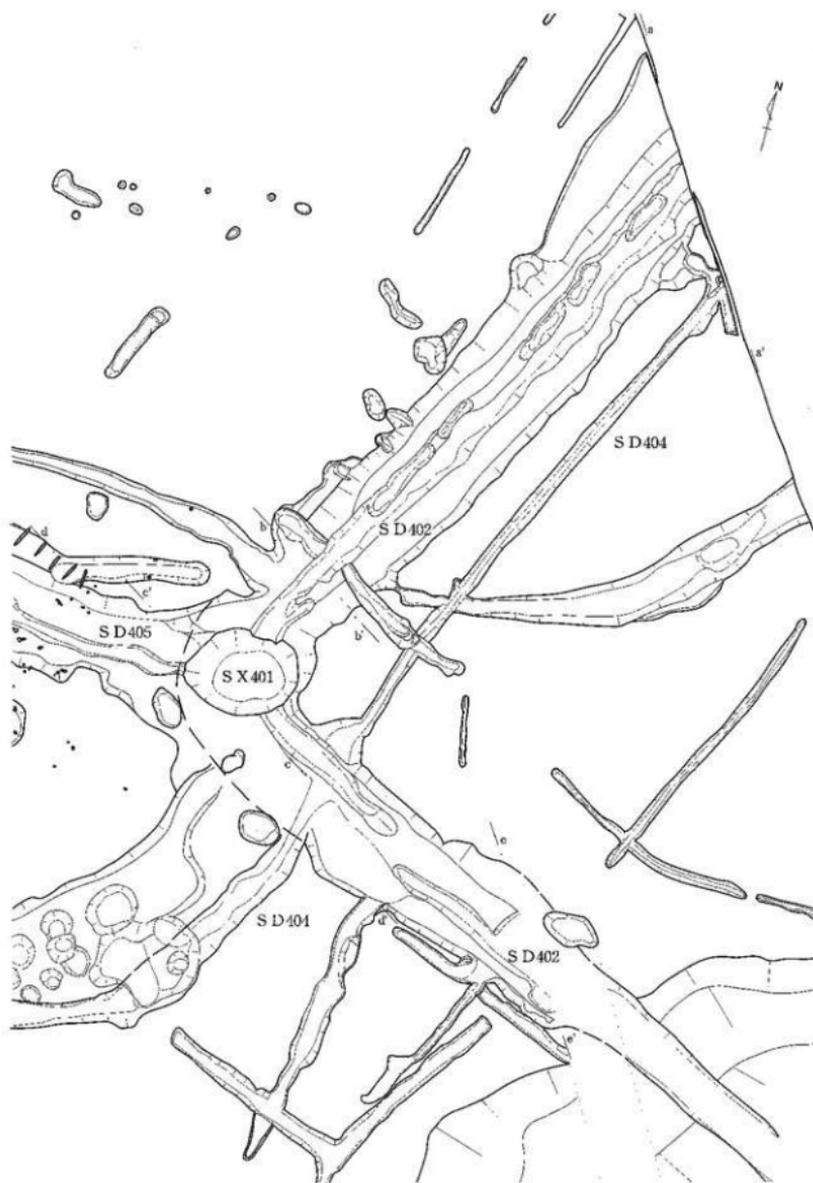
土坑群の南側に所在する溝状遺構SD404は、これらの土坑を切り時期差を有する。

溝状遺構 SD405

調査区中央を東西にはする溝状遺構である。幅は1.5～3.0mをはかるが、深さは0.3～0.4mと比較的浅い。溝状遺構SD402との接合部にはSX401が所在する。



第11図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）4区全体図 縮尺 1/400
※一部隣接の6区を含む。



第12图 石塚蛸保遺跡（高岡環状線地区）4区溝状遺構 SD402 全体图 縮尺 1/100

覆土は黒色粘質土である。SD402との合流部から約10mの範囲では杭列SA401が確認された。覆土からは珠洲焼と土師器が出土している。SD405とSD402の下層は、覆土が類似する。

不明遺構 SX401

調査区中央のSD402とSD405の合流する付近で検出した土坑である。SD402完掘後のVI層（地山）が露呈した段階で本址の存在が確認された。

平面形はやや不整形ながら長径約2.8mを呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は3大別され、上層は黄褐色のブロック土を多量に含むシルト質の褐灰色土層であり、中層は黒色粘質土層が堆積するが、この2層はSD402の覆土と共通し、中層はSD405の覆土と共通する。下層については遺構壁面が短期間のうちに埋没したものと考える。時期不明ながら底面からは土師器片が出土している。

東・西・北の3方向に溝が付随し本址に水を滞留させるようになっている。機能としては、その形状や周辺遺構との位置関係から溜井の類が推測される。

柵 SA401

調査区中央部で各溝状遺構が交差する地点の西側に位置し、且つSD405の溝内から検出された杭列である。

概して径10cm程度の断面形が円形を呈する杭と板材とで構成され、0.6～0.7mの間隔で配置されている。杭の形状や先端部分の成形という点では複数種に分類可能であり、また現況も地山に深く打ち込まれているものや、等間隔に倒れているものなどがある。

溝状遺構 SD407

調査区南西部で検出した溝状遺構である。全長12m、幅2.1m、最大深0.15mをはかる。SD405を切り、SD408に切られる。北方に所在するSD401と同一沿線上にあり往時は同一の遺構であった可能性も考えられる。出土遺物はない。

溝状遺構 SD408

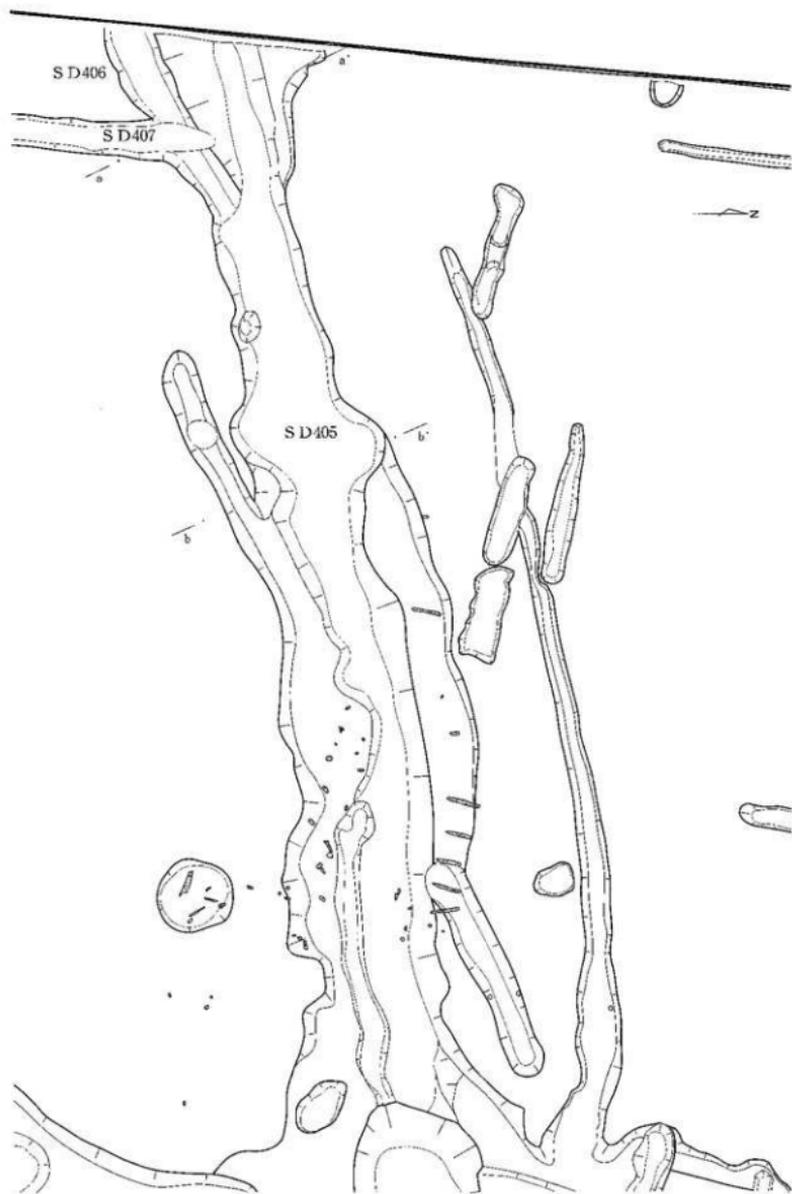
調査区南西部で検出された溝状遺構である。後世の削平のためか遺構の残存状況も断続的であるが、往時は約12m以上にわたり存在したとみられる。

また現状では幅約0.7m、最大深約0.1mを呈する。出土遺物はないが、SD407を切ることから比較的新しい段階のものである可能性が考えられる。

河川跡 NR02

石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）の2区・4区・5区・6区で検出された溝状遺構である。4区においては幅約18～21m、検出面からの深さは約1.4mを測る。

覆土は3大別され、上層は鉄分が多量に沈着する粘質土層、中層は植物遺体を多く含む粘質土層、下層はシルト層が堆積しており、このことからある程度の水流があった段階から滞水状態の湿地へと変化していった可能性がある。



第14図 石塚蛸保護跡（高岡環状線地区）4区溝状遺構SD405全体図 縮尺 1/100

石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）4区

SD405 a

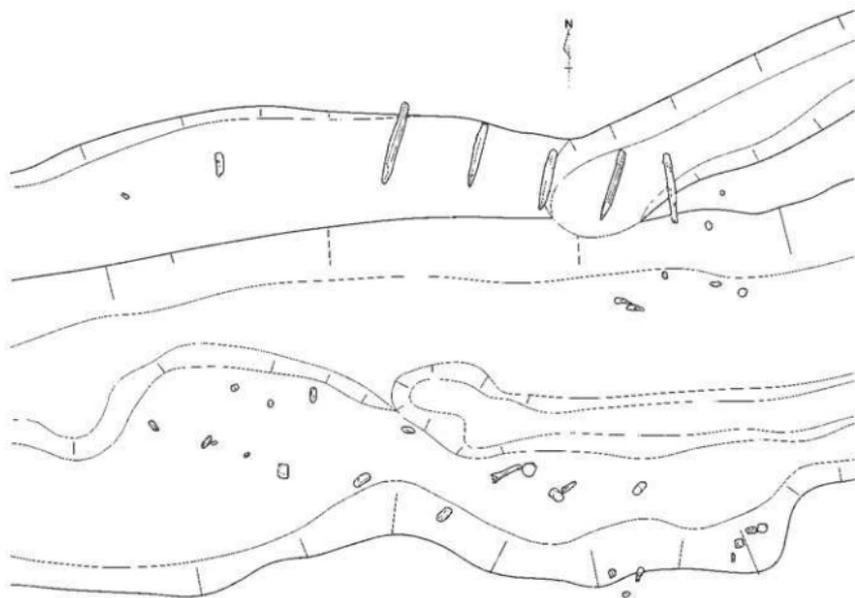


- 図例
 1 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）
 2 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）
 3 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）
 4 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）

SD405 b

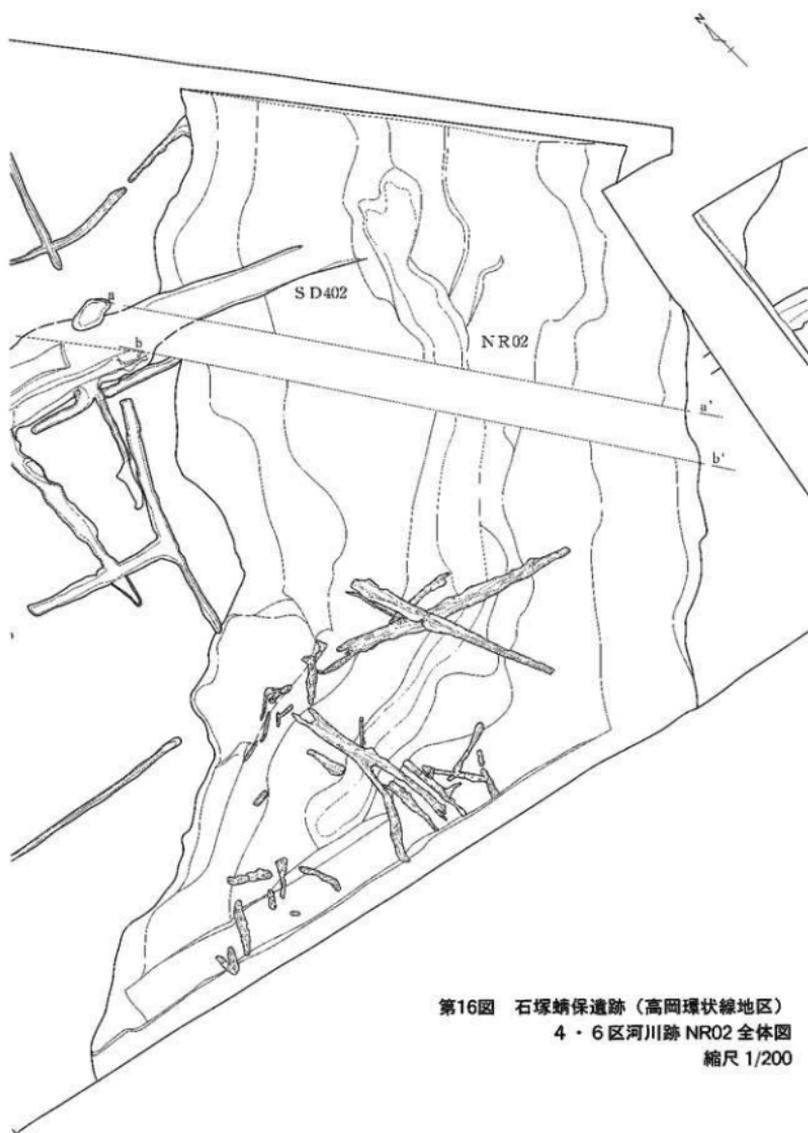


- 図例
 1 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）
 2 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）
 3 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）
 4 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）
 5 掘削した土層の層位：L 4.1m 層位（埋没）



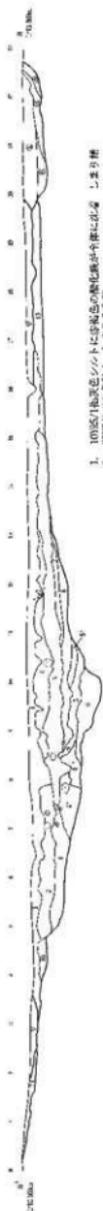
第15図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）4区遺構図

上段：溝状遺構 SD405 断面図 下段：柵 SA401 平面図 縮尺 1/10



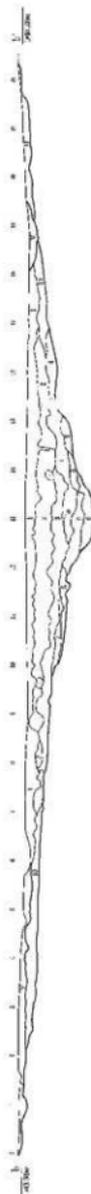
第16図 石塚靖保護跡（高岡環状線地区）
4・6区河川跡 NR02 全体図
縮尺 1/200

NR02 a



1. 1095/1地区赤色シルトに埋没した遺跡の敷地境界が明確に示さる。しまり層
2. 1077/1地区赤土、しまり層の下部
3. 31%の腐葉土を含有した埋没アゴック (1~5cm) 100%混入、しまり層中核
4. 1074/2地区埋没赤砂、腐葉40%、炭化物15%混入、しまり層
5. 1082/2地区埋没赤砂、腐葉10%、炭化物5%混入、埋没赤土層
6. 1082/2地区埋没赤砂と埋没シルトが50%の割合、炭化物埋没層
7. 51%/15%埋没赤砂
8. 1074/2地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 115%混入、しまり層
9. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層
10. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層
11. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層
12. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層
13. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層

NR02 b



1. 1095/1地区赤色シルトに埋没した遺跡の敷地境界が明確に示さる。しまり層
2. 1077/1地区赤土、しまり層の下部
3. 31%の腐葉土を含有した埋没アゴック (1~5cm) 100%混入、しまり層中核
4. 1074/2地区埋没赤砂、腐葉40%、炭化物15%混入、しまり層
5. 1082/2地区埋没赤砂、腐葉10%、炭化物5%混入、埋没赤土層
6. 1082/2地区埋没赤砂と埋没シルトが50%の割合、炭化物埋没層
7. 51%/15%埋没赤砂
8. 1074/2地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 115%混入、しまり層
9. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層
10. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層
11. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層
12. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層
13. 1075/1地区埋没赤シルトに埋没アゴック (15~5cm) 100%混入、しまり層

第17図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）4区河川跡 NR02 断面図 縮尺 1/100

中世の区画溝 SD402 に切られていることや土層断面の観察から、NR02 は中世以前に埋没したものと推測できる。

植物遺体を含む中層からは木質遺物のほか倒木も数多く出土した。このうち直径約 0.8m の丸木が半截された状態で片岸から対岸に渡すように検出されているが、こちらは湿地を渡るための木道として利用した可能性もあると考えられる。

この木道を挟んだ兩岸には、硬化面や、溝などで区画されるというような道路状遺構と考えられる遺構は見られず、人の動きがどのようなものであったかは読み取ることができなかった。遺物は板状・棒状木製品、剣形木製品、杭のほか、弥生土器、珠洲が出土した。

なお、NR02 の埋没年代については、河川から湿地に環境が移行した時間幅は大きいものと考えられる。一連の遺構と考えられる遺構が既往調査の 1・2 区でも確認されているが、その位置関係から、河川の大きく蛇行した部分が流れに取り残され、河跡湖となった可能性もある。

出土遺物

縄文土器

401 は SD402 から出土した縄文土器の浅鉢である。口縁端部に二つの突起を持ち、口縁直下に二条の沈線を描く。沈線からは器面を削って文様を描き、削り残した部分に細かい縄文を施す。破片のため詳細は不明であるが、文様は雲形文である可能性が高い。縄文時代晩期中層式期の所産であると考えられる。

弥生土器

405 は 4 区の表土から出土した弥生土器の底部破片である。残存器高は 2.1cm、低径は 7.6cm と復元される。焼成は良好で、胎土には白砂粒を含む。

青磁

414 は 4 区の表土中から出土した青磁碗の口縁部である。復元される口径は 12cm 程度、残存器高は 2.1cm をはかる。外面に鑄莖弁文を有し、13 世紀代に属するものと考えられる。

珠洲

4 区からは多数の珠洲片が出土している。本書ではこのうち実測可能な 8 点を掲載した。このうち、415～419 の計 5 点は鉢、420～422 の 3 点は甕の体部である。416 が 4 区表土からの出土で、その他は SD402 からの出土である。

口縁部の形態から 415・416 は 12 世紀後葉から 13 世紀前葉、417 は 14 世紀後葉から 15 世紀前葉の年代が与えられよう。

石畿

409 は 4 区 SX401 の上層から出土したチャート製の石畿である。無茎であるが、若干凹基の形態に調整を行っている。先端は欠損している。確認される全長は 2.2cm、最大幅 2.1cm、最大厚 0.7cm をはかる。

横長剥片

410はNR02から出土した砂岩の川原石に打撃を加えた破片で、打製石斧の素材として使用されたものとみられる。辺縁部が鋭利な刃部をなしているため、そのまま使用した可能性があるかと思われる。

剣形

428は、河川跡NR02出上の剣形である。全長41.4cm、最大幅2.6cm、厚さ0.8cmをはかり、断面形は板状を呈する。

429もまたNR02出土の剣形である。1/3ほどが残存するのみであるが、最大長52.3cm、最大幅1.9cm、厚さ1.4cmをはかり、断面形は棒状を呈する。

双方とも基部から刃先に向かって緩やかに幅を増す形態である。428の表面は丁寧に平滑化されているが、双方とも加工痕は残っていない。

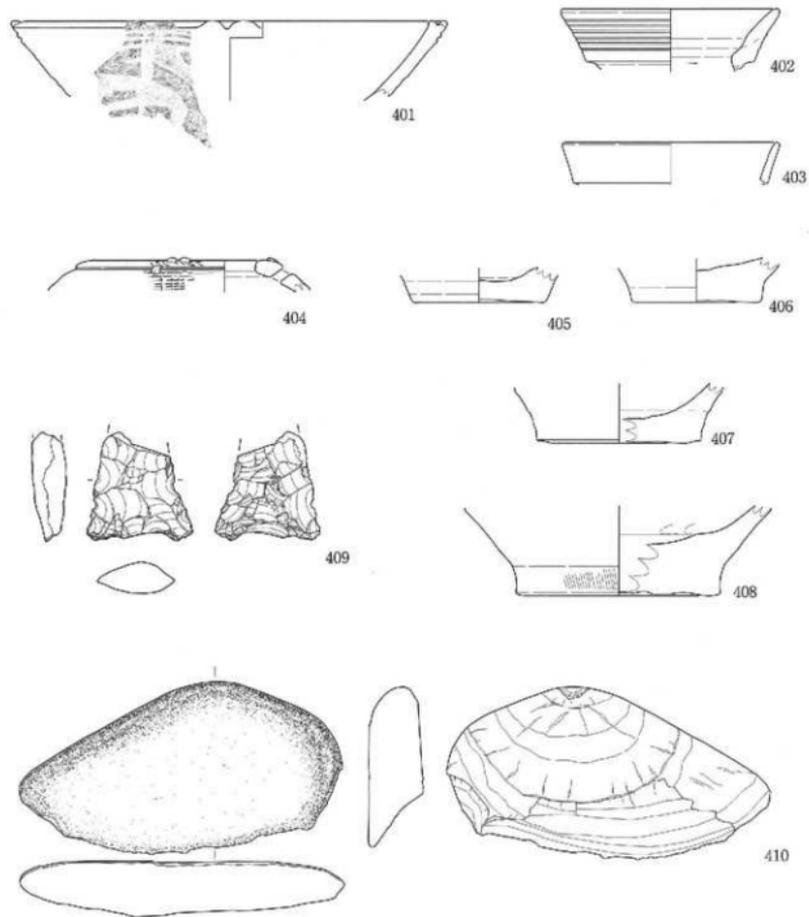
その他木製品

430はNR02から出土した容器の底板である。欠損が著しく加工痕は残っていない。

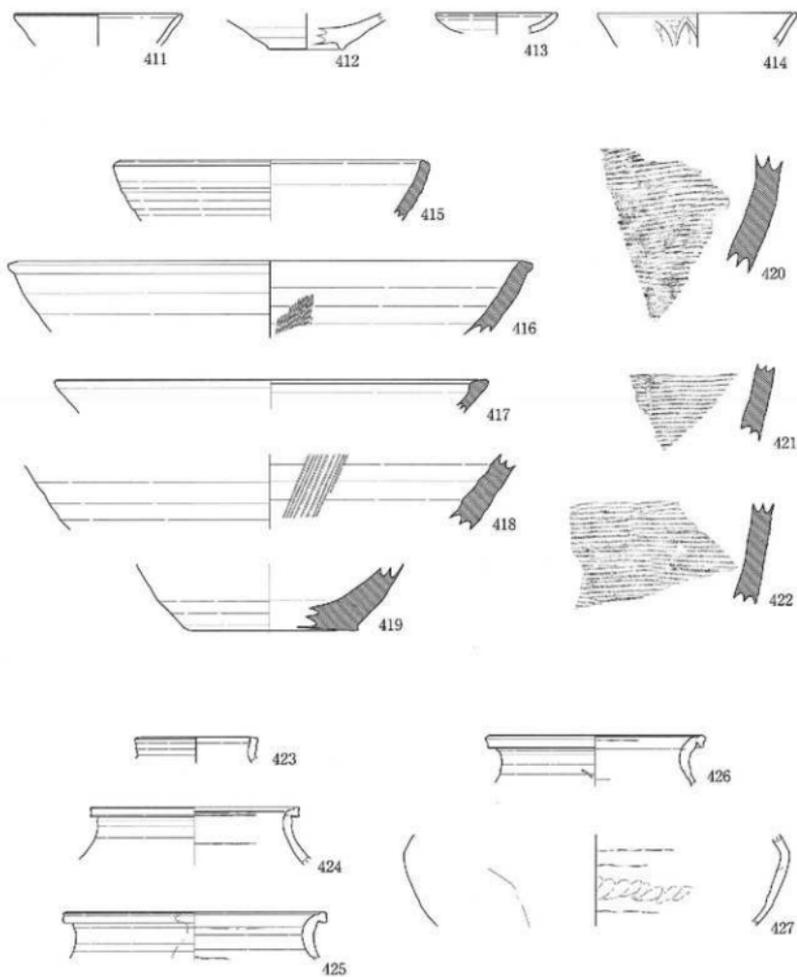
431から434はNR02から出土した棒材である。431は丸木の両端を加工したもので芯の部分に孔が貫通するが虫食い穴の可能性もある。432は実測面の裏側に欠損し断面形は不明である。433及び434は断面円形に加工されているが表面に加工痕は残っていない。

435は櫛SA401に使用されていたほぼ定形の板材である。全長39.4cm、最大幅約12cm、厚さ2.6cmを呈する。表面に整然とした線状痕があり鋸で製材されたものとみられる。実測面の裏面には樹皮が残存する。

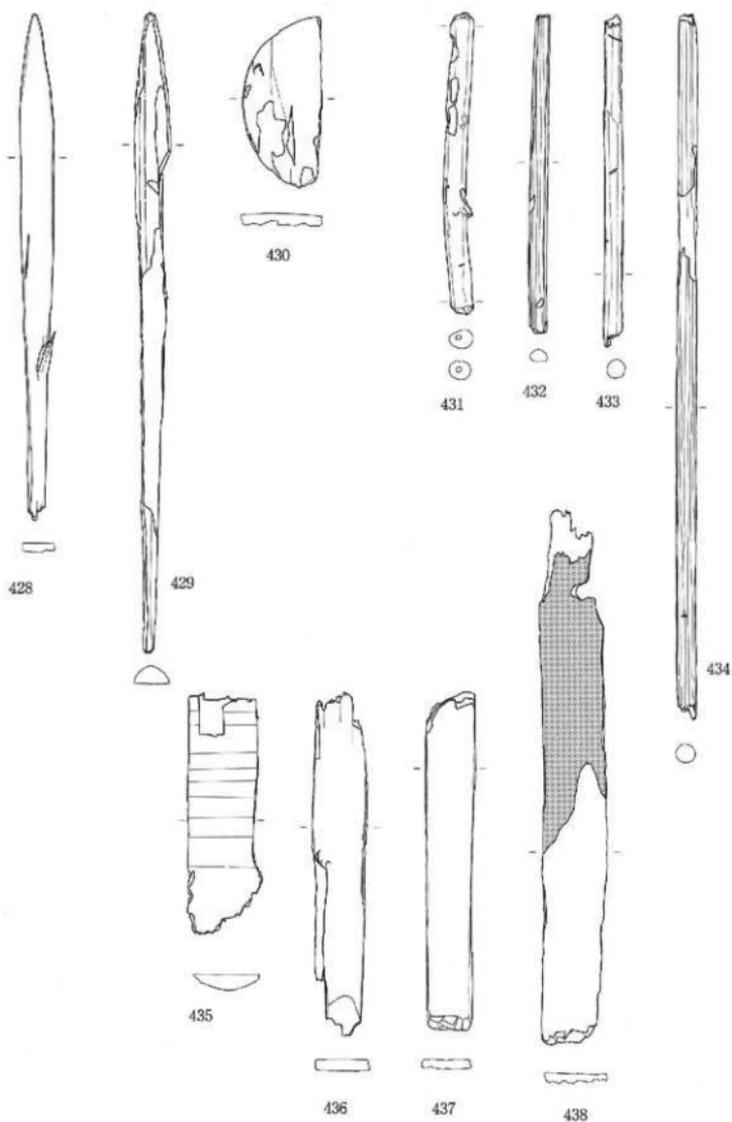
437・438はNR02出土の板材である。437は図面下端に切断面をもち、上端は欠損している。438は実測面表面と両端を欠損し図面上半は炭化している。



第18图 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）4区出土遺物実測図
縄文土器・弥生土器・石器 縮尺 1/3



第19図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）4区出土遺物実測図 中世・近世 縮尺 1/3



第20圖 石塚蛸遺跡（高岡環状線地区）4区出土遺物実測圖 木製品 縮尺 1/3

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 5区

調査区概観

5区は調査区全体の中央部に位置する。4及び6区と南接しこれら3地区には大型の河川跡が蛇行する。調査区内からは弥生土器なども出土しているが、大勢としては7区や南側の9～12区に様相に近い。

5区における基本層序は、4区と概ね一致し計4層が堆積する。最上層は昨季までの耕作土（I層）であり、第二層目が昭和40年代の圃場整備時の客土（II層）である。他地区で見られるⅢ～Ⅴ層はなく、縄文土器を包含するものの後世の攪乱を受けた黒褐色土を間にはさみ、地山（VI層）が現れる。

検出遺構

河川跡 NR02 上層流路跡

調査区の大半が河川跡 NR02 で占められるが、5区では埋没最終段階の流路跡（上層）と、初期段階の流路跡（下層）の2相が確認されている。

前者については、概して北半部は流木と思われる多量の木材によって形状が判然としないものの、南半部では南方からの流路が合流し北側に貫流する。

調査区南端部では3条に分かれるが、このうちの東側2条は南端部から約2.04m付近で合流する。全長は西側が約17.1m、東側は合流前の部分もふくめ約15.9m、最大幅は西側約2～1.6m、合流前の中央約1.43m、東側約1.22m、合流後約1.63mをはかる。

主軸方向はいずれもN 60° - Eを示す。概ね平行する位置関係にあり、両方の距離は約2.67から2.91mである。覆土の断面形状は逆台形を呈し、底部は概ね平坦である。

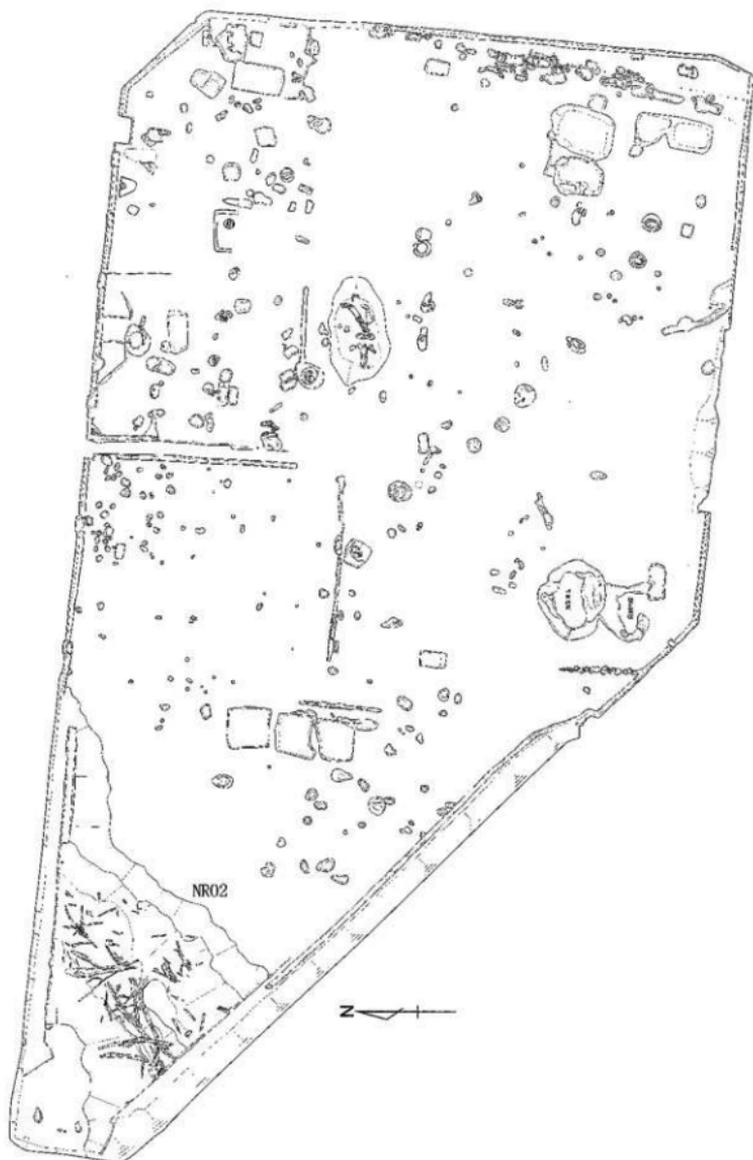
河川の西側については底部形状が平坦で硬質の白灰色粘質土ブロックが薄く堆積していたが、西側流路の底部を整地した際の盛り土である可能性を考慮するとともに、人為的造成の可能性を提起するに留めたい。

河川跡 NR02 下層流路跡

初期段階の河川跡 NR02 は東西両肩部とも傾斜が緩やかで、平野部における典型的な河川跡の形態を成す。

最深部での全長約14.06m、最大幅は南側で約21.3m、北側で15.14～27.03m、最大深約1.25mをはかる。中心部の主軸方向はN - 45° - Eを示す。断面形状は緩やかな弧状であるが西側の立ち上がりはやや急である。東側は5～10°の角度で緩やかに立ち上がる。肩部の境界は不明瞭である。

覆土の堆積状況を見ると中位以下で植物遺体を多く含んだ腐植土に近い土層の堆積が確認できる。このことから完全に埋没する前の一定期間は、植物遺体が流失し流水の滞った湿地状態の時期があったことが想定される。肩部から底部にかけて大型品を含む木材が多量に出土している。明瞭な加工痕が確認できるものはなく、ほとんどが自然木とみられる。



第21图 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）5・7区全体图 縮尺 1/400



第22図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）5区河川跡 NR02 上層流路跡 縮尺 1/200

出土状況を見ると、南側底部においては東西両肩部に並行する方向で、ほぼ一定の間隔を保持しながら並んだ状態で出土している状況が確認された。同所周辺からは、肩部に対して斜めに交差する方向で直径30cmを超える木材も出土している。

河川跡 NR02 周辺の遺物出土状況を見ると、初期段階の東側肩部を中心に縄文後期の土器片が出土している。また、底部付近の出土遺物も縄文後期に帰属するため、該期においては河川跡 NR02 の様相を成していたと想定される。

西側肩部周辺からはトチノミヤクミなどが数多く出土しているが、貯蔵穴やさらし場遺構等は確認されず、これらは流水によって運搬されたものと推定される。また、東側肩部中腹付近からは動物の骨も出土した。頭部は残存せず一部分の骨が折り重なるように出土しており、この状況から食用中型動物の骨と考えたい。

また、中位の腐植土層上面からは弥生土器の甕が出土し、肩部及び底部付近からは縄文中期とみられる土器片が複数出土していることから、縄文中期から弥生時代の間に低湿地化が進行したものと想定される。

出土遺物

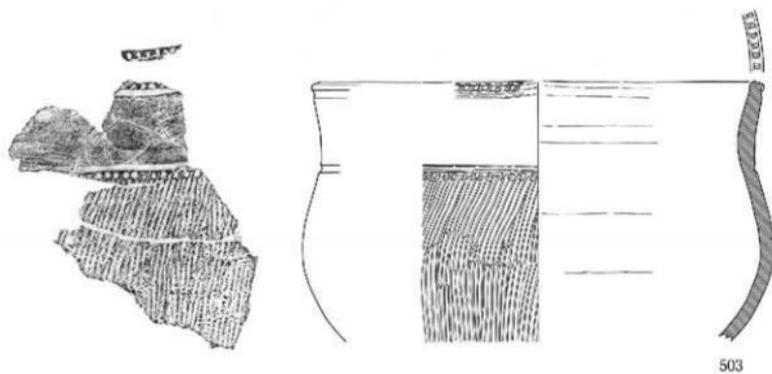
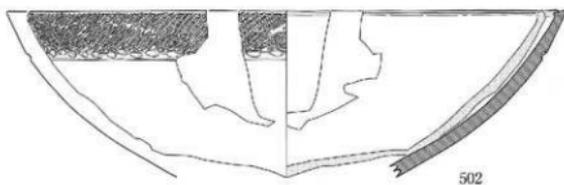
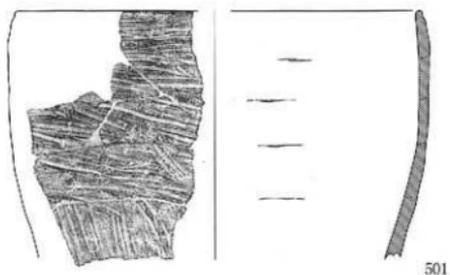
縄文土器

501 は条痕文系土器の深鉢である。口径約 24.5cm をはかる。緩やかに内湾し立ち上がっていく器形である。口縁部内面はミガキとナデにより成形される。口縁端部の外面はナデにより成形される。外面の文様は、口縁部に横方向の条痕文、体部上半部から下半部にかけて斜め方向ないし縦方向の条痕文を施す。文様は粗く施され下位は摩耗が激しい。胎土の色調は灰黄色を呈する。

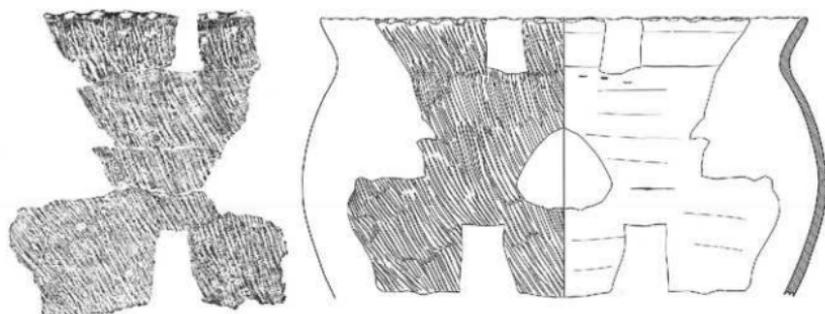
504 は河川跡 NR02 より出土した条痕文系土器の深鉢である。口径は約 39.0cm と推定される。口縁部は短く外反し体部が円弧を描くように立ち上がる器形を有する。口唇部の内外面は押し文を周囲に巡らせる。口縁部から頸部にかけてナデないし板ナデにより成形される。体部内面の上半部に板状工具による擦過による砂流痕がみられる。文様は、口縁部外面に縦方向、体部外面に斜め方向の条痕文を施す。外面全体に煤が付着する。胎土の色調はにぶい黄褐色を呈する。

503 は河川跡 NR02 より出土した条痕文系土器の深鉢である。口径 37.4cm、胴径 28.6cm をはかる。緩やかな「S」字状を描き立ち上がる器形を有する。内面全体はナデにより成形される。口唇部外面は刺突列点文を施す。口縁部から頸部にかけてミガキにより成形される。口縁端部及び頸部は刺突列点文を施した後、横方向の沈線文を周囲に巡らせる。体部外面は斜めないし縦方向の条痕文を施す。胎土の色調はにぶい黄褐色を呈する。

502 は、口径約 34.0cm をはかる浅鉢である。体部から口縁部にかけて緩やかに内湾し立ち上がる器形をもつ。口唇部の内面に若干の肥大がみられる。体部内面はミガキないしナデにより成形される。口縁部外面に縄文及び横方向に浅い沈線を周囲に巡らす。沈線に楕円形を呈する刺突列点文が連続してみられる。口唇部から沈線にかけて赤彩痕が残る。体部外面は斜め方向のミガキにより成形される。部分的に炭化物が付着する。胎土の色調は灰黄褐色を呈する。



第23図 石塚靖保護跡（高岡環状線地区）5区出土遺物実測図
縄文土器 縮尺 1/3



504

第24図 石塚蛸保遺跡（高岡環状線地区）5区出土遺物実測図
縄文土器 縮尺 1/4

弥生土器

505は、河川跡 NR02より出土した壺である。口縁部が「く」の字状に短く外反し立ち上がる器形をもつ。口径 18.4cmをはかる。外面全体に斜め方向のハケメ、内面の口縁唇部から口縁部にかけて横方向のハケメ、頸部を斜め方向のハケメを施し後にナデにより成形される。内面の摩耗は著しい。文様は、口唇部にハケ状の工具による刻目文を施す。胎土の色調は灰黄色を呈する。

506は、河川跡 NR02 西屑付近より出土した壺である。口径約 22.6cmをはかる。口縁部は指頭を用いて摘み出し突帯を巡らせ、突帯上に指頭による押圧を施す。口縁部内面はハケメを施した後に横方向のナデにより成形される。頸部内面は横方向ないし斜め方向のハケメにより成形され、部分的にナデがみられる。

口縁部外面全体にハケ状工具により羽状刺突文を周囲に巡らせる。口縁部外面に縦方向の陰帯文を2条貼付した後に刻目文を施す。頸部外面は横方向ないし斜め方向のハケメがみられ、一部ミガキにより成形される。胎土の色調は淡黄色を呈する。

507は、河川跡 NR02より出土した甕である。緩やかに内湾し立ち上がる器形を有する。胴径 27.0cm、底径 10.0cmをはかる。内面は部分的に斜め方向のハケメがみられる。外面は斜め方向のハケメにより成形される。内外面ともに摩耗が著しくみられる。胎土の色調は浅黄橙色とし海綿骨片を多く含む。

打製石斧

河川跡 NR02の東側付近より打製石斧が4点出土した。いずれも片刃をもつ形式であり、508～510は分銅形打製石斧、511は短冊形打製石斧である。

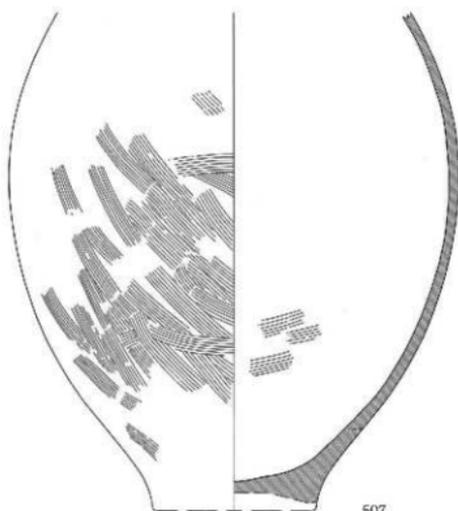
508は、長軸 17.4cm、幅 7.9cm、厚さ 2.5cmをはかる。表面は自然面であり下半部に縦方向の擦痕がみられる。背面は敲打により成形され部分的に擦痕が残る。くびれ部右側面の一部につぶれ痕、左側面の2ヵ所に摩耗の痕跡がみられる。材質は凝灰岩である。



505



506



507

第25図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）5区出土遺物実測図
弥生土器 縮尺 1/3



第26图 石塚峠遺跡（高岡環状線地区）5区出土遺物実測图
打製石斧 縮尺 1/3

509 は地山直上面から出土した打製石斧である。上半の一部が欠損しているものの長軸 15.25 cm、幅 9.2cm、厚さ 2.4cm をはかる。表面の下部に縦方向の擦痕が残る。くびれ部両側面につぶれ痕がみられる。表面は自然面であり、背面は敲打により成形される。材質は花崗岩(石英斑岩)である。

510 は、長軸 18.2cm、幅 8.8cm、厚さ 2.75cm をはかる。表面は自然面であり背面は敲打により成形される。くびれ部両側面につぶれ痕がみられる。特に左側面のつぶれ痕は著しい。材質は花崗岩である。

511 は、長軸 18.1cm、幅 7.8cm、厚さ 2.8cm をはかる。右側面につぶれ痕がみられる。表面は主として自然面であるが部分的に敲打痕が残る。背面は敲打による加工が施される。材質は安山岩である。

須恵器

512 は、河川跡 NR02 より出土した杯 B である。体部は外方に向かいほぼ直線的に立ち上がる器形をもつ。内外面はクロロナデにより成形される。

底部は回転ヘラ切り後にケズリにより成形し高台を貼り付ける。焼成は堅で胎土の色調は灰白色を呈する。



512

第27図 出土須恵器実測図
縮尺 1/3

珠洲

表土内より片口鉢の底部が 1 点、甕の体部が 2 点出土した。片口鉢は底部より外反する体部を呈する。体部の器壁は厚く外面はナデにより成形される。擦目として櫛目波状文を施す。底面は静止糸切り痕で調整する。胎土の色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

甕は、内面を綾形状叩打し成形するものと、叩き回しにより成形するものの 2 類がみられる。外面は叩打文により成形される。胎土の色調は灰色ないし灰白色を呈する。焼成は良好である。

河川跡 NR02 の東厚付近より珠洲のすり鉢の体部が 1 点出土した。器形は外方に向かってほぼ直線的な立ち上がりを見せる。体部外面はナデにより成形される。擦り目は 11 本遺存する。胎土の色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 6区

調査区概観

6区は全体調査区の中央北に位置する。現代の農業用水により東西に二分されるが、西側の多くは河川跡NR02が占有する。東側は遺構も少ないが、後述のように当遺跡としては希少な弥生時代の様相が検出されている。

本区からは地山を含め計4層が確認されている。最上層は昨季までの旧耕作土（Ⅰ層）であり、この直下は昭和40年代の農地整備の客土（Ⅱ層）である。Ⅲ及びⅣ層は検出されずにⅡ層直下で黒褐色粘質土が所在し、そして最下層となる地山のⅥ層が続く。

なお、上記の黒褐色土については、4区での解説したように、縄文土器を含む本来の土層が作土化してできた可能性が高い。

検出遺構

土坑SK601

6区の東側調査区で検出した土坑である。長軸0.82m、短軸0.6mをはかり、堆積・完掘状況から、直径0.46m、深さ0.24mの土坑とSK604との重複である可能性がある。

土坑の覆土は炭化物や焼土を多く含む土であったことから炉の可能性も視野に掘削を行ったが、遺構底面や壁に被熱した痕跡はみられなかったため、この可能性は低いと考える。

弥生時代中期後葉の甕がほぼ完形で出土した。

土坑SK602

6区の東側調査区で検出した土坑である。直径0.52m、深さ0.2mをはかる。覆土はSK601と同様に炭化物や焼土を多く含む。

緑色凝灰岩の管玉未製品が出土した。石核1点、管玉未製品2点、原石を分割し部分的に研磨したもの1点、チップ1点である。これらは管玉の祖形となる角柱体を製作する段階のものと思われるが、管玉未製品2点のうち1点には細かな調整が施される。2点とも頂部に施溝分割の形跡が残ることから、弥生時代中期の所産と考えられる。

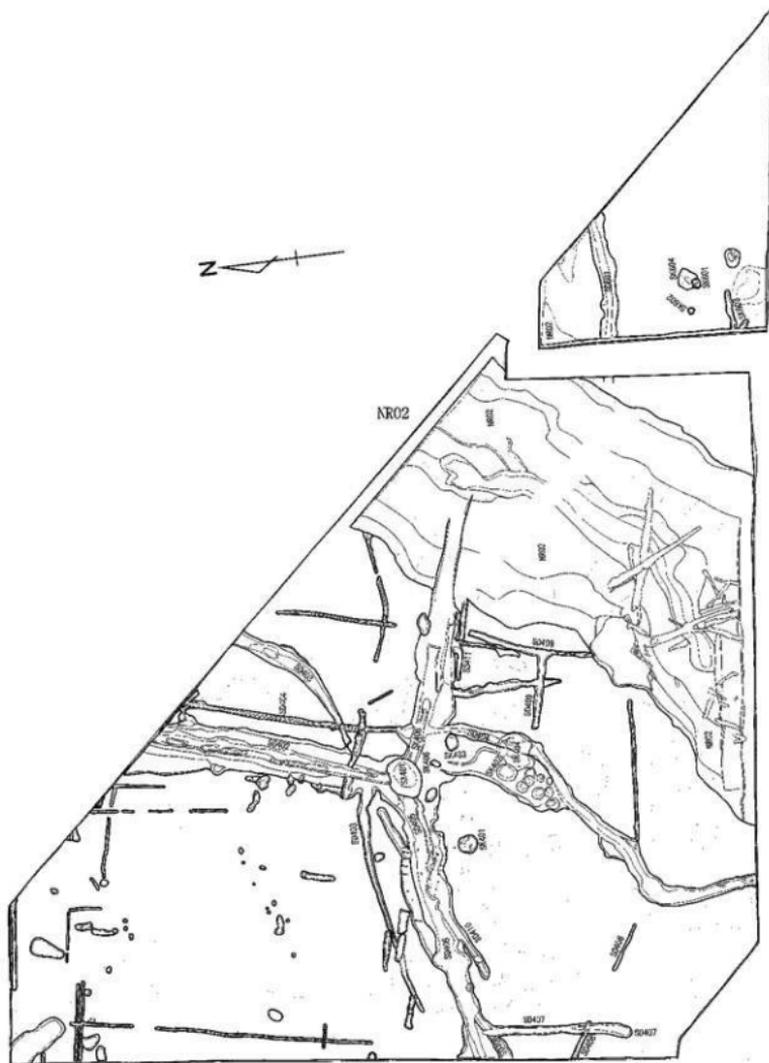
なお、この施溝分割技法をもつこれらと同様の資料は、近隣の石塚遺跡や石名瀬A遺跡でも多数出土しており、概して石塚地区に広範囲に広がる弥生時代集落の存在が明らかになってきている。今回の調査成果は遺構群の範囲を検討するうえで重要な知見となるとみられる。

SK602に近接して検出された同等の規模のSK601からは、弥生時代中期後葉の甕が出土している。SK601・602はその覆土を同じくすることから、同時期に廃棄された可能性が高い。

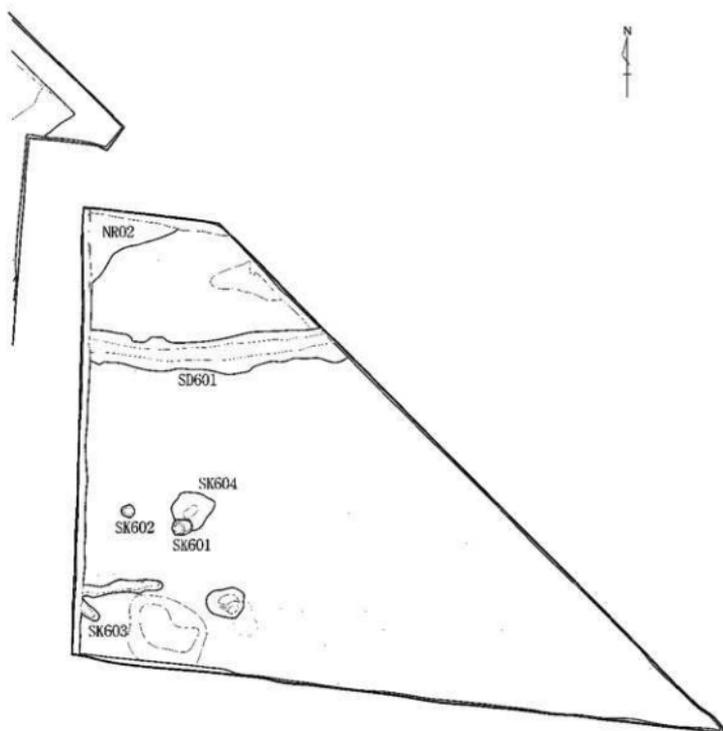
河川跡NR02

6区の西側調査区で検出した河川跡である。当区では幅約18～21m、検出面からの深さは約1.4mをはかる。

覆土は3大別され、下層から順にシルト層、植物遺体を多く含む粘質土、鉄分が多量に沈



第28図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）4・6区調査区全体図 縮尺1/400



第29図 石塚蛸保護遺跡（高岡環状線地区）6区東側割図 縮尺1/200

着する粘質土が堆積しており、河川から滞水状態の湿地へと変遷していったことが看取できる。

4区で検出した中世の区画溝SD402との重複関係から、本址については中世以前に埋没していたと推測できる。湿地状態であった頃の植物遺体を含む層からは、木質遺物のほかに倒木も数多く出土した。

なお、4区でも解説したように、倒木の上面には直径約0.8mの丸太が半裁された状態で、岸から岸に渡すように出土した。概して湿地を渡るための木道として利用された可能性も考えられる。

板状・棒状木製品、剣形木製品、杭のほか、弥生土器や珠洲が出土した。

またNR02からは、剣形、棒材、板材などの木製品が出土したが、これら自体から時期を特定することは難しい。SD405からは弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器が出土したが、混入と考えられる。

概してこの調査区はほぼ半分をNR02が占める。地形から推測すると南西方向から北東方向に流れる祖父川の支流の一流であった可能性もあるが、その流れが途絶え徐々に湿地化していったものと理解できる。

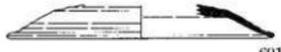
NR02の埋没年代については、珠洲や越前が出土したSD402の掘割がNR02の底面に達していることから、中世段階には湿地となっていたと考えられる。本遺構の東側では土地が一段高くなるが、排水溝を挟んだ東側調査区の遺構は疎らで、削平の影響を受けた結果とも捉えられる。

溝状遺構SD601

6区の東側調査区で検出した溝状遺構である。東西方向に流れる遺構で、幅約1.5～2m、検出面からの深さは約0.2mをはかる。NR02と重複すると思われるが、西側調査区では東壁で断面形を確認したのみでNR02との切り合いは確認できなかった。覆土は黒褐色粘質土でラミナ層は確認していない。

遺物は、堆積最下層と底面直上で出土し、多数の土器小破片が底面に貼りつくような状況であった。殆どが摩滅した土師質の土器小破片である。

その中で一点のみ須恵器円蓋破片が出土した。端部形迹から9世紀代の所産と思われる。



第30図 SD601出土須恵器

出土遺物

弥生土器

602は、SK601から出土した小型甕である。外面口縁部下端に櫛歯状工具による刻目を入れ、口縁部下から底部にかけてハケで調整する。内面もハケ調整である。

604は、SD601出土の甕である。外面口縁部下に刻目を有し、内面口縁部下に櫛歯状工具による斜行短線文が施される。弥生時代中期中葉から後葉に属するものと考えられる。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての所産とみられる。

605及び606は、弥生土器の底部破片である。605はSK603出土、606はSD601出土である。

管玉製作過程資料

SK602からは管玉の製作過程をしめす資料が出土した。石核1点、未製品またはチップと考えられるもの4点が出土している。すべて緑色凝灰岩であり610及び611は濃緑色、607～609は淡い緑色の色調である。

607は石核である。610は全面を剥離しているが石の節理を考え剥離を行いやすい方向から打撃していると考えられる。608から611は管玉の未製品である。

なお、608は立方体に成形されているが、不純物を多く含む部分が多いため不純物を含まない部分を研磨して成形した痕跡がみられる。609は素材としては薄いため未製品ではなく製作過程でできたチップの可能性もある。

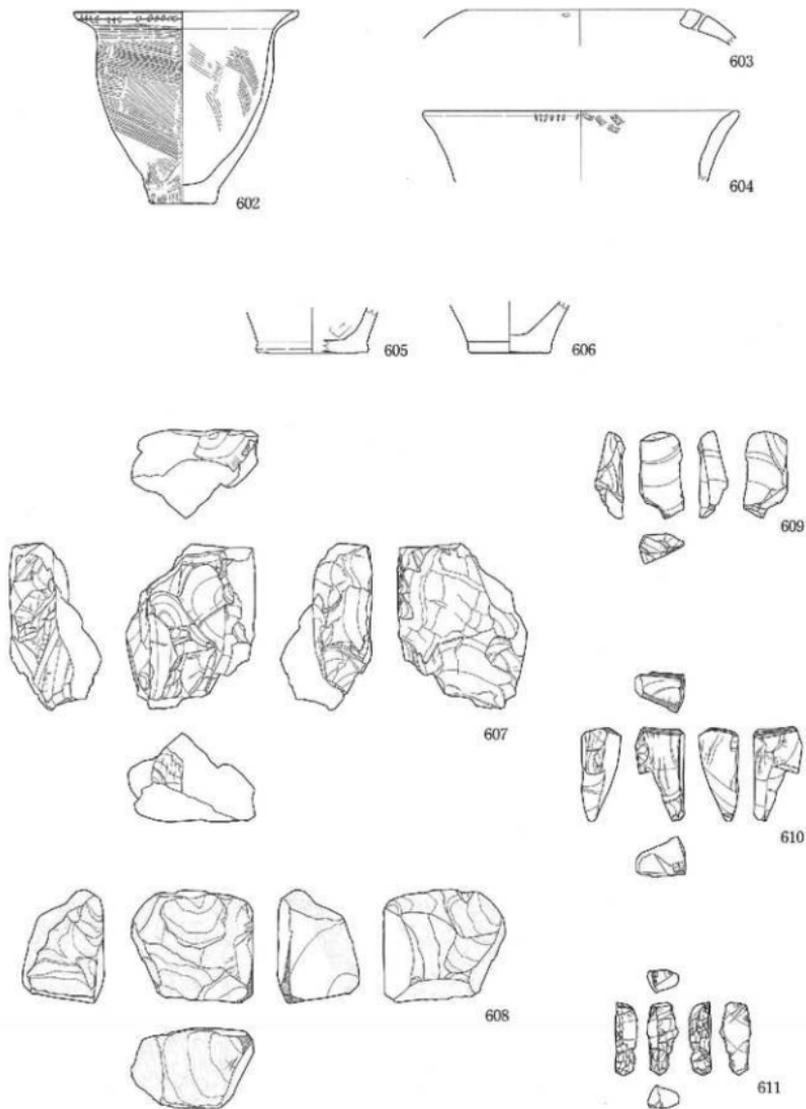
また、610及び611は施溝分割を行っている。施溝をして分割する方法は弥生時代前・中期にみられる手法であり、610は施溝が3本みられる。611は施溝分割後に側面から成形のため調整剥離を行っている。平らな剥離面には研磨の痕跡がみられる。

概してこれらについては、遺跡北東に隣接する石塚遺跡との関連を考えうる資料も出土している。弥生時代中期後葉の土器のほか、管玉の製作工程資料は石塚遺跡で約200点が出土し、今回6区で出土した資料も同様の製作技法を採っている。

石塚遺跡を中心とする遺構群の広がりを検討するうえで重要な知見になるとみられる。また、今回の調査結果が遺構群の中でどのように位置づけられるか、周辺の調査結果とあわせて検討していくべき課題である。

須恵器

601は、SD601出土の須恵器の蓋である。端部の形態から9世紀代に属するものと考えられる。



第31図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）6区出土遺物実測図
 弥生土器・管玉製作過程資料 縮尺1/3

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 7区

調査区概観

高岡環状線地区のほぼ中央に位置する。南北には弥生時代の様相を確認した6区と縄文時代の遺物を比較的多く出土した10・11区らに挟まれる。

ただし、7区においては少数ながら縄文土器が主な出土遺物といえ、様相としては南方の10区などと近いと思われる。

基本土層のうちⅣ・Ⅴ層を欠くが、Ⅲ-Ⅵ層間の位置には後世の攪拌を受けた黒褐色土が所在する。

遺構確認面はⅢ層とⅥ層の2面を有するが、Ⅲ層の残存は結果的に調査区の北側約200㎡程度の範囲にとどまった。Ⅲ層上面の検出遺構は、出土遺物から近世以降の帰属とみられる。

検出遺構

大型土坑群（SK701～712）

7区の中央部において最大径が1mを超える大型土坑群が確認された。北西端のSK701から南東端のSK711、そしてやや北側で確認されたSK712を含めると、計12基の土坑で構成される。全体の配置状況は、SK701からSK711まで緩やかに弧を描くように所在する。SK712は上記の弧から外れるが、規模などに類似性がみられること、またこのほかに同様の遺構が存在しないことから同様の性格をもつ可能性がある。

これらは形状の比較により小群に分かれる可能性がある。まず配置状況を見ると、SK701から順に中心間を結ぶラインを設定するにSK701-702ラインにSK703は位置しない。同様にSK703-704ラインにはSK705が位置しない。SK705-708ラインには中間にあるSK706・SK707が位置するが、遺構の中心を通ることを厳にするならばSK705-706ラインとSK707-708ライン、又はSK705-708ラインとSK706-707ラインに分割される。いずれのラインを想定してもSK709-710・712ラインとは重ならず2基1組と考えることができる。

SK701・SK702は側面に傾斜変換点があり、下位の掘方にやや方形を意識した痕跡が確認された。SK703・SK704は同一弧上の他の土坑に比して小規模である。SK705・SK706は底部が傾斜するが、その方向は東方が低いという点で一致する。SK707については平面に比して深度が浅く、他の土坑と類似性が見いだせず、上記の弧状に位置するものの性格の異なる遺構の可能性がある。SK708については底面が傾斜する点でSK705やSK706に類似するが、傾斜方向が南から北に向かって下がる点で異なる。SK709・SK710・712は他の土坑に比べて掘削深度が深いが、上部から下部に向かって徐々に狭くなる点や、覆土に共通性がみられる。

以上のように大型土坑群は2基1組と考えることができる。ただし、その歴史的正確は不明であり、帰属時期についても出土遺物がなく詳細は不明であるが、遺構検出面やその上位土層の堆積状況、及び覆土の状況から、概ね縄文時代に帰属する可能性がある。



第32图 石塚蛸保遺跡 (高岡環状線地区) 5・7区全体图 縮尺1/400

大型土坑各詳細

土坑SK701は、長軸約2.8m、短軸約1.98m、深さ約0.81mをはかる。平面は不整形、断面は中位以下が筒状を呈するが全体は不整形なロート状をなす。覆土は5層に分層され、

最下層には炭化物を多く含む黒色粘質土が堆積するほか炭化木材が山上している。中位以下の壁面形状からやや方形を意識して掘削した痕跡が確認された。

土坑SK702は、長軸約1.94m、短軸約1.62m、深さ約0.61mをはかる。平面形状は不整形、断面形状はレンズ状を呈する。覆土は6層で人部分は遺構面上位に堆積する包含層である。SK701と同様、中位以下の壁面で方形を意識したような痕跡が確認された。

土坑SK703は長軸約0.8m、短軸約0.76m、深さ約0.34mをはかる。平面形状は不整形、断面形状は隅丸方形を呈する。覆土は5層で包含層と地山流入土が大半を占め、底部付近に黒色粘質土の堆積が確認できる。一連の土坑群の中ではやや小型の土坑である。

土坑SK704は、長軸約0.56m、短軸約0.52m、深さ約0.34mをはかる。平面形状は不整形、断面形状は半円形または隅丸方形を呈する。覆土は3層で大半は包含層が占め、底部付近に黒色粘質土の堆積が確認できる。上記のSK703とともにやや小型の規模である。

土坑SK705は、長軸約1.16m、短軸約1.10m、深さ約0.83mをはかる。平面形状は不整形、断面形状は不整形を呈する。底部は傾斜し南東側が深い。覆土は6層で大半は包含層が占め、東側で壁面崩落の痕跡が認められる。底部は南東隅に最深部をもつため底面そのものは傾斜しているが、この特徴はSK706とも共通する。

土坑SK706は、長軸約1.22m、短軸約1.18m、深さ約0.76mをはかる。平面形状及び断面形状は不整形を呈する。底部は傾斜し南東側が深い。覆土は5層である。東側から底部にかけて地山質の土の流入が多く確認される。

土坑SK707は、長軸約1.90m、短軸約1.68m、深さ約0.22mをはかる。平面形状は不整形、断面形状は不逆台形を呈する。覆土は1層で地山質の土を多く含み、微細な炭化物粒を微量含む。他の土坑の覆土の一部に確認される土質である。平面規模はSK701・SK702と同規模ながら深さが浅いという点で異なる。土坑群の中に類似性をもつ遺構がなく、一連の遺構群から除外すべき可能性も考えられる。

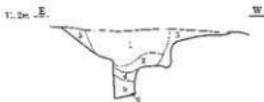
土坑SK708は、長軸約1.82m、短軸約1.02m、深さ約0.95mをはかる。平面形状は不整形、断面形状は不逆台形を呈する。覆土は5層で大半は包含層である。南西側からの地山質の土の流入が確認される。

土坑SK709は、長軸約1.34m、短軸約1.26m、深さ約1.15mをはかる。平面形状は不整形、断面形状は不逆台形を呈する。覆土は8層で上位の黒褐色土は包含層、下位に黒色粘質土が堆積する。複数回の壁面崩落の痕跡や地山流入の痕跡が確認できる。

土坑SK710・712は、長軸約1.64m、短軸約1.44m、深さ約1.17mをはかる。平面形状は不整形もしくは不整形、断面形状は不整形を呈する。覆土は8層で堆積状況はSK709に類似し、ほぼ全体に渡る壁面崩落が確認される。検出段階では双方が切り合うものと認識していたが、掘削調査の結果、同一遺構であることが判明した。

土坑SK712は、長軸約1.42m、短軸約1.24m、深さ約1.14mをはかる。平面形状は不整形、断面形状は不逆台形を呈する。覆土は11層で東側からの地山流入土が確認される。位置関係はこの土坑群の並びから外れるものの形状等の類似性が高いことから同上坑群に加えた。

SK701



- 1 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 2 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 3 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 4 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 5 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 6 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一

SK702



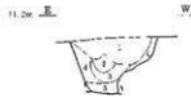
- 1 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 2 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 3 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 4 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 5 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 6 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一

SK705



- 1 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 2 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 3 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 4 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 5 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 6 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一

SK706



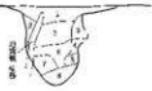
- 1 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 2 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 3 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 4 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 5 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 6 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一

SK709



- 1 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 2 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 3 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 4 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 5 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 6 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一

SK710



- 1 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 2 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 3 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 4 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 5 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一
- 6 1000.0 表層の腐植層 1.20m 2.00 腐植層の厚さが不均一

第33図 石塚精保遺跡（高岡環状線地区）7区大型土坑群
各土坑土層断面図 1 縮尺1/40

SK703



- 1 1980年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 2 1981年 築地土層断面（土層2） 築地土層が埋め尽くす
- 3 1981年 築地土層断面（土層2） 築地土層が埋め尽くす
- 4 1981年 築地土層断面（土層2） 築地土層が埋め尽くす
- 5 1981年 築地土層断面（土層2） 築地土層が埋め尽くす

SK704



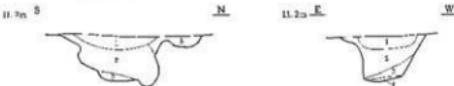
- 1 1980年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 2 1981年 築地土層断面（土層2） 築地土層が埋め尽くす
- 3 1981年 築地土層断面（土層2） 築地土層が埋め尽くす

SK707



- 1 1980年 築地土層断面（土層2） 築地土層が埋め尽くす

SK708（南北）（東西）



- 1 1980年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 2 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 3 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 4 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 5 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす

SK712



- 1 1980年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 2 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 3 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 4 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 5 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 6 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 7 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 8 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 9 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす
- 10 1981年 築地土層断面（土層2） 遺跡の中心部を築地土層が埋め尽くす

第34図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）7区大型土坑群
各土坑土層断面図2 縮尺1/40

山土遺物

縄文土器

702は、包含層より出土の条痕文系の深鉢の体部である。外方に向かって「S」の字状に緩やかに立ち上がる器形をもつ。内面全体にヨコ方向ないしタテ方向のナデにより成形される。体部外面の上半部に磨消縄目文を施す。体部外面の下位は板状工具により擦過がみられる。くびれ部外面は磨消縄目文を施した後、ヨコ方向の沈線文を4条巡らせる。胎土の色調はにぶい黄褐色を呈する。

下層確認トレンチからは深鉢701及び703が出土したが双方は同一個体と考えられる。胴の最大径22.6cm、底径11.8cmをはかる。底部より「S」字状に緩やかに立ち上がる器形をもつ。口唇部及び外面全体にナメ方向の縄目文を施す。口縁端部は工具を押し付け、波状口縁をつくり出す。口縁部から体部下半にかけてナデにより成形される。体部内面は、板状の工具による擦過により砂流がみられる。底面に網状圧痕がみられる。胎土の色調は灰白色を呈する。内外面は部分的に被熱した痕跡がみられる。

7区出土の縄文土器については、概ね中期～後晩期に属するものである。

中世

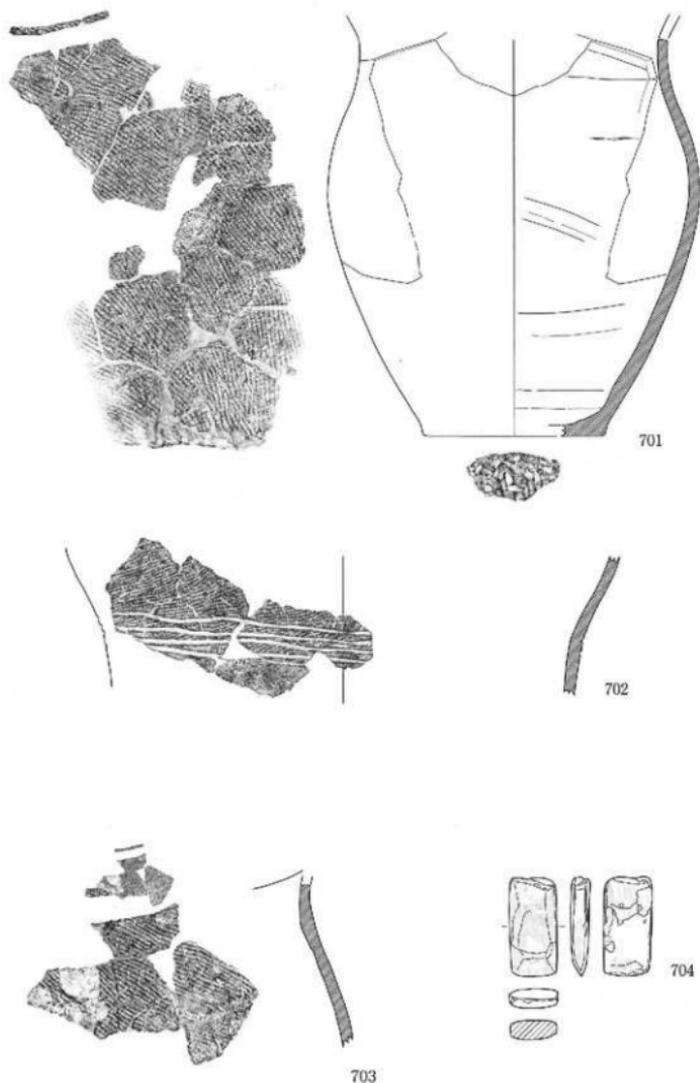
7区東側に位置する現代溝より珠洲の甕の破片が2点、鉢2点、砥石1点が出土した。

甕は、外面を押圧文により成形するものと叩打文を施すものの2種がみられる。押圧文を施すものは内面を同心円叩打文により成形する。焼成は不良で胎土の色調は灰黄色を呈する。珠洲編年のI期に属すると思われる。

一方の叩打文を施す甕は、内面を縦列叩打文により成形する。胎土の色調は灰色を呈し焼成は良好である。叩打文の様相から珠洲編年のII～III期に属すると思われる。

鉢については、口縁部と体部が各1点出土した。前者は、外方に向かってほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部はやや肥大する。内外面は強いナデにより成形される。胎土は灰白色を呈し焼成は良好である。

体部については、緩やかに内湾し立ち上がる器形である。内外面はロクロナデにより成形されるが、成形時の擦過により部分的に砂流痕がみられる。内面は焼成により表面が灰色に変色する。焼成は良好である。



第35図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）7区出土遺物実測図 縮尺1/3

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 8区

調査区の概要

高岡環状線地区の中央やや北東に位置する対象面積1,000㎡の調査区である。当初は本区を南北に分割し個別に屋外調査を実施したが、本書では双方を統合し報告する。

基本土層の高低差から旧地形を勘案するに、往時における当該地は必ずしも高所ではなかったとみられ、集落等の造営には望ましくなかった可能性がある。しかしこの事由により本区は上下2層が卒うじて残存することとなった。

基本土層は隣接の7区と同様で、IV・V層を除く全ての土層が確認されている。ただし、上層(III層)からの検出遺構も近世以降に帰属する可能性がある。また調査区北半部ではIII層こそ堆積していたが、同層を確認面とする上層遺構は検出されなかった。

検出遺構

本区北半部の遺構はすべてVI層上面(第2面)で検出した。一方の南半部においては、東側部分を除きトド2層が確認され、上層ではピット15基、土坑1基、溝状遺構2条が確認されている。以下に主なものを述べる。

土坑SK801

調査区の西側で検出した二等辺三角形に近い平面形状の土坑である。長軸270cm、短軸250cm、深さ15cmをはかり、長辺の端部はピット状に凹む。

長辺を軸に反転した位置にSD801があるが、双方は分離しており且つSD801がSK801を切る。覆土は茶褐色粘質シルトを呈する。

土坑SK802

調査区の西側で検出した。不整形ながら東西310cmをはかる大型の遺構である。覆土も他の遺構と同様に茶褐色粘質シルトを呈するが、底面に炭化物がやや多く含まれる。

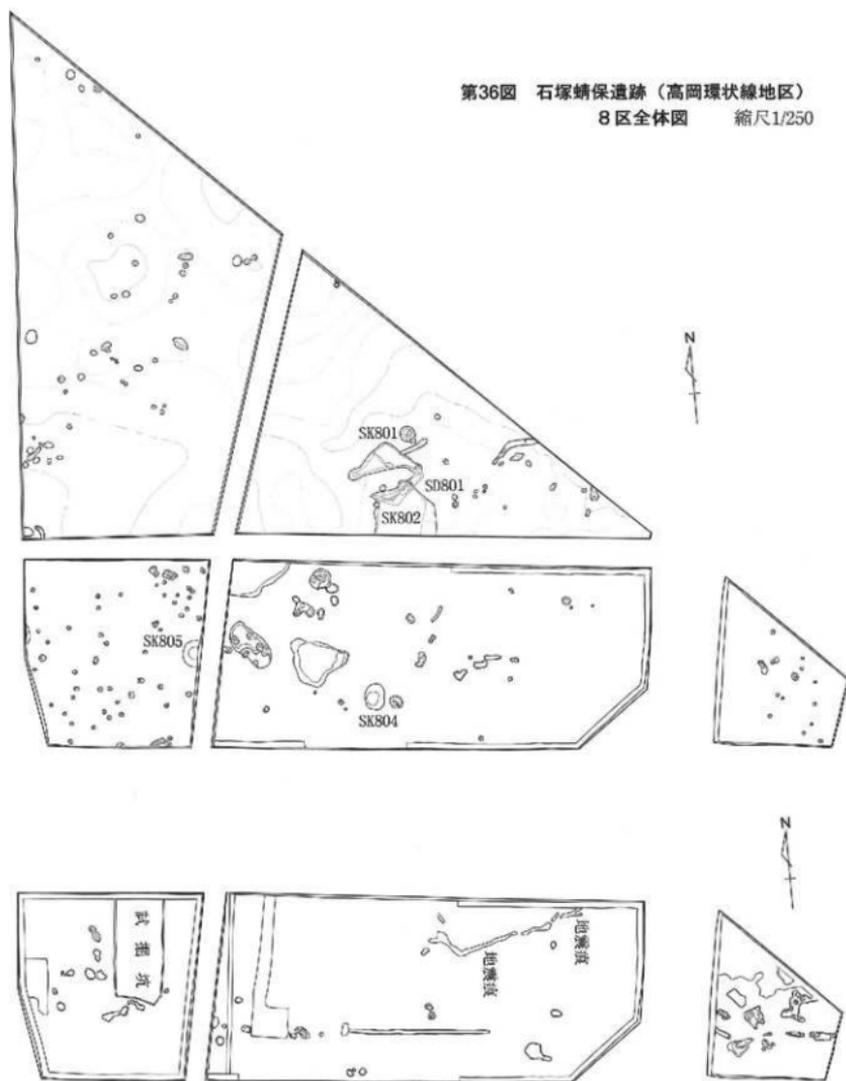
溝状遺構SD801

調査区の西側で検出したほぼ直角に屈曲する溝状遺構で、全長150c、幅27cmをはかる。SK801とSK802を切る。断面形状はU字型である。

土坑SK804

本址については掘削深度も1m程度あり、周辺より酸化が進み固く締まった面が確認された。側板や枠板は確認されていないが索掘りの井戸跡の可能性も考えられる。土層断面からは枠板の存在が推測されるが、底部に達するものではなく判然としなない。

第36圖 石塚崎保遺跡 (高岡環状線地区)
8区全体圖 縮尺1/250



上段：8区下層遺構全体圖 下段：8区南半部上層遺構全体圖

土坑SK805

調査区西側で確認された土坑である。全容は不明であるが、底部が緩やかに弧を描く鍋底状の断面を呈し掘削深度も1m弱をはかる比較的遺存状態の良い遺構である。

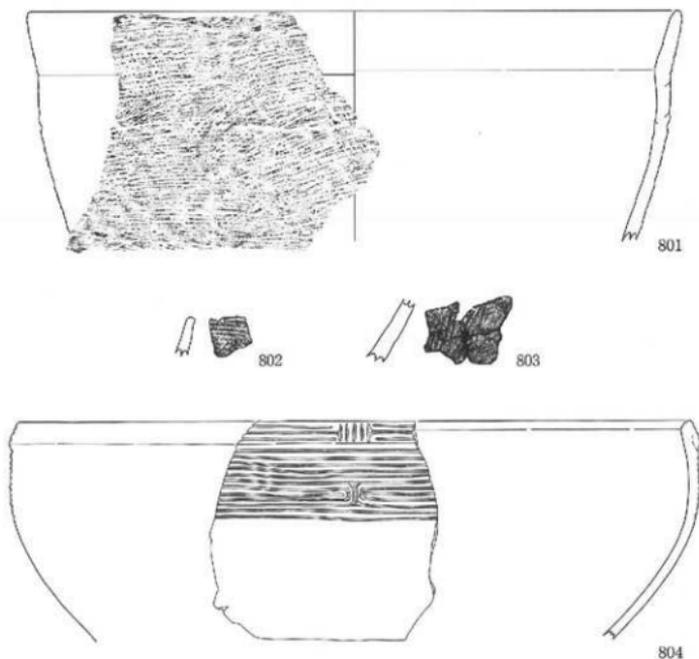
土層断面観察の結果、覆土最上層は基本土層Ⅲ層であり、比較的古い時期に帰属する可能性がある。覆土の共通性などからSK804らと同時期に帰属する可能性が窺える。

出土遺物 縄文土器

当該調査区からは近現代のものが多く出土したが、少数ながら縄文土器も出土している。図面37に掲載の801は、8a区のⅢ—Ⅵ層間に堆積する黒褐色土中から出土した。器面全体に不定方向の条痕文が施される粗製深鉢であり、口縁部はゆるく外反する。縄文時代晩期のものと思われる。

804は、Ⅲ層より出土した長竹式に比定されるとみられる縄文時代晩期の浅鉢である。口径40.3cm、残存高13.5cmを呈する。外面に縦位短沈線文と横位平行沈線文、及び赤彩が施される。内外面ともナデ及びミガキにて調整される。焼成は良好である。

802及び803は、細片にて詳細不明ながら縄文時代晩期に帰属するものと考えられる。前者には条痕文、後者には不明瞭ながら縄文が確認できる。いずれもⅢ層からの出土である。



第37図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）8区出土遺物実測図

縮尺1/3

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 9区

調査区概観

本区は南側調査区の西端に位置する。10区と隣接し、北側には一般道を隔てて7区が所在する。9区から12区までは同一時期に調査したため調査区間をまたがる遺構が存在するほか、遺物の時代などに共通性があり、本書では適時他地区の概要なども記述に加えるものとする。

調査区においては基本土層ⅠからⅥ層までの全6層を確認している。Ⅰ層は表土（旧耕作土）であり、Ⅱ層は昭和40年代の土地改良時の客土である。

Ⅲ層の黄灰色粘質土は泥流堆積物と考えられるが北側では薄くなることから、北側に微高地が、そして南側には低地の広がる旧地形が復元される。このⅢ層は弥生時代以降の遺構確認面と目されるが、土地改良時に削平を受けており遺構の残存状態はよくない。

Ⅳ層及びⅤ層は縄文時代晩期の遺物包含層である。とくに新しい時代の遺物は含まれない。Ⅴ層下には漸移層を挟んでⅥ層の灰白色粘質土を呈する地山が堆積する。

検出遺構

溝状遺構

Ⅲ層上面にて溝状遺構8条、Ⅵ層上面にて竪穴状遺構1基を検出している。ただしこのうちの溝状遺構SD901及び907は昭和時代の攪乱の可能性がある。

中世から近世にかけては、珠洲や寛永通宝を出土したSD905のほか、中世土師器の皿、珠洲、越中瀬戸、染付を出土したSD908が検出されている。

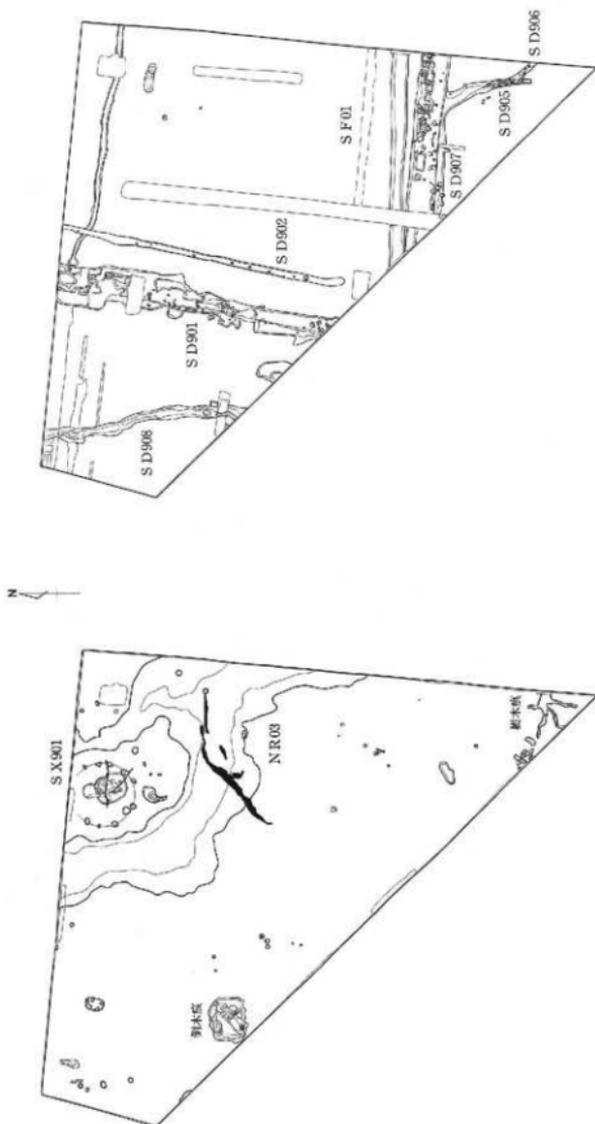
概して蛇行する傾向にあることから河川跡の可能性もある。また10・11区に達する2条の溝は道路遺構SF01の両側側溝である。

竪穴状遺構SX01

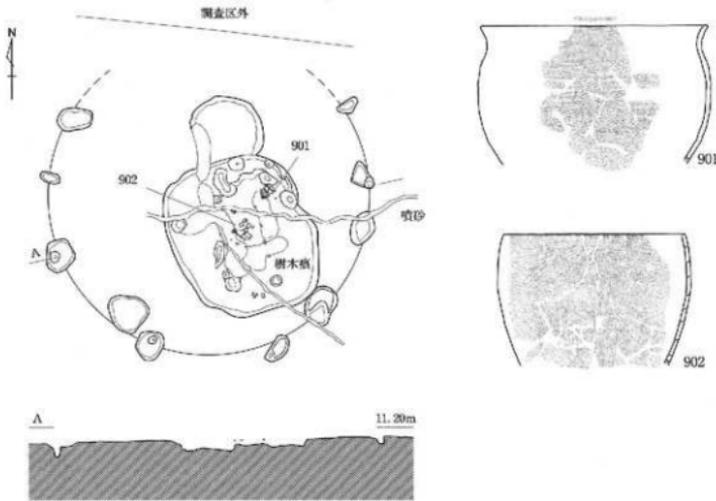
9区は、10区で検出された縄文時代晩期の河川跡NR03の上流部に位置し、これに取り囲まれる9区北東部は半島状の微高地となる。その狭い微高地で検出されたSX901は、小型の竪穴状の掘り込みとその周囲を環状に廻る小ピットで構成される。ここでは竪穴状遺構と仮称し記述をすすめる。

検出の契機はⅤ層下部を掘削中に縄文土器が出土したことによるもので、結果的に竪穴のプランを確認したのはⅥ層上面となったが、本来の竪穴はⅤ層中から掘り込まれたものと考えられる。竪穴は2.6m×2.2mの隅丸長方形を呈する小規模なもので、深さは22cmである。炉址等の痕跡は認められなかった。河川跡に面して何らかの構造物があった可能性が考えられる。

2点の粗製の深鉢（901・902）が竪穴底面より浮いた状態で出土している。竪穴の周囲には径5.2mの環状にピットが廻るが北側は調査区外となる。ピットは径64cm以下の円形ないし楕円形を呈し最も深いものでも深さ20cmである。



第38図 石塚崎保遺跡（高岡環状線地区）9区 調査区概観図
 上段：上層遺構 下段：下層遺構 縮尺1/400



第39図 石塚峠保遺跡（高岡環状線地区）9区
 竪穴状遺構SX901概観図 縮尺1/80

出土遺物

縄文土器

本遺跡出土の縄文土器の大半は、深鉢や鉢などで構成される粗製土器である。概して底部から胴部中央まで緩やかに膨らむ器形をもつが、905は直線的に外反し、口縁部は丸棒状工具で口縁端部に短く平行沈線を連続する。903は、胴部中央から口縁部にかけては肩部で屈曲し緩く外反するもので、口縁部に最大径がくる。

これに対し901は、肩部で屈曲し口縁部が弱く外反するもので胴部に最大径がくる。一方905は直線的に外反し902及び904は肩部が張り、また口縁部が内反する。

口縁部は平口縁を主体とするが、904などは整形痕跡を残したような小波状になり、901は、外面口縁端部には縄文を回転施文する。905については丸棒状工具で口縁端部に短く平行沈線を連続する。

石器

9区からは縄文時代のもつとみられる打製石斧が2点出土した。周辺地区を含め石器の殆どはV層（遺物包含層）から出土しているが、同層からは縄文晩期前葉から中葉の縄文土器が確認されており、石器についても土器の年代に対応するものと考えられる。

906は、SX902より出土の打製石斧である。残存長6.15cm、幅5.7cm、厚さ1.35cmを呈する。大部分を欠損しており全容は不明だが短冊形を呈すると思われる。調整は周縁のみみられる。

907は、9区のV層から出土した打製石斧である。残存長6.8cm、幅6.95cm、厚さ1.35cmを呈する。多くを欠損しており全容は不明であるが撥形を呈すると思われる。両側縁部の中央を直接打撃により両面調整する。端部に直接剥離は認められない。

古代 須恵器

910は溝状遺構SD904から出土した須恵器の杯Aである。底部はヘラ切り後無調整である。911はSD903と904から破片が出土した。底部はヘラ切り後の棒状圧痕がみられる。908は9区表土中より出土した壺の口頸部である。平安時代前期のものである。

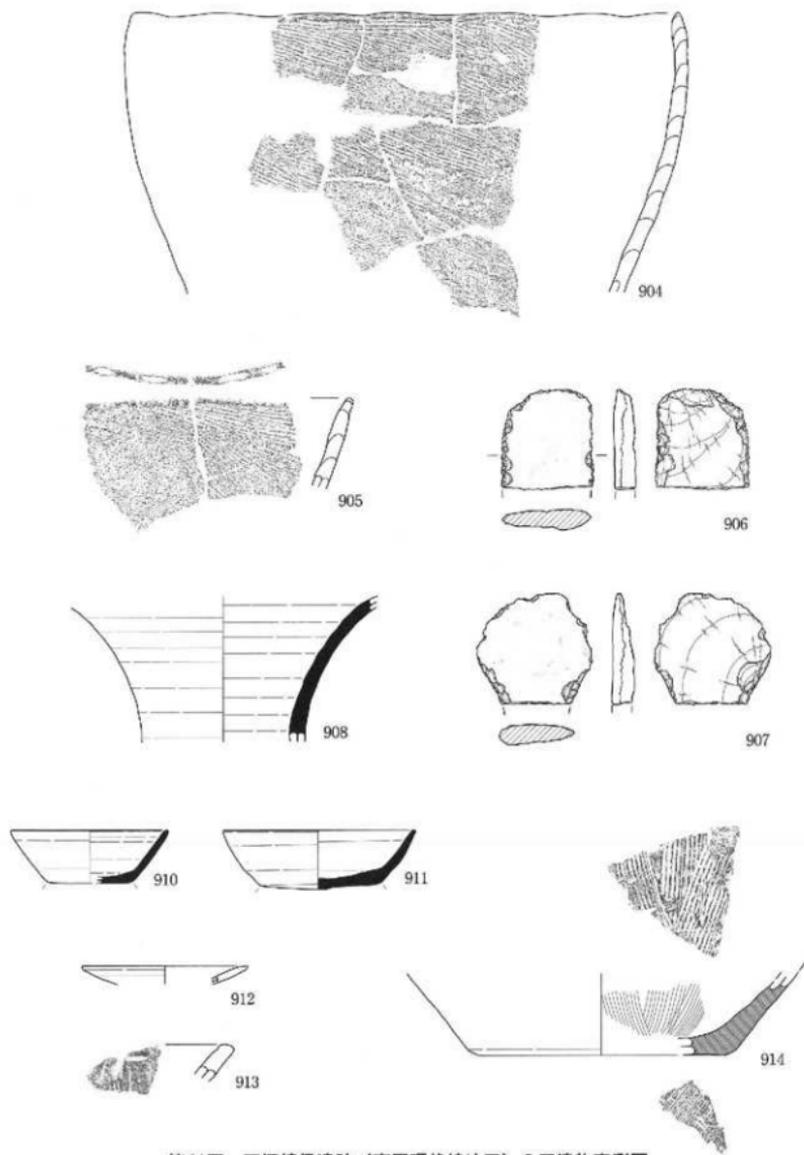
中世後期

912は口縁部が外傾して立ち上がる形状のもので、端部の形状は上方へ摘み上がる。概して周辺地区も含め同種のものは口縁部を小さく打ち欠くものや油煙の痕跡を残すものが多くあり、灯明皿に用いられたことが分かる。

913は、SD905より出土の土師器の撚鉢である。口縁端部に水平な面をもち、内面には沈線がみられる。914は、9区Ⅲ層上面で出土した珠洲のすり鉢である。底径14.8cm、卸目は12条である。



第40圖 石塚蛸保遺跡（高岡環状線地区）9区遺物実測圖 縄文土器 縮尺1/3



第41図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）9区遺物実測図
縄文土器・打製石斧・須恵器・土師器・珠洲 縮尺1/3

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 10・11区

調査区概観

高岡環状線地区の中央部に位置する。調査区の分割は旧耕作地の畦畔や農道を基本としてきたが、10区と11区にはこれが希薄で、また遺構や出土遺物の共通性が見受けられることから、本書では同時掲載するものとする。

調査区においては基本土層の全て、すなわちⅠ～Ⅵ層を確認している。

Ⅰ層は表土（旧耕作土）であり、Ⅱ層は昭和40年代の土地改良時の客土である。Ⅲ層の黄灰色粘質土は泥流堆積物と考えられるが北側では薄くなることから、北側に微高地が、南側には低地が広がる旧地形が復元される。このⅢ層は弥生時代以降の遺構確認面となるが、土地改良時に削平を受けており遺構の残存状態はよくない。

Ⅳ層及びⅤ層は縄文時代晩期の遺物包含層である。Ⅴ層下には漸移層を挟んでⅥ層の灰白色粘質土が堆積する。遺構確認面はⅢ層とⅥ層の各上面である。

検出遺構

Ⅲ層上面では溝状遺構17条、土坑2基、溜池状遺構1基、噴砂痕を検出した。Ⅵ層上面では焼土遺構2基と多数の倒木痕、噴砂痕を検出し、第4面では河川跡2条、土坑9基、ピット群、遺物集中地点6カ所を検出した。以下、主要なものについて詳細を述べる。

縄文時代

倒木痕

Ⅳ層上面において多数の倒木痕を検出した。河川跡NR03以东の10・11区に20基以上ある。平面形は円形や楕円形ないし隅丸長方形を呈する。

規模は長軸1.5～9.0mで、4.0m前後のものが多く、堆積土はⅣ層～Ⅵ層が斜行ないし反転、あるいはブロック状に混在したものである。縄文時代晩期後葉頃のものと考えられる。

なお、倒木痕は重複がなく倒れた方向も一定しないことから、短期間の人為的な倒木の可能性も考えられる。また、一部の倒木痕には焼土層をとともなうものがあり、根株が焼かれた可能性もある。

河川跡

Ⅵ層上面で検出されたNR03は9区から延び、NR04と合流して南へ流れる河川跡である。2区などで検出した河川跡に比べ規模は小さく深度も40cm程度である。縄文時代晩期の遺物包含層形成時には流路の深さは半減している。

流路の底面や肩には土坑が分布する。流路より北東側にはピット群、遺物集中地点、倒木痕が偏って分布する。堆積土の下層には遺物が含まれず、その上にⅤ層及びⅣ層が堆積する。NR04は北東から南西方向へ流れる浅い河川跡で、西部でNR03に合流する。



第42図 石塚峠保遺跡（高岡環状線地区）10・11区
上層遺構全体図 縮尺1/400



第43図 石塚蛸保遺跡（高岡環状線地区） 10・11区
下層遺構全体図 縮尺1/400

焼土遺構

IV層上面にて焼土遺構2基を検出した（SX1001・1002）。明瞭な掘り込みではなく炉址とは考え難い。10・11区の倒木痕に部分的にみられる焼土層と関連した遺構の可能性が考えられる。

土坑

VI層上面にて9基の土坑を検出した。隅丸方形のSK1010を除く8基の平面形は円形基調である（SK1002～1009）。SK1002は断面が袋状を呈するが、それ以外は円筒状である。

河川跡NR03・04周辺に限定的に分布する傾向にある。出土遺物はないが層位的には縄文時代晩期前葉頃のものともみられる。

ピット群

VI層上面にてピットを多数検出している。上層観察によりピットはV層中からの掘り込みであることが分かる。

これらは河川跡NR03の東側に分布し複数のブロックを形成している。概ね4箇所ブロックがあり各ブロックの広がりは10～20mの範囲である。このようなピット群は隣接する9区や12区では確認されていない。

ピットの規模は径10～30cmの円形を呈し、最大深はVI層上面から10～20cm、V層中からは20～30cmとなる。覆土は炭化物を微量に含む単一の土層を示し、柱根を確認できたものはない。出土遺物もない。

なお、ピットの配置を詳細にみると2基のピットが対配置になる可能性がある。この仮定にたてば対配置になるピット間の距離は10～60cmである。

包含層中の遺物集中地点

V層中には遺物集中地点（SX1003～1008）が6箇所認められる。いずれも河川跡NR03の東側にあり、ピット群の周囲を取り囲むような配置である。

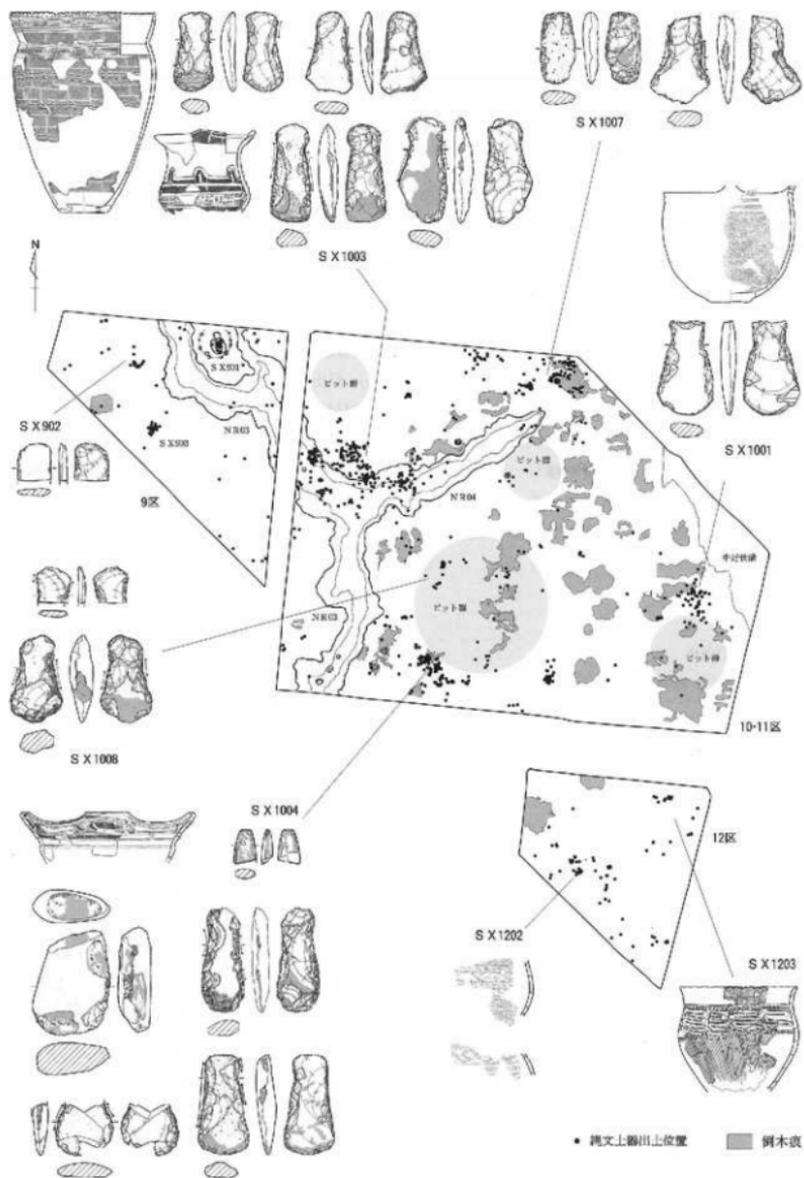
出土する縄文土器は晩期の前葉から中葉である。また打製石斧が14点、礫器と磨製石斧が1点ずつ出土している。

縄文時代～中世後期

噴砂痕

10区東部から11区にかけて複数時期の噴砂痕が検出されている。最も新しいものは、中世前期の溝状遺構SD1003・1004新段階を切り、近世以降の溜井状遺構SX1009に切られる噴砂である。灰色の細砂やシルトが液状化現象によって噴出したものである。天正13（1586）年に中部地方を襲った天正大地震の存在が考慮される。

これに対し、平安時代の溝状遺構SD1003及び1004では古段階に切られる地割れも存在する。地割れはIII層を主に南北方向に引き裂くものでIII層が地割れ内に落ち込んでいた。地割れの幅は最大で4.5m、深さは45cmである。地割れ内から古代の土師器・須恵器が少量出土している。



第44図 石塚蛸保遺跡(高岡環状線地区) 9~12区遺物集中地点 縮尺1/800

また、IV層上面でも噴砂が検出されたがIII層には達していない。IV層中の最も新しい遺物が縄文時代晩期後葉であることから晩期末頃の噴砂痕と推測される。

古代

道路遺構SF01（溝状遺構SD1003・1004）

III層上面で検出した東西方向に直線的に並走する溝状遺構である。

西側は9区に達し、東側は中世後期とみられるSD1005に切られる。幅0.45～1.00mをはかる。心々距離は10区で4.1～4.3m、11区では6.0mである。

上層観察から、SD1003・1004ともに2回の掘り直しが認められ、その土層も酷似することから同時期の共存と判断するとともに、道路遺構の可能性が浮上する。

覆土は各層の出土遺物により、古段階・中段階・新段階の3時期に分類できる。平安時代の土師器杯（1028～1030）・須恵器杯（1401～1031）が出土した古段階はIII層ブロックを多量に含む土で埋め戻されている。掘削時期は明らかではないが9世紀後半に溝状遺構が一度廃絶したことが想定される。

中段階は砂質土が数層堆積し、古代末から中世前期の土器（1039）が出土している。1046は珠洲I期に遡る可能性がある。そして新段階は、珠洲等の中世前期の遺物がわずかに出土する。炭化物を多量に含む砂質土で短期間に埋没している。

中世

土坑SK1001

11区の中世後期以降の溝状遺構SD1005の底面から検出された。SD1005の掘削より古いものである。

平面形は隅丸方形で深さ65cmの掘り込みの西側に2段のテラスがつく。中世前期の井戸跡の可能性もある。上段のテラス上には北端に北宋銭（皇宋通寶）1枚、南端には珠洲の甕の胴部片が置かれていた。

溝状遺構SD1005

11区東端を南北に走向する中世後期とみられる溝状遺構である。底面を検出しているが、東側の立ち上がりが調査区外にあるため幅8m以上の規格を呈する。断面は逆台形状で深さは1.2mである。

覆土の下層、とくに西側肩部において中世の土師器皿（1032・1034～1037・1040）がややまとまって出土した。溝状遺構の西側より廃棄されたとみられる。土師器皿は全て小型品で灯明皿として使用されている。

近世以降

溜井状遺構SX1009

調査区の中央よりやや北西に位置する、長軸8.4m、短軸5.5m、深さ1.0mを呈する土坑で

ある。北壁には階段状に地山（VI層）を掘り残しており、この掘り残しを境に東西で土や遺物量の違いがあり、新口があるようである。

出土遺物としては、珠洲、近世の陶磁器がみられる。

溝状遺構SD1006

調査区中央のやや北側を、やや弧を描きながら東西方向にはしる溝状遺構である。SD1001・1002の交点付近から東方への分水路とみられる。

東方にはSD1005埋没後に杭列をとまなり平坦面があり、そこへ導水したようである。ただし近現代のものであった可能性もある。

出土遺物

縄文土器 精製土器

本遺跡からは縄文晩期前葉から後葉の縄文土器が出土しており、このうち精製土器の器種では深鉢、鉢、浅鉢の器種がみられる。

深鉢は1001、1002、1004、1005がある。

1001は4単位の台形波状口縁をもつ。口縁部文様帯には楕円文とそれを囲む「Ω」状の沈線文と方形区画文を配し、文様間には抉るように施文した三叉文を充填している。口縁部と頸部には段差があり、口縁部を段状にして浮き出させている。

1002の口縁部は2単位の小波状口縁と推測される。口縁部文様帯には縄文施文をするのみである。また1001と同様に口縁部に段を形成する。胴部文様は上端あるいは下端を、列点文を含む平行沈線と区画し弧線文とT字三叉文を配するものが変化したもので、弧線文相互とT字三叉文の下端相互が連結して沈線区画を形成し、その部分に縄文を充填施文して帯縄文化させたものと捉えられる。

1004は口縁部部をへら状工具で刻んでいる。地文はまず単節縄文を横位施文し、次に2種の結節縄文の結節部のみをその上から回転施文している。口縁部と肩部には平行沈線と区画し羊歯状文を施文している。大洞B-C式の文様手法をとるが、羊歯状文が胴部に下がっており、そうした文様構成は中層式の特徴であると思われる。

鉢は1003、1026、1027などが出土している。

1003は底部より膨らみながら立ち上がり、胴部中央からやや内傾する丸い砲弾形の器形である。口縁部には3条の太い並行沈線が廻る。底面はやや上げ底に作られている。

1027は底部のみである。2条1対の沈線による同心円文が2条施文されている。底面は丸底で器面全体がよく磨かれている。1027も1003と同様な底面の作りであることから、ここでは鉢に分類した。

浅鉢は1023、1024、1025、1027などがみられる。1023は底部から若干反るように外反し上半からやや内反する。外面には種子と思われるような圧痕がみられる。

1024、1025は器面調整や文様が非常に近似している浅鉢であることから同一個体の可能性がある。ともに緩やかに内反しながら立ち上がり、外面口縁部に1条の凹線が廻るものである。1025では口唇部におそらく4単位の小突起が付くことから、近似する1024でも同様に付されるものと思われる。

1001、1002、1003は御経塚式、1004、1005は中皿式と思われる。

縄文土器 粗製土器

本遺跡で出土した縄文土器の大半を占めるのが粗製土器である。器種は深鉢や鉢などがある。器形は底部から胴部中央まで緩やかに膨らむ。胴部中央から口縁部にかけては、肩部で屈曲し緩く外反するもので口縁部に最大径がくるもの（1007、1009、1010、1013）、肩部で屈曲し口縁部が弱く外反するもので胴部に最大径がくるもの（1011）、肩部で屈曲し口縁部が直立気味になるもの（1012、1015、1014）、ほぼ直線的に外反するもの（1008、1017、1018）、肩部が張り、口縁部が内反するもの（1016）がみられる。

口縁部は平口縁を主体としているが、整形痕跡を残したような小波状になるもの（1013など）もみられる。また、丸棒状工具の側面を押圧して口唇部がヒダ状になるもの（1007や1008など）や、同工具の先端部を押圧したもの（1011）、ヘラ状工具で縦位キザミを連続するもの（1012）がある。口縁部内面には浅い凹線が廻るもの（1013、1017）や細い沈線が廻るもの（1007）があり、その多様性が窺える。

1012は施文部位が外面を向いているが、本来角頭状であった口縁端部が外へ張り出したものであり、施文部位は変わらず施文方法が押圧からキザミへ変化したものと考えられる。

粗製土器の外面調整方法をみると、外面に縄文を施文するものと、外面に条痕を施すものとに大別できる。ただし前者はすべて横位施文であり、後者はすべて深鉢である。

縄文時代 石器

10・11区からは17点の石器が出土している。器種は打製石斧15点・礫器1点・磨製石斧1点であり、石器組成という点では器種構成に乏しく打製石斧が突出して多い。これらは第V層（遺物包含層）から出土しているものであつが、同層からは縄文晩期前葉から中葉の縄文土器が確認されており、これらの土器の年代に対応するものと考えられる。

磨製石斧（1068）は非常に小型であり刃部が欠損している。また、礫器（1067）はやや大型の扁平礫に大きな剥離痕や敲打痕などがあり、すべての剥離面に磨耗痕が認められる。しかも磨耗面はすべて平滑していることから研磨痕の可能性を窺わせる。

打製石斧は、不明なものを除き形態から短冊形と楕形の2大別がされ、後者ではさらに細分が可能である。また、側縁部の調整でも大別が可能である。両側縁部を直接打撃による剥離調整のみが施され両側縁部の稜は鋭利なもの（1052・1057・1066）と、これ以外の12点は、両側縁部を直接打撃による剥離調整が施された後、敲打調整により側縁部の稜を入念に潰している。敲打調整は両側縁部に施されるものが大半を占めるが、1059・1064・1065は片側縁のみ敲打調整が認められる。

刃部については、調整を施すものが7点確認されており、表面や裏面のどちらか一方に片面調整が施されるもの（1053・1054・1057・1060）や、両面調整が施されるもの（1052・1058・1062）などが見受けられる。ただし1052・1058では、刃部周辺の剥離痕が磨耗痕より新しいことから、刃部再生がおこなわれていたと考えられる。

7点の刃部形態には、円刃（1052・1057・1062）、偏刃（1053・1058）、尖刃（1054・1060）などが認められる。上記以外では、素材剥片の鋭い縁辺をそのまま使用する6点（1055・1056・1061・1063・1064・1065の）が確認されている。

古代 土師器

椀・皿が10・11区のSD1004（古段階）から出土している（1028、1029、1030）。1029は静止系切りで内外面赤彩、1030は内面黒色処理である。平安時代前期のものである。

古代 須恵器

須恵器の杯がSD1004から出土している（1031）。平安時代前期のものである。

中世

土師器の皿、珠洲、青磁がある。SD1007・1008の古段階、SD1009などからの出土であるが出土量は少ない。12世紀後半から13世紀前半にややまとまりがある。

土師器の皿は手づくね成形のみで、ロクロ成形のものはみられない。1039は器高が低く、高台状を呈する皿である。口縁端部は丸く収めるが、外面を弱く面取りしている。白色系の皿である。12世紀中頃から13世紀前半（宮田Ⅱ期）のものと考えられる。

1038は厚手・平底の皿で、ナデの下端に稜をもつタイプである。口縁部端部はわずかに内湾気味で丸く収める。13世紀後半から14世紀前半（宮田Ⅲ期）のものである。2点とも海綿骨針を含む。珠洲は壺・甕・片口鉢・搦鉢がある。

1042はロクロ成形の壺の肩部で、素文の長胴壺である。1043は広口壺の破片で、頸部に櫛目文（連弧文）を施す。胴部は綾杉状の叩きを施すと思われる、その破片が少量出土している。13世紀（吉岡Ⅱ～Ⅲ期）のものである。

1046は片口鉢で、口径19.8cmの中型品である。体部は丸みをもつて立ち上がり、口縁端部は大きく挽き出して外反させている。内面は素文であるが、ロクロ痕が強く段が残っている。底部は静止系切り痕である。12世紀後半から13世紀前半の甕口縁部との類似から同時期のものと考えたい（吉岡Ⅱ期）。

長頭形の口縁部をもつ大甕（1044）も上記と同時期のものと考えられる。1045は口縁内端に面をもつが、素文である。15世紀前半（吉岡Ⅴ期）である。龍泉窯系の青磁は椀（1047）が1点のみである。口縁部は直口で、体部に鑰連弁文を有する（太宰府編年Ⅱ類）。13世紀前半と考えられる。

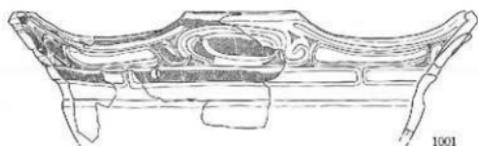
1032～1037、1040は口縁部が外傾して立ち上がる形状の土師器の皿で、端部の形状は肥厚させるもの（1032）と、上方へ積み上げるもの（1032～1037、1040）がある。

口径7.2～11.2cmの小型品で占められ、中・大型品とのセット関係は捉えられない。手づくね成形の皿は16世紀前半から16世紀末（宮田Ⅵ期）に該当するものと判断される。

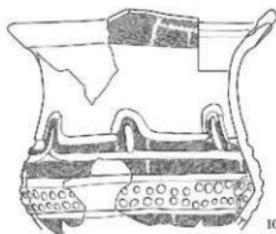
口縁部を小さく打ち欠くものや油煙の痕跡を残すものが多くあり、灯明皿に用いられたことが分かる。土師器の搦鉢（1041）もこの時期のものと考えられる。

近世陶磁器

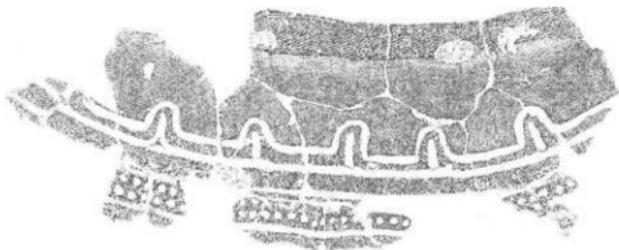
近世以降の陶磁器は10・11区のSD1001・1002を中心に出土している。肥前陶磁が多い。1048及び1051は、内面の釉剥ぎ後に製品の付着を防ぐアルミナ砂を塗布する。1050は底部を穿孔し、植木鉢等へ転用されたものである。



1001

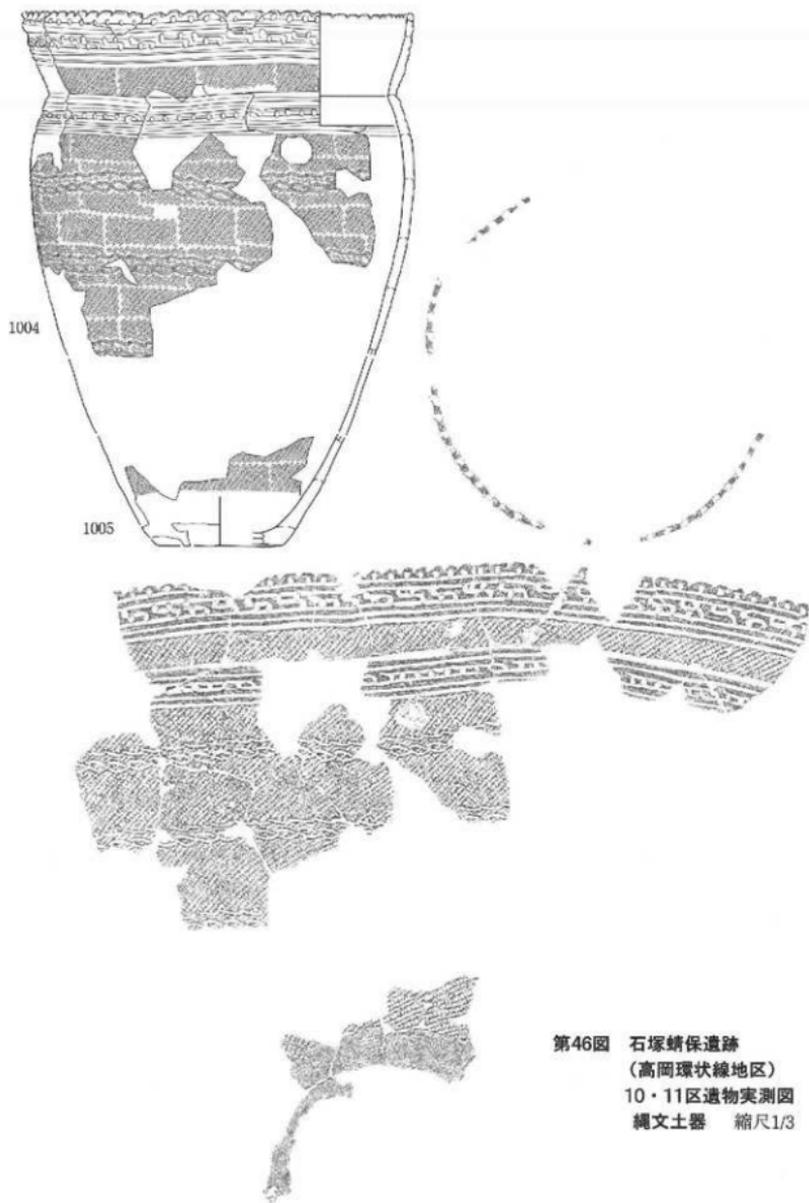


1002

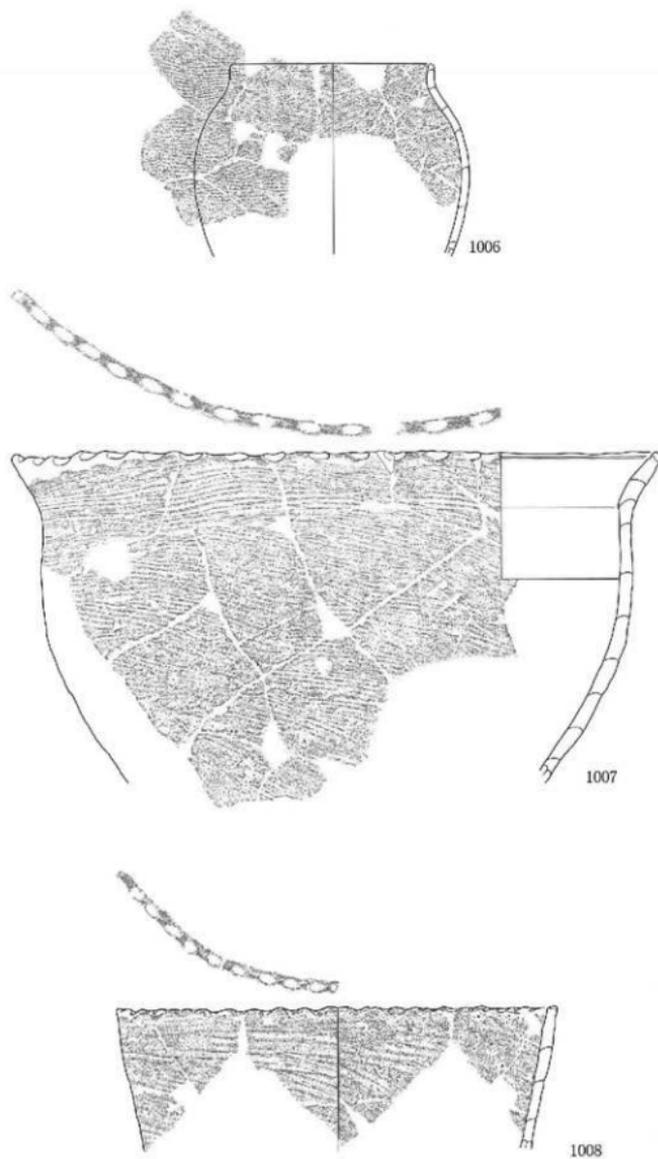


1003

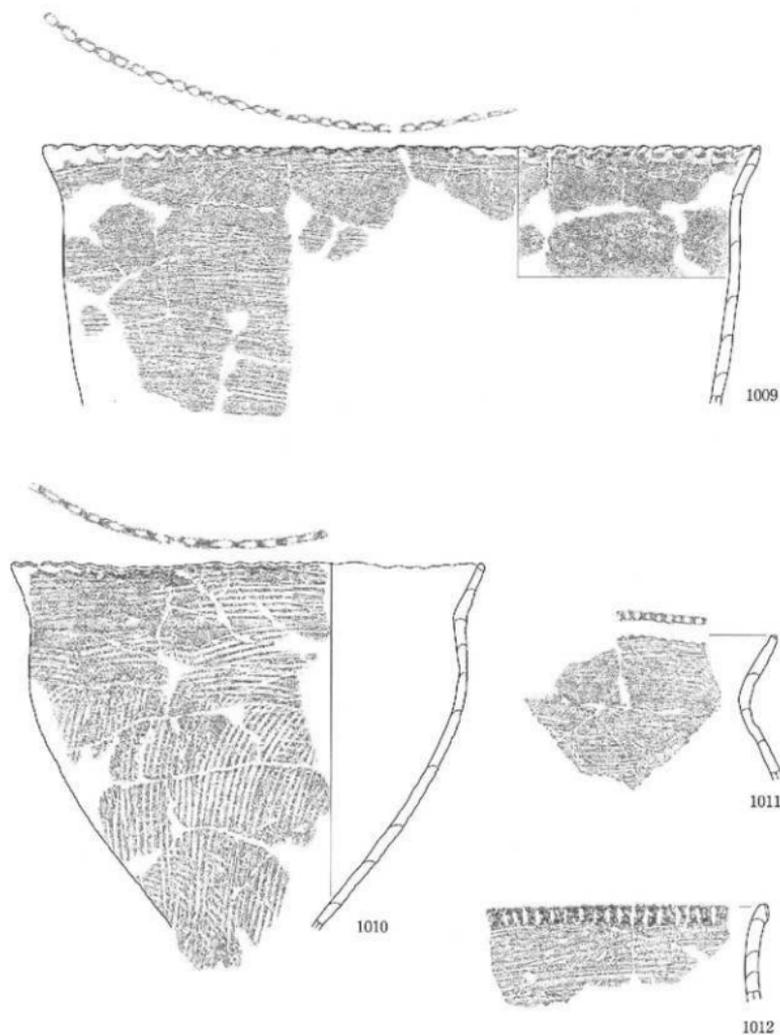
第45図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）10・11区遺物実測図
縄文土器 縮尺1/3



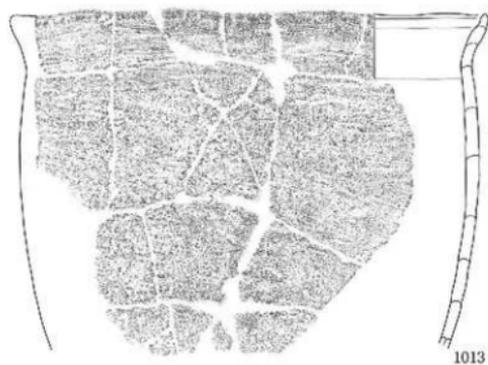
第46図 石塚靖保遺跡
(高岡環状線地区)
10・11区遺物実測図
縄文土器 縮尺1/3



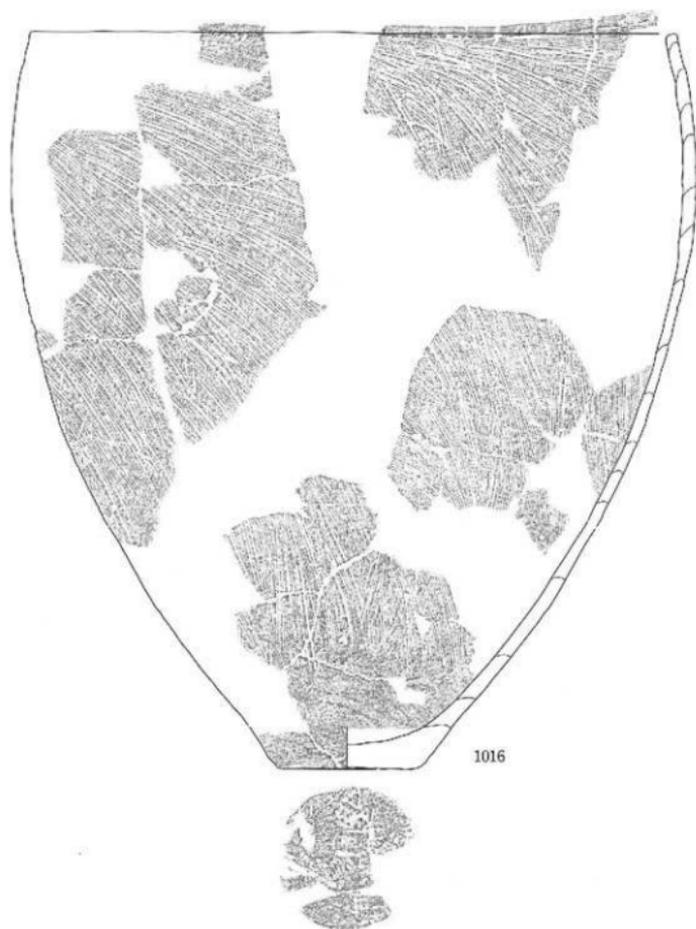
第47図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）10・11区遺物実測図
縄文土器 縮尺1/3



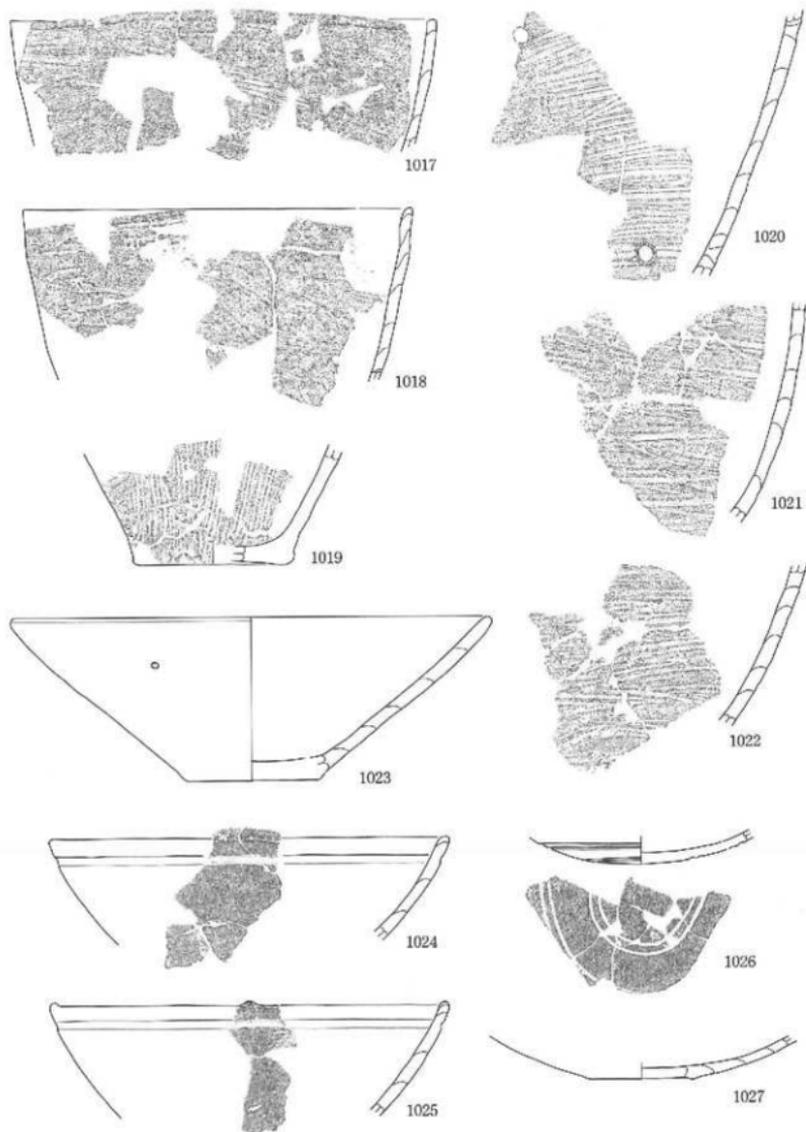
第48图 石塚峠遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測图
縄文土器 縮尺1/3



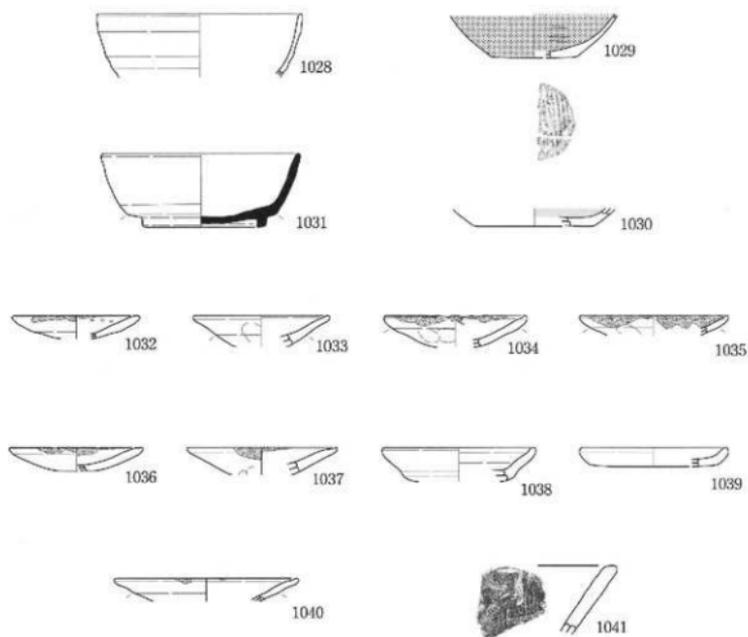
第49圖 石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）10・11区遺物実測圖
縄文土器 縮尺1/3



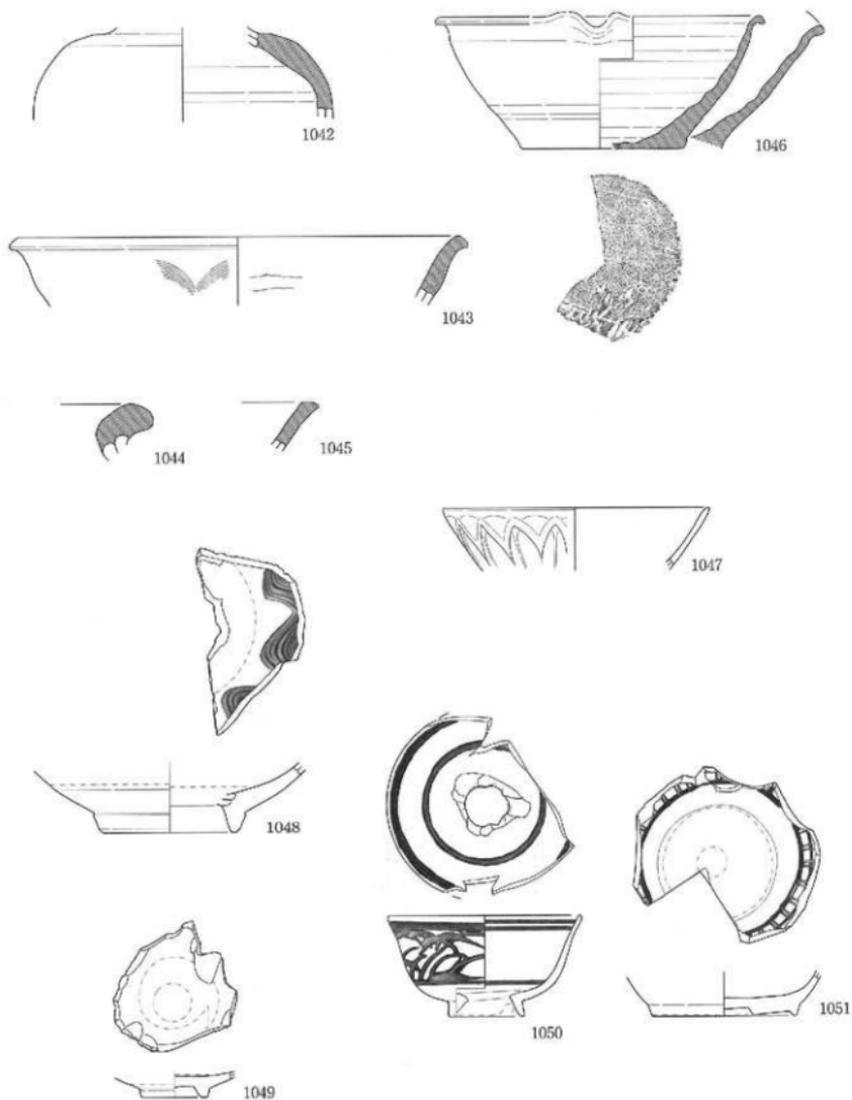
第50図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）10・11区遺物実測図
縄文土器 縮尺1/3



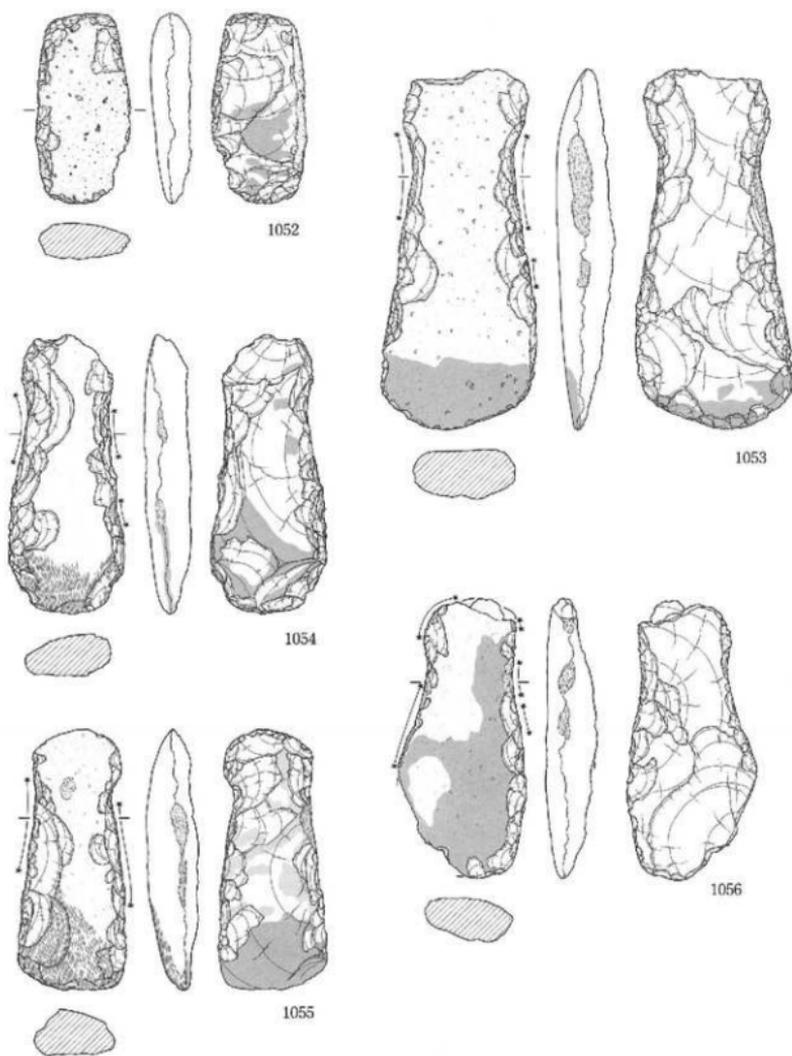
第51図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）10・11区遺物実測図
縄文土器 縮尺1/3



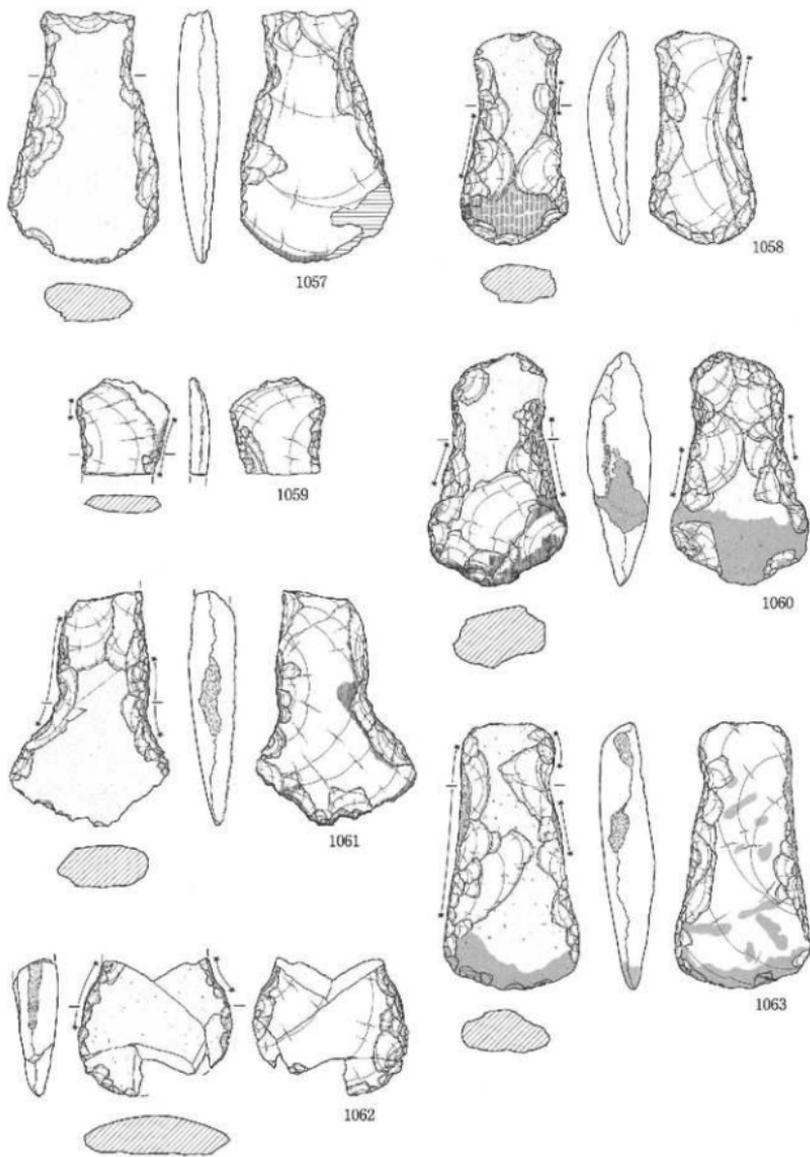
第52図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）10・11区遺物実測図
土師器・須恵器 縮尺1/3



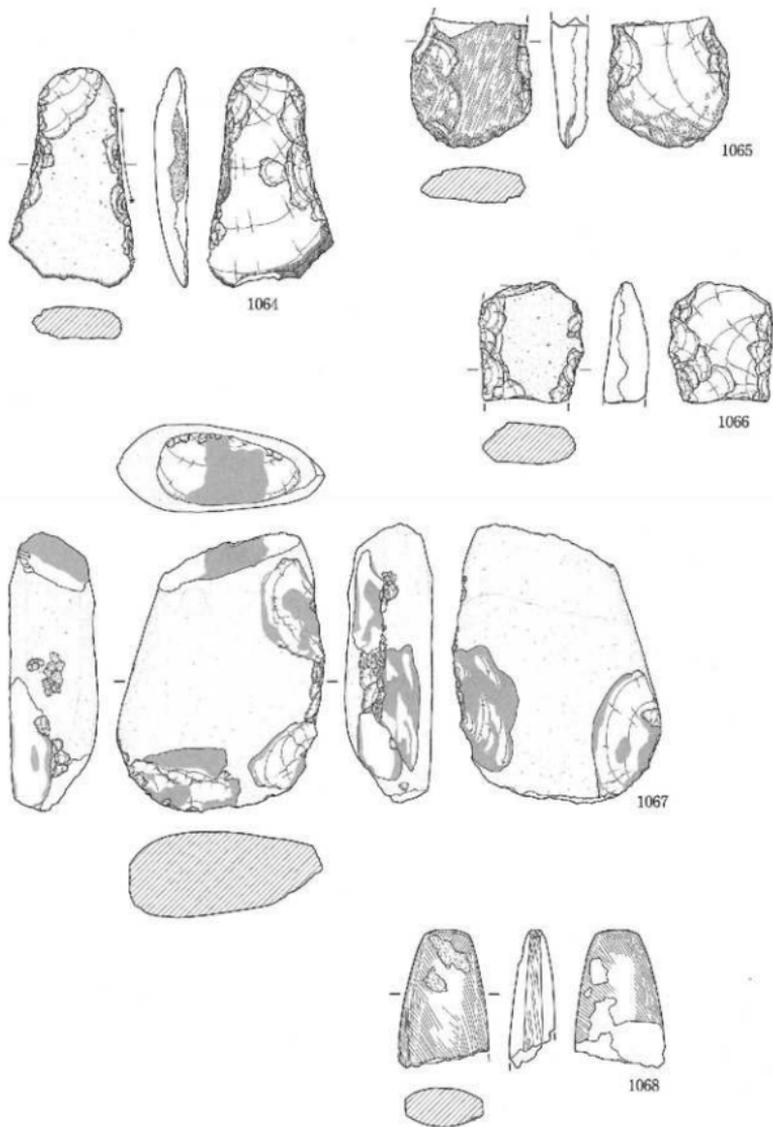
第53图 石塚靖保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図
珠洲・青磁・陶磁器 縮尺1/3



第54図 石塚崎保遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図
打製石斧 縮尺1/3



第55図 石塚峠遺跡 (高岡環状線地区) 10・11区遺物実測図
打製石斧 縮尺1/3



第56图 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）10・11区遺物実測図
打製石斧・礫器・磨製石斧 縮尺1/3

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区） 12区

調査区概観

石塚蜻保遺跡（高岡環状線地区）の最南東に位置する調査区である。

本区では基本土層のⅠ層からⅥ層までのすべてが確認され、昨季までの耕作土（Ⅰ層）と昭和40年代の圃場整備時客土（Ⅱ層）の直下には弥生時代以降の遺構確認面となるⅢ層が堆積する。

Ⅳ及びⅤ層は縄文時代晩期の遺物包含層である。8区等の他地区においては同種の土層中に近世の遺物も含まれているが、そちらでは後世の攪乱を受けた可能性が高い。

Ⅴ層直下には地山（Ⅵ層）が堆積する。遺構確認面はⅢ層とⅥ層の2面である。出土遺物などから相対的に、前者は弥生時代以降、後者は縄文時代後晩期のものとみられる。

検出遺構

溝状遺構SD1201・1202

調査区中央部のⅢ層上面で検出された東西方向に並走する2条の溝状遺構である。ともにⅢ層ブロックを多量に含む土で埋め戻された後、掘り直しがなされている。

縄文土器、土師器、須恵器が出土しており、相対的には古代以降の遺構と考えられる。

方形周溝状遺構SX1201

調査区中央やや西側のⅢ層上面で検出された。幅69cm、最大深22cmの溝状遺構が方形に廻るものである。

溝状遺構に囲まれる内側は東西5.6m、南北5.1mのほぼ正方形である。西方にはSX1201の北辺と同方向の溝状遺構がはしる。

方形周溝墓の可能性も考えられようが、出土遺物がなく時期は不明である。

倒木痕

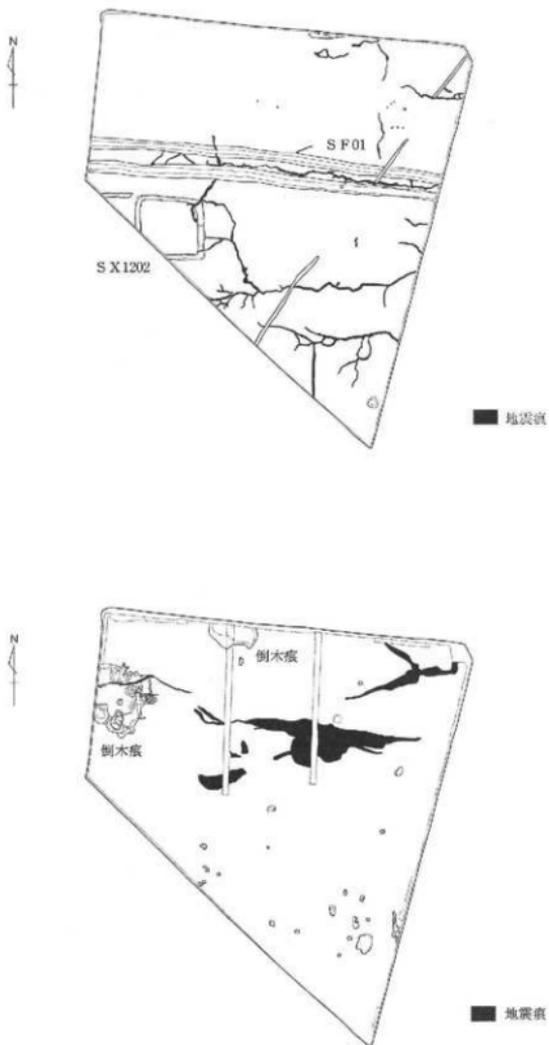
Ⅳ層上面より2基の倒木痕を検出した。10・11区にも分布する倒木痕の南端にあたる位置である。西側の大型の倒木痕では炭化物と焼土が検出されている。

このような炭化物と焼土は10・11区でも大型の倒木痕にみられ、また人為的に根株を焼いた可能性が考えられるため遺構扱いとする。

遺物集中地点SX1202・1203

調査区の中央やや南西部（SX1202）と北東部（SX1203）から縄文時代の遺物を集中する地点を検出した。

ともにⅣ層中にて検出した上記倒木痕の外側に分布する。SX1202では、中屋式の1106及び1107が、SX1203では下野式土器1109が出土している。



第57図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）12区調査区全体図
 上段：上層遺構 下段：下層遺構 縮尺1/400

出土遺物

縄文土器

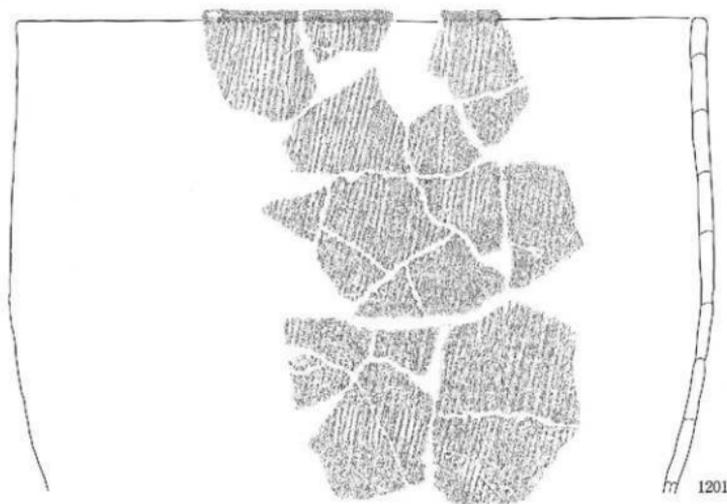
本遺跡からは縄文晩期前葉から後葉の縄文土器が出土している。本遺跡で出土した縄文土器の大半を占めるのがこの粗製土器である。本遺跡から出土した粗製土器の器種は深鉢や鉢などがある。

1204と1205はそれぞれ胴部上半に沈線区画内に「F」の字状入り組み文が配される。ともに中屋式と思われる。

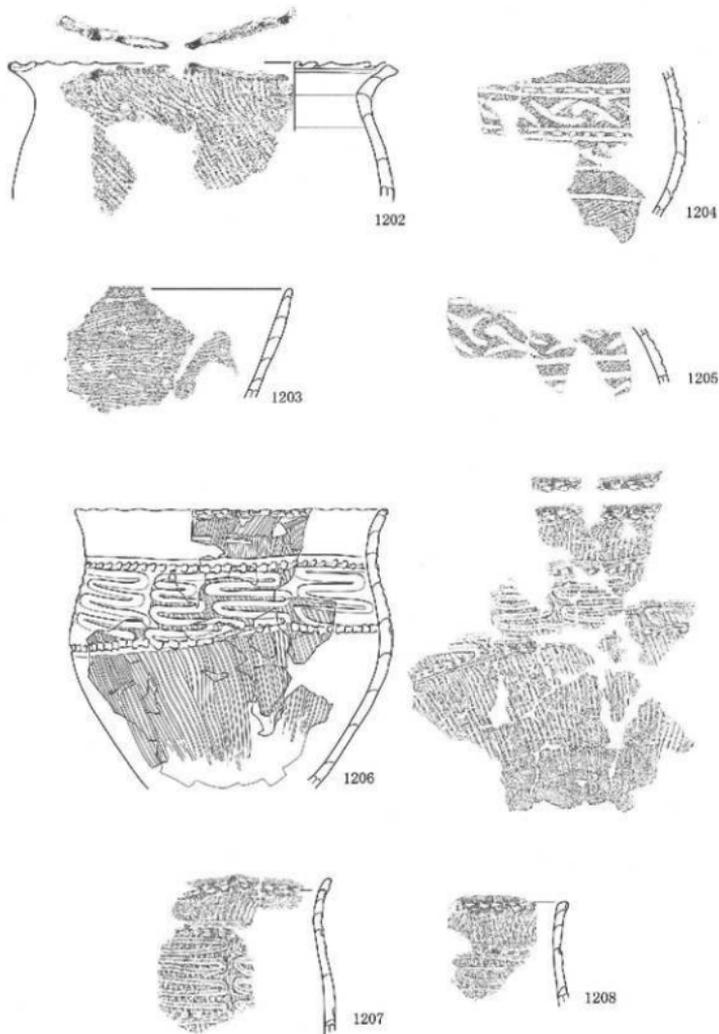
1206、1207、1208は同一個体の可能性がある。これらは地文に縦位の条痕を施文している。口縁端部には絡状体を連続して押し当てられていると思われる。肩部を沈線と列点文で上下区画し、区画内には鋸手文が崩れた蛇行沈線文が配される。沈線や列点文をよくみると草本類を使用して描いた痕跡をよく残している。下野式と思われる。

器形は底部から胴部中央まで緩やかに膨らむ。胴部中央から口縁部にかけては、くの字状の口縁部をもつもの（1202）、肩部で屈曲し口縁部が弱く外反するもので胴部に最大径がくるもの（1206、1207、1208）、肩部で屈曲し口縁部が直立気味になるもの（1201）、ほぼ直線的に外反するもの（1203）がみられる。

口縁部は平口縁を主体としているが、1202は外面口縁端部にB字状突起が付され、口縁部内面には浅い凹線が廻る。



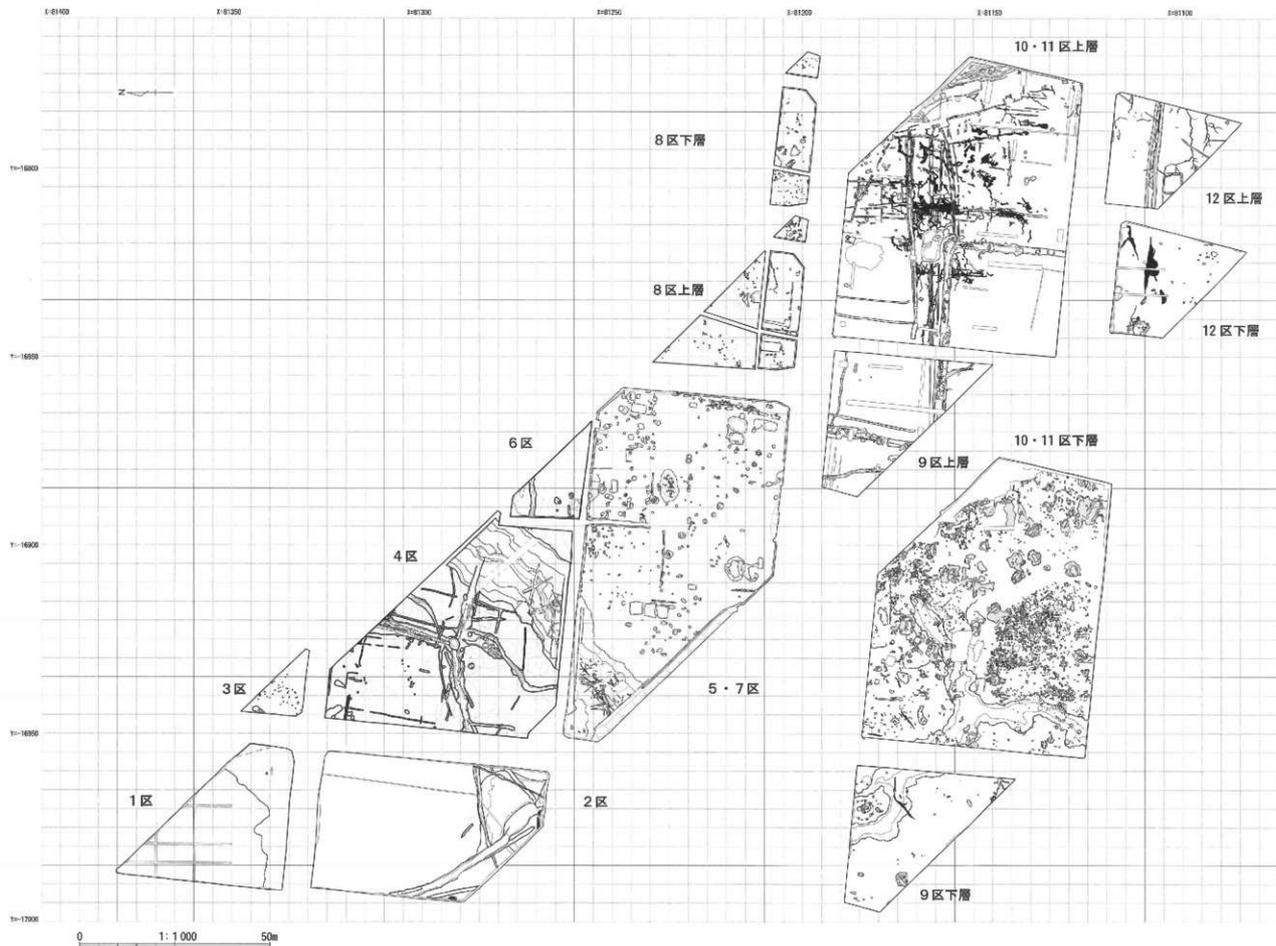
第58図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）12区出土遺物実測図 縄文土器 縮尺1/3



第59図 石塚靖保遺跡（高岡環状線地区）12区出土遺物実測図 縄文土器 縮尺1/3

引用・参考文献

- 石川県立縄文文化財センター 『金沢市米泉遺跡』1989
- 石川県立縄文文化財保存協会 『粟田遺跡発掘調査報告書』1991
- 池谷勝典・馬場伸一郎 「弥生時代飯田盆地における打製石斧の用途について」『生業』
中部弥生時代研究会第6回例会発表要旨集 2003
- 魚津市教育委員会 『吉野道跡発掘調査報告書』2000
- 金沢市縄文文化財センター 『中屋サワ遺跡Ⅴ—縄文時代編—』2010
- 酒井重洋 「縄文時代後期末から晩期中葉の土器について」『桜町遺跡調査報告書 総括編』小矢部市教育委員会 2007
- 酒井重洋 「中屋式土器」・「下野式土器」総覧 縄文土器 株式会社アム・プロモーション 2008
- 佐々木由香 「縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究」『古代』早稲田大学考古学会 2000
- 佐々木由香 「水場遺構」『なりわい』縄文時代の考古学5 同成社 2007
- 縄文セミナーの会 第5回 縄文セミナー—縄文時代晩期の諸問題』1992
- 珠洲市立珠洲歴史資料館 『珠洲の名産』1989
- 高岡市教育委員会 『高岡市縄文文化財分布調査概報』Ⅱ 下関地区・南条地区北西部の遺跡分布調査 1991
- 高岡市教育委員会 『高岡市縄文文化財分布調査概報』Ⅲ 南条地区南東部の遺跡分布調査 1991
- 高岡市教育委員会 『高岡市縄文文化財分布調査概報Ⅱ』1991
- 高岡市教育委員会 『石塚遺跡群調査概報（日本海ホーム地区）』Ⅳ 1996
- 高岡市教育委員会 『石塚・東木津遺跡調査報告』2001他
- 高岡市教育委員会 『石塚江之戸遺跡』『市内遺跡調査概報』XⅡ 2002
- 高岡市教育委員会 『中保B遺跡調査報告』2002
- 高岡市教育委員会 『石塚遺跡調査概報Ⅵ』2003
- 高岡市教育委員会 『石塚遺跡調査報告』2007
- 高岡市教育委員会 『石塚六方遺跡調査報告』2009
- 高岡市教育委員会 『石塚遺跡調査概報Ⅱ』2010
- 高岡市教育委員会 『下佐野遺跡調査報告Ⅱ』2011
- 高岡市教育委員会 『石名瀬A遺跡調査報告』2012
- 太宰府市教育委員会 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』2000
- 山中義文・千葉博俊 「射水平野周辺の古環境変遷」『PALYNO』No.5 2007
- ときめきウエディング株式会社・高岡市教育委員会 『石塚江之戸遺跡調査概報』 2001
- 砺波市教育委員会 『久東遺跡発掘調査報告Ⅰ』2004
- 砺波市教育委員会 『久東遺跡発掘調査報告書Ⅱ』2005
- 富山県文化振興財団 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査（遺物編）』1996
- 富山県文化振興財団 『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査』1996
- 富山県文化振興財団 『江尻遺跡・藁島遺跡発掘調査報告』2003
- 富山県文化振興財団 『黒河六日・黒河中老田遺跡発掘調査報告』2004
- 富山県文化振興財団 『下老子桜川遺跡発掘調査報告』2006
- 富山県縄文文化財センター 『富山県高岡市下佐野遺跡発掘調査報告書』2011
- 中沢道彦 「東日本における縄文時代の植物質資料の利用について」『考古学から見た東日本の特質』
考古学研究会東京例会第20回記念シンポジウム発表資料 2009
- 西野秀和 『御経塚式土器』『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション 2008
- 日本歴史学会 『縄文史研究』第15巻第1号 2007
- 根津明義 「古代越中における官制的標相と在地社会」『古代の越中』高志書院 2009
- 能登町教育委員会 『真瀧遺跡2010』2010
- 東和寺 「地下茎植物採集痕と考えられる掘り込み」『貝塚』57号 物質文化研究会 2001
- 藤尾慎 淳 「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 国立歴史民俗博物館 1993
- 北陸中世土器研究会編 『中・近世の北陸—考古学が語る社会史、権書房 1997
- 麻栢一志 「縄文時代の石器組成と概生—いわゆる「ナラ林文化論」へのアプローチとして—」
『大塚』第8号 高山考古学会 1984
- 麻栢一志 「原状地の打製石斧—砺波平野の縄文遺跡を例として」『人城』第25号 富山考古学会 2006
- 南 久和 「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観4』小学館 1989
- 山本直人 『縄文時代の植物採集活動—野生根菜類食料化の民俗考古学的研究』漢水社 2002
- 山本直人 『縄文時代の植物食利用技術』『なりわい』縄文時代の考古学5 同成社 2007

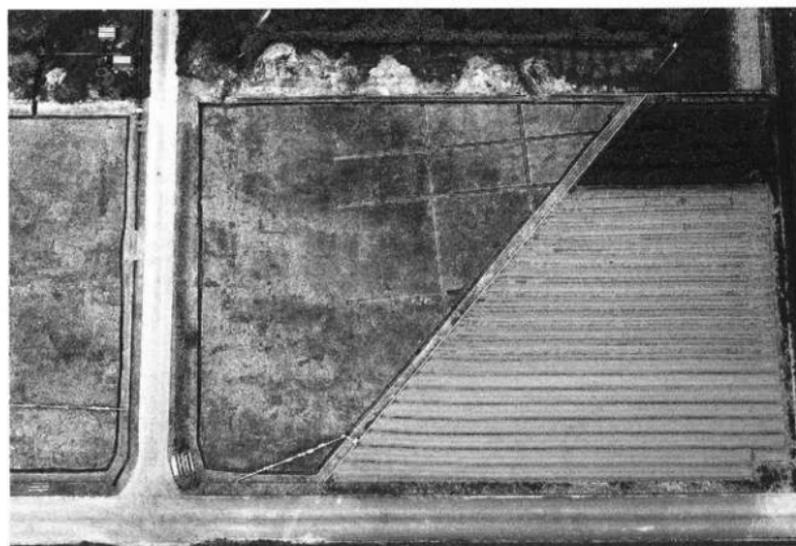


第60図 1～12区遺構全体図 縮尺 1/1000

写 真 图 版



1・2区 調査区全景（南西方向より）



1区 調査区全景



2区 調査区全景（南西より）



2区 河川跡 NR01（南東より）



2区 河川跡 NR01 （北西より）



2区 河川跡 NR01 （南方より）



2区 河川跡 NR01 （北西より）



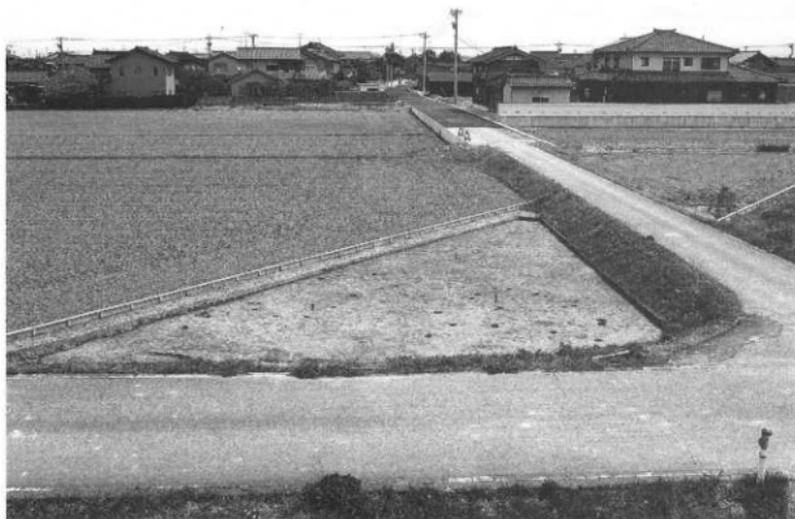
2区 河川跡 NR01 （南東より）



2区 河川跡 NR01 （北方より）



2区 トチ塚 SX201 検出状況 （北西より）



3区 調査区全景（西方より）



3区 調査区全景（南方より）



4・6区 調査区全景（西方より）



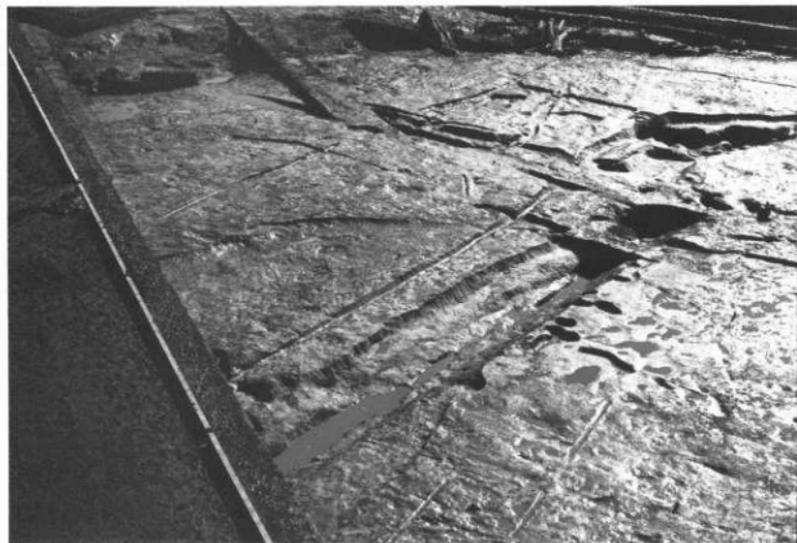
4・6区 河川跡 NR02 全景（南方より）



4区 河川跡 NR02 最深度土層堆積状況（南方より）



4区 河川跡 NR02 倒木（木道か） 南方より



4区 溝状遺構 SD402 （北西より）



4区 柵址 SA401 （西方から）



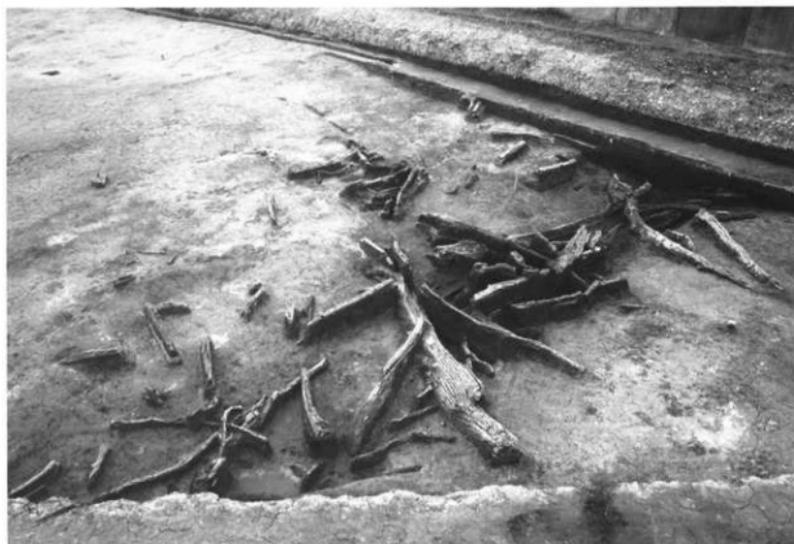
5・7区 調査区全景 (北西より)



5区 調査区全景



5区 河川跡 NR02 上層完掘状況（南西より）



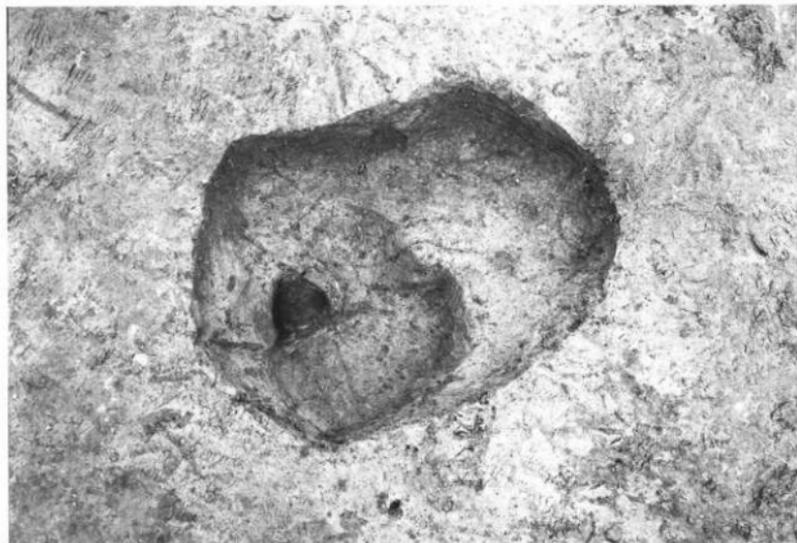
5区 河川跡 NR02（北方より）



4・6区 調査区全景



6区 土坑SK602土層堆積状況 (南方より)



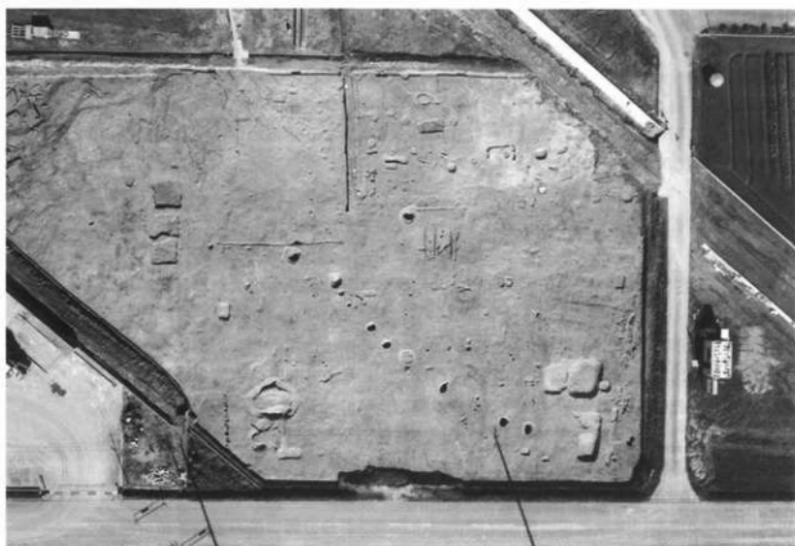
6区 土坑 SK601 遺物出土状況（南方より）



6区 土坑 SK602 出土弥生土器（北方より）



5・7区 調査区全景 (北西より)



7区 調査区全景



7区 土坑 SK701 完掘状況（東方より）



7区 土坑 SK712 完掘状況（東方より）



8区 調査区全景



8区 調査区全景（北西より）



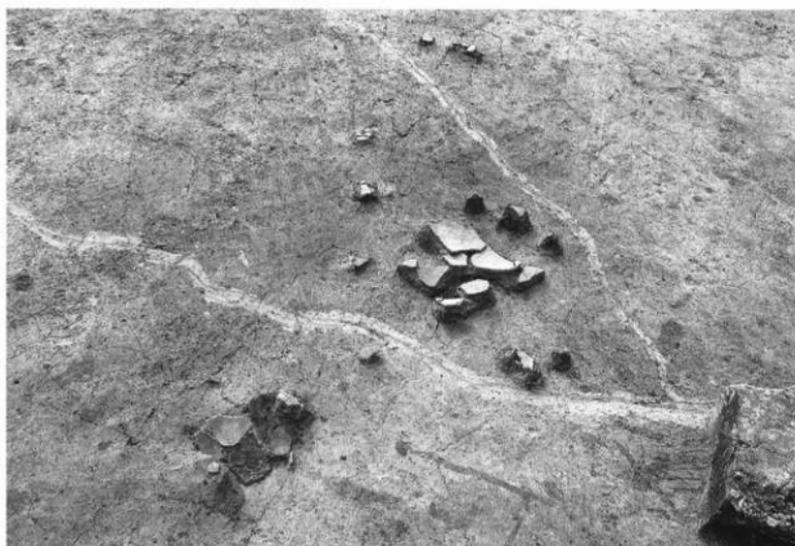
9・10・11・12区 調査区全景（北西より）



9区 調査区全景（南東より）



9区 竪穴状遺構 SX901 （南西より）



9区 竪穴状遺構 SX901 遺物出土状況 （北方より）



9・10・11・12区 調査区全景（西方より）



10・11区 調査区全景（西方より）



10・11区 道路遺構 SF01 (SD1003・1004) 東方より



10区 溝状遺構 SD1001・溜井状遺構 SX1009 (東方より)



10区 遺物集中地点 SX1003 （北東より）



10区 遺物出土状況 （北方より）



9・10・11・12区 調査区全景（南東より）



12区 調査区全景（南東より）



12区 道路遺構 SF02 (SD1201・1202) 東方より



12区 方形周溝状遺構 SX1201 (北方より)

報告書抄録

ふりがな	いしづかどんぼいせきちようさほうこく							
書名	石塚靖保遺跡調査報告							
副署名	県道高岡環状線建設工事ともなる発掘調査							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第25冊							
調査担当者	根津 明義 山口 辰一							
報告書編集者	根津 明義							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号 TEL 0766-20-1463							
発行年月日	西暦2013年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石塚靖保遺跡	富山県 高岡市 石塚	016202	202161	36° 43′ 53″	136° 58′ 39″	090521 ～ 111110	17,023㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
石塚靖保遺跡	散布地	縄文後期 縄文晩期 弥生中期 弥生中期 中世	縄文河川跡 弥生中期土坑 中世道路遺構 時期不明溝状遺構	縄文壜穴状遺構 中世区画溝 時期不明土坑		縄文土器 縄文打製石器 縄文磨製石器 弥生土器 弥生管玉未成品		

高岡市埋蔵文化財調査報告 第25冊

石塚靖保遺跡調査報告

— 県道高岡環状線建設工事ともなる発掘調査 —

2013年3月

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7番50号

印刷所 キクラ印刷株式会社
富山県高岡市福留 48-2

